

満韓ところどころ

夏目漱石

なんまんでつどうかいしや

南満鉄道会社なんまんでつどうかいしやについていたい何をするんだいと真面目まじめ

に聞いたら、満鉄まんてつの総裁さうざいも少し呆あきれた顔おまえをして、御前ごまえ

もよつぽど馬鹿ばかだなあと云いつた。是公ぜこうから馬鹿と云わ

れたつて怖こわくも何ともないから黙もくつていた。すると是

公こうが笑いながら、どうだ今度こんだいっしよに連れてつてや

ろうかと云い出した。是公ぜこうの連れて行いつてやろうかは

久ひさしいもので、二十四五年ぜん前ぜん、神田かんだの小川亭おがわていの前まえにあつ

た怪あやしげな天麩羅屋てんぷらやへ連れて行いつてくれた以来時々連

れてつてやろうかを余に向むかつて繰返くりかす癖くせがある。その

くせいまだ大した所へ連れて行ってくれた試ためしがない。

「今度こんだいっしょに連れてつてやろうか」もおおかたそ

の格かくだろうと思つてただうんと答えておいた。この氣

のない返事を聞いた總裁は、まあ海外における日本人

がどんな事をしているか、ちつと見て来るがいい。御

前みたように何にも知らないで高慢な顔をしていられ

ては傍はたが迷惑するからとすこぶる適切めいた事を云う。

何でも是公に聞いて見ると馬関ばかんや何かで我々の不必要

と認めるほどの御茶代などを宿屋へ置くんだそうだから、

是公といっしょに歩いて、この彪大ぼうだいな御茶代が宿

屋の主人下女下男にどんな影響を生ずるかちよつと見

たくなつた。そこで、じゃ君の供をしてへいへい云つて歩いて見たいなと注文をつけたら、そりやどうでも構わない、いっしょが厭いやなら別でも差支さしつかえないと云う返事であつた。

それから御供をするのはいつだろうかと思つて、面白半分に待つていると、八月半なかばに使が来ていつでも立てる用意ができてるかと思を押しした。立てると云えば立てるような身しんじょう上だから立てると答えた。するとまた十日ほどしていつ何日いつかの船で馬関から乗るが、好いかと云う手紙が来た。それも、ちゃんと心得た。次には用事ができたから一船延ひとふねばすがどうだと云う便たより

があつた。これも訳なく承知した。しかし承知している最中に、突然急性胃カタルでどつとやられてしまった。こうなるといかに約束を重んずる余も、出発までに全快するかしないか自分で保証し悪くなつて来た。胸へ差し込みが来ると、約束どころじゃない。馬関も御茶代も、是公も大連もめちやめちやになつてしまふ。世界がただ真黒な塊かたまりに見えた。それでも御供旅行の好奇心はどこかに潜ひそんでいたと見えて、先へ行つてくれと云う事は一口も是公に云わなかつた。

そのうち胃のところがガスか何かでいっぱいになつた。茶碗の音などを聞くと腹が立った。人間は何の必

要があつて飯などを食うのか氣の知れない動物だ、こ
うして氷さえ嚙かじつていれば清淨潔白しょうじょうけつぱくで何も不足はな
いじゃないかと云う氣になつた。枕元まくらもとで人が何か云
うと、話をしなくつちあ生きていられないおしやべり
ほど情ない下賤げせんなものはあるまいと思つた。眼を開い
て本棚ほんだなを見渡すと書物がぎっしり詰つてゐる。その書
物が一々違つた色をしてそうしてことごとく別々な名
を持つてゐる。煩わづらわしい事おびただ夥おびただしい。何の酔興すいきようでこ
んな差別をつけたものだろう、また何の因果いんがでそれを
大事そうに列ならべ立てたものだろう。実にしち面倒臭い
世の中だ。早く死んじまえと云う氣になつた。

禎^{ていじ}二さんが蒲団^{ふとん}の横へ来て、どうですと尋ねたが、返事をするのが馬鹿^{ばか}氣^けでいて何とも云う了見^{りようけん}にない。代診が来て、これじゃ旅行は無理ですよ、医者として是非止^とめなくつちやならないと説諭したが、御尤^{ごもつと}もだとも不尤^{ふもつと}もだとも答えるのが厭^{いや}だった。

そのうち日は容赦なく経^たった。病氣は依然として元のところに逗留^{とうりゆう}していた。とうとう出発の前日になつて、電話で中村へ断つた。中村は御大事になさいと云つて先へ立ってしまった。

こじようき

小蒸気を出て鉄嶺丸てつれいまるの舷側げんそくを上るや否や、商船会社

おおかわひら

の大河平さんが、どうか総裁とごいっしょのように伺

いましたかと云われる。船が動き出すと、事務長の

さじくん

佐治君が総裁と同じ船でおいでになると聞いていまし

たがと聞かれる。船長さんにサルーンの出口で出逢であう

と総裁と御同行のはずだと誰か云つてたようでしたが

と質問を受ける。こうみんなが総裁総裁と云うと是公ぜこう

と呼ぶのが急に恐ろしくなる。仕方がないから、ええ

総裁といっしょのはずでしたが、ええ総裁と同じ船に

乗る約束でしたがと、たちまち二十五年来用い慣れた

是公を儉約し始めた。この儉約は鉄嶺丸に始まって、大連から滿洲一面に広がって、とうとう安東県あんとうけんを経て、韓国かんこくにまで及んだのだから少からず恐縮した。総裁という言葉は、世間にはどう通用するか知らないが、余が旧友中村是公を代表する名詞としては、あまりにえら過ぎて、あまりに大袈裟おおげさで、あまりに親しみがなくつて、あまりに角かどが出過ぎている。いっこう味あじわいがない。たとい世間がどう云おうと、余一人はやはり昔の通り是公是公と呼び棄すてにしたかつたんだが、衆寡敵しゅううかてきせず、やむをえず、せつかくの友達を、他人扱いにして五十日間通して来たのは遺憾いかんである。

船の中は比較的楽だった。二百十日にひやくとおかの明るあく日に神戸

を立ったのだから、多少の波風は無論おいでなさるんだろうと思つてちゃんと覚悟をきめていたところが、

天氣が存外のんき呑氣にできたもので、神戸から大連に着く

までたいていは鈍にぶり返っていた。甲板かんばんの上に若い

英吉利イギリスの男が犬を抱いて穩かに寝ていたと云つたら、

海のようにすもたいていは想像されるだろうと思う。

ありや何ですかと事務長の佐治さじさんに聞くと、え、

あれは英国の副領事ふくりょうじだそうです、佐治さんが答えた。

副領事かも知れないが余には美しい二十一二の青年としか思われなかった、これに反して犬はすこぶる妙な

顔をしていた。もつともブルドッグだから両親からしてすでに普通の顔とは縁の遠い方に違いない。したがって特にこいつだけを責めるのは残酷だが、一方から云うと、また不思議に妙な顔をしているんだからやむをえない。この犬はその後大連に渡つて大和ホテルに投宿した。そうとはちつとも知らずに、食堂に入つて飯を食っていると、突然この顔に出食わして一驚を喫した。固より犬の食堂じゃないんだけど、犬の方で間違えて這入つて来たものと見える。もつとも彼の主人もその時食堂にいた。主人は多数の人間のいるところで、犬と高声に談判するのを非紳士的と考え

たと見えて、いきなりかの妙な顔を胴ぐるみ脇わきの下に抱かかえて食堂の外に出て行つた。その退却の模様はすこぶる優美であつた。彼は重い犬をあたかも風呂敷ふろしきづつみのごとく安々と小脇に抱えて、多くの人の並んでいる食卓の間を、足音も立てず大股おおまたに歩んで戸の外に身体からだを隠した。その時犬はわんとも云わなかつた。ぐうとも云わなかつた。あたかも弾力ある暖かい器械の、素直すなおに自然の力に従うように、おとなしく抱かれて行つた。顔はたびたび云う通りはなはだ妙だが、行状ぎようじように至つてはすこぶる気高いものであつた。余はその後ごついにこの犬に逢う機会を得なかつた。

退屈だから甲板^{かんばん}に出て向うを見ると、晴れたとも曇^{かた}つたとも方のつかない天気の中に、黒い影が煙を吐いて、静かな空を濁しながら動いて行く。しばらくその痕^{あと}を眺めていたが、やがてまた籐椅子^{とういす}の上に腰をおろした。例の英吉利^{イギリス}の男が、今日は犬を椅子^{いす}の足に鎖で縛りつけて、長い脛^{すね}をその上に延ばして書物を読んでいる。もう一人の異人はサルーンで何かしきりに認め^{しめた}物^{もの}をしている。その妻君はどこへ行つたか見え

ない。亜米利加アメリカの宣教師夫婦は席を船長室の傍わきへ移した。甲板の上はいつもの通り無事であつた。ただ機関の音だけが足の裏へ響けるほど猛烈に鳴り渡つた。その響の中でいつの間にかうとうとした。

眼が覚さめてから、サルーンに入つて亜米利加の絵入りの雑誌を引ひつ剥へがして見た。傍そばには日本の雑誌も五六冊片寄せてあつた。いずれも佐治文庫さじぶんこと云う判が押してある。これは事務長の佐治さんが、自分で読むために上陸の際に買入れて、読んでしまうと船の図書館に寄附するのだと佐治さん自身から聞いた。佐治さんは文学好と見えて、余の著書なども読んでいる。友人

くろやなぎかいしゅう

の畔柳芥舟と同郷だと云うから、差し向いで芥舟の評判を少しやった。

へや

また室を出て海を眺めた。すると先刻黒い影を波の

上に残して、遠くの向うを動いていた船が、すぐ眼の

前に見える。大きさは鉄嶺丸とほぼ同じぐらいに思わ

ふなあし

れるが、船足がだいぶ遅いと見えて、しばらくの間に

おつ

もうこれほど追つかれたのである。欄干に頬杖を突い

らんかん

ほおづえ

て、見ていると鉄嶺丸が刻一刻と後から逼つて行く

うしろ

せま

のがよく分る。しまいには黄色い文字で書いた営口丸

えいこうまる

あきら

の三字さえ明かに読めるようになった。やがて余の船の頭が営口丸の尻より先へ出た。そうして、尻から

胴の方へじりじりと競り上げて行つた。船は約一丁を隔ててほとんど並行の姿勢で進行している。もう七八分すると、余の船は全く営口丸を乗り切る事ができそうに思われた。時に約一丁もあろうと云う船と船の間隔が妙に逼つて来た。向うの甲板にいる乗客の影が確かに勘定ができるようになった。見るとことごとく西洋人である。中には眼鏡を出してこつちを眺めているのもあった。けれども見るうちに眼鏡は不必要になつた。髪の色も眼鼻立も甲板に立っている人は御互に鮮かな顔を見合せるほど船は近くなつた。その時は全く美しかった。と思うと、船は今までよりも倍以

上の速力を鼓して刹那に近寄り始めた。海の水を細い谷川のように仕切つて、営口丸の船体が、六尺ほどの眼の前に黒く切つ立つた時は、ああ打つかるなと思つた。途端に向うの舳は余の眼を掠めて過ぎ去りつつ、逼りつつ、とうとう中等甲板の角の所まで行つてどさりと当つた。同時に甲板の上に釣るしてあつた端艇が二艘ほどでんぐり返つた。端艇を繋いであつた鉄の棒は無雑作に曲つた。営口丸の船員は手を拍つてわあと囃し立てた。余と並んで立っていた異人が、妙な声を出してダム何とか云つた。

一時間の後佐治さんがやつて来て、夏目さん身をか

わすのかわすと云う字はどう書いたら好いでしょうと聞くから、そうですなと云つて見たが、実は余も知らなかった。為替かわせの替かわせると云う字じやいけませんかと
はなはだ文学者らしからぬ事を答えると、佐治さんは承知できない顔をして、だつてあれは物を取り替える時に使うんでしょうとやり込めるから、やむをえず、じや仮名かなが好いでしょうと忠告した。佐治さんは呆れあきて出て行つた。後で聞くと、衝突の始末を書くので、その中に、本船は身をおわしと云う文句を入れたかつたのだそうである。

四

船が飯田河岸いだがしのような石垣へ横にぴたりと着くんだから海とは思えない。河岸の上には人がたくさん並んでいる。けれどもその大部分は支那のクーリーで、一人見ても汚きたならしいが、二人寄るとなお見苦しい。こうたくさん塊かたまりるとさらに不体裁ふていさいである。余は甲板の上立って、遠くからこの群集を見下みおろしながら、腹の中で、へえー、こいつは妙な所へ着いたねと思った。そのうち船がだんだん河岸に近づいてくるに従って、陸おかの方で帽子を振って知人に挨拶あいさつをするものなどがで

きて来た。宣教師のウインという人の妻君が、中村さんが多分迎えに来ておいででしょうと、笑いながら御世辞おせじを云ったが、電報も打たず、いつ着くとも知らせなかった余の到着を、いくら権威けんい赫赫たる総裁だとして予知し得る道理がない。余は欄干らんかんに頬杖ほおづえを突きながら、なるほどこいつはどうしたものかな、ひとまず是公の家うちへ行つて宿を聞いて、それからその宿へ移る事にでもするかなと思つてるうちに、船は鷹揚おうようにかの汚ならしいクーリー団の前に横づけになつて止まつた。止まるや否や、クーリー団は、怒おこつた蜂はちの巣のように、急に鳴動めいどうし始めた。その鳴動の突然なものには、ちよつ

と胆力を奪われたが、何しろ早晚地面の上へ下りるベ
き運命を持った身体からだなんだから、しまいにはどうかし
てくれるだろうと思つて、やつぱり頼杖を突いて河岸
の上の混戦を眺めていた。すると佐治さんが来て、夏
目さんどこへおいでになりますと聞いてくれた。まあ
ひとまず総裁の家うちへでも行つて見ましようと思つてい
ると、そこへ背の高い、紺色こんいろの夏服を着た立派な紳士
が出て来て、懷中から名刺を出して叮嚀ていねいに挨拶をされ
た。それが秘書の沼田さんぬまただったので、頼杖を突いて、
いつまでも鳴動を眺めている余には、大変な好都合に
なった。沼田さんは今度郷里から呼び迎えられた老人

を、自宅へ案内されるために、船まで来られたのだそうだが、同じ鉄嶺丸に余の乗っている事を聞いて、わざわざ刺しを通じられたのである。

じゃホテルの馬車でと沼田さんが佐治さんに話している。河岸かしの上を見ると、なるほど馬車が並んでいた。力車りきしゃもたくさんある、ところが力車はみんな鳴動連めいどうれんが引くので、内地のに比べるとはなはだ景氣ぎょうきが好くない。馬車の大部分もまた鳴動連めいどうれんによつて、御せぎよられている様子である。したがっていずれも鳴動流めいどうりゅうに汚きたないものばかりであつた。ことに馬車に至つては、その昔日露戦争ろすけの当時、露助が大連を引上げる際に、このまま日

本人に引渡すのは残念だと云うので、御叮嚀ごていねいに穴を掘って、土の中に埋めて行つたのを、チャンが土の臭においを嗅かいで歩いて、とうとう嗅ぎあてて、一つ掘っては鳴動させ、二つ掘っては鳴動させ、とうとう大連を縦横たてよこ十文字に鳴動させるまでに掘り尽くしたと云う評判のある、——評判だから、本当の事は分らないが、この評判があらゆる評判のうちでもつとも巧妙なものと、誰しも認めざるを得ないほどの泥だらけの馬車である。

その中に東京の真中でも容易に見る事のできないくらい、新しい奇麗きれいなのが二台あった。御者ぎよしやが立派なり

ヴェリーを着て、光った長靴を穿いて、ハルビン
えた馬の手綱たづなを取つて控えていた。佐治さんは、船か
ら河岸へ掛けた橋を渡つて、鳴動めいどうの中を突き切つて、
わざわざ余をその奇麗な馬車の傍そばまで連れて行つた。
さあ御乗んなさいと勧めながら、すぐ御者台の方へ向
いて、総裁の御宅までと注意を与えた。御者はすぐ鞭むち
を執とつた。車は鳴動めいどうの中を揺ゆぎ出だした。

五

門を這入はいつて馬車の輪が砂利の上を二三間軋きしつたか

と思うと、馬は大きな玄関の前へ来て静かに留まった。石段を上あがつて、入口の所に立つや否や、色の白い十四五の給仕が、頑丈がんじょうな櫓かしの戸を内から開いて、余の顔を見ながら挨拶あいさつをした。もう御帰りかと尋ねると、まだでございますと云う。留守るすでは仕方がない。どうしたものだろうと思つて、石の上に佇たたずんで首を傾かたむけているところへ、後うしろに足音がするようだからふり向くと、先刻鉄嶺丸で知己ちかづきになつた沼田さんである。さあ、どうぞと云われるので、中うちに入つた。沼田さんは先へ立つて、ホールの突き当りにある厚い戸を開いた。その戸の中へ首を突つ込んで、室へやの奥を見渡した時に、

こりや滅法広いなと思った。数字の観念に乏しい性質^{たち}だから何畳敷だかんと要領を得ないが、何でも細長い御寺の本堂のような心持がした。その広い座敷がただ一枚の絨毯^{じゅうたん}で敷きつめられて、四角^{よすみ}だけがわずかばかり華やかな織物の色と映^てり合うために、薄暗く光っている。この大きな絨毯^{じゅうたん}の上に、応接用の椅子^{いす}と卓^{テーブル}がちよんぼり二所^{ふたところ}に並べてある。一方の卓と一方の卓とは、まるで隣家^{りんか}の座敷ぐらい離れている。沼田さんは余をその一方に導いて席を与えられた。仰向^{あおもむ}いて見ると天井^{てんじょう}がむやみに高い。高いはずである。室^{へや}の入口には二階がついていて、その二階の手摺^{てすり}

から、余の坐っている所が一目に見下みおろされるような構造なんだから、つまるところは、余の頭の上が、一階の天井兼二階けんの天井である。後のちに人の説明を聞いて始めて知ったのだが、このだだっ広い応接間は、実は舞踏室で、それを見下みくだしている手摺付の二階は、楽隊の楽を奏する所にできているのだそうだ。そんなら、そうと早くから教えてくれれば、安心するものを、断りなしに急に仏様のない本堂へ案内されたものだからまず一番に吃驚びっくりした。余は大連滞在中何度となくこの部屋を横切つて、是公ぜいこうの書斎へ通つたので、喫驚びっくりする事は、最初の一度だけですんだが、通るたんびに、おり

もせぬ阿弥陀様を思い出さない事はなかった。

室を這入^{はい}つて右は、往來を向いた窓で、左の中央か

ら長い幕が次の部屋の仕切りに垂れている。正面に五

尺ほどの盆栽を二鉢置^{はち}いて、横に奇麗^{きれい}な象の置物が据^す

えてある。大きさは豚の子ほどある。これは狸穴^{まみあな}の支

社の客間で見たものと同じだから、一對^{いっつい}を二つに分け

たものだろうと思った。そのほかには長い幕の上に、

大な額^{おわき}がかかっていた。その左りの端に、小さく南

満鉄道会社総裁後藤新平と書いてある。書体から云う

と、上海^{シャンハイ}辺^{へん}で見る看板のような字で、筆画^{ひっかく}がすこぶる

整っている。後藤さんも満洲へ来ていただけに、字が

旨^{うま}くなつたものだと思心したが、その実^{じつ}感心したのは、
後藤さんの揮毫^{きごう}ではなくつて、清国皇帝の御筆^{ごふで}であつ
た。右の肩に賜うと云う字があるのを見落した上に後
藤さんの名前が小^ちさ過^すぎるのでつい失礼をしたのであ
る。後藤さんも清国皇帝に逢^あつて、こう小さく呼^よび棄^ず
て書かれちやたまらない。えらい人からは、滅多^{めった}に賜
わつたり何^{なん}かされない方がいいと思つた。

沼田さんは給仕を呼んで、処^{しよ}々方^{しやう}々^{ほう}へ電話をかけさ
して、是公^{ゆくえ}の行方^{ゆくえ}を聞き合せてくれたが全く分らない。
米国の艦隊が港内^{ていはく}に碇泊^{ていはく}しているので、驩迎^{かんげい}のため、
今日はベースボールがあるはずだから、あるいはそれ

を観^みに行つてゐるかも知れないと云う話であつた。

そのうち広い部屋がようやく暗くなりかけた。じやどこぞ宿屋へでも行つて待ちましようと言つと、社の宿屋ですから、やつぱり大和^{やまと}ホテルがいいでしようと言つた。沼田さんが親切に自分で余をホテルまで案内してくれました。

六

湯を立ててもらつて、久しぶりに塩^{しおけ}気のない真^ま水^{みず}の中に長くなつて寝ている最中に、湯殿の戸をこつこつ

叩くものがある。風呂場で訪問を受けた試しは^{ため}いまだかつてないんだから、湯槽^{ゆづね}の中で身を浮かしながら少々^{しゅんじゅん}逡巡していると、叩く方ではどうあつても訪問の礼を尽くさねばやまぬという決心と見えて、なおのこと、こつこつやる。いくらこつこつやつたつて、まさか^{はだか}赤裸で飛び出して、室^{へや}の錠^{じょう}を明ける訳にも行かないから、風呂の中から大きな声で、おい何だと用事を聞いて見た。すると摺硝子^{すりガラス}の向側^{むこうがわ}で、ちよつと明けなさいと云う声にする。この声なら明けても差支^{さしつか}えないと思つて、身体^{からだ}全体から雫^{しずく}を垂らしながら、素裸^{すっぱだか}でボールトを外^{はず}すと、はたして是公^{ぜこう}が杖^{つえ}を突い

て戸口に立っていた。来るなら電報でもちよつとかければ好いものと云う。どこへ行つていたんだと聞くと、ベースボールを観^みて、それから舟を漕^こいでいたと云う挨拶^{あいさつ}である。飯を食つたら遊びに來なさいと案内をするから、よろしいと答えてまた戸を締^しめた。締めながら、おいこの宿は少し窮屈だね、浴衣^{ゆかた}でぶらぶらする事は禁制なんだろうと聞いたら、ここが厭^{いや}なら遼東^{りょうとう}ホテルへでも行けと云つて歸つて行つた。

例刻に食堂へ下りて飯を食つたら、知らない西洋人といつしよの卓^{テーブル}へ坐らせられた。その男が御免^{ごめん}なさい、どうも噓^{くしやみ}が出てと、手帛^{ハンケチ}を鼻へ当てたが、噓の

音はちつともしなかつたから、余はさあさあと、暗あんに
噓うを奨励しょうれいしておいた。この男は自分で英人だと名
乗った。そうして御前は旅順りょじゆんを見たかと余に尋ねた。
旅順を見ないなら教えるが、いつの汽車で行つて、ど
ことどこを見て、それからいつの汽車で帰るが好いと、
自分のやった通りを委くわしく語つて聞かせた。余はなる
ほどなるほどと聞いていた。次に御前は門司もじを見たか
と聞いた。次にあすこの石炭はもう沢山たんは出まいと聞
いた。沢山は出まいと答えた。実は沢山出るか出ない
か知らなかつたのである。

しばらくして、君は旅順に行つた事があるかとまた

同じ事を尋ね出した。少々変だが面倒だから、いやま
だだと、こつちも前同様ぜんな返事へんじをしておいた。すると
旅順に行くには朝八時と十一時の汽車があつて……と
また先刻さつきと寸分すんぶん違わないうような案内者めいた事を云つ
て聞かせた。先が先だから余も依然としてなるほどな
るほどを繰り返した。最後に突然御前は日本人かと尋
ねた。余はそうだと正直なところを答えたようなもの
の、今までは何国人どこじんと思われていたんだろうかと思え
ると、多少心細かった。

余は日本人なりの答を得るや否や、この男が、おれ
も四十年前横浜に行った事があるが、どうも日本人は

叮嚀^{ていねい}で親切で慇懃^{いんぎん}で実に模範的国民だなどとしきりに御世辞^{おせじ}を振り廻し始めた。せっかくだとは思つたが、是公との約束もある事だから、好い加減なところで談話を切り上げて、この老人と別れた。

表へ出るとアカシヤの葉が朗^{ほが}らかな夜の空気の中にしんと落ちついて、人道を行く靴の音が向うから響いて来る。暗い所から白服を着けた西洋人が馬車で現れた。ホテルへ帰って行くのだらう。馬の蹄^{ひづめ}は玄関の前で留^{とど}まつたらしい。是公の家の屋根から突出した細長い塔が、瑠璃色^{るりいろ}の大空の一部分を黒く染抜いて、大連の初秋^{はつあき}が、内地では見る事のできない深い色の奥に、

数えるほどの星を輝^{きら}つかせていた。

七

この間から米国の艦隊が四艘^{そう}来ているんで、毎日いろいろな事をして遊ばせるのだが、翌^{あす}日の晩は舞踏会をやるはずになっていいるから出て見ろと是公^{ぜいこう}が勧めた。出て見ろつたつて、燕尾服^{えんぴふく}も何も持つて来やしないから駄目^{だめ}だよと断ると、是公^{けい}が希知^{けいち}な奴^{やつ}だなと云った。燕尾服は其上^{ロンドン}倫敦留学中トテナムコートロードの怪しげな洋服屋で、もつとも安い奴^{こしら}を拵^{おぼえ}えた覚があるが、

爾來簞笥じらい たんすの底に深く蔵しているのみで、親友といえど

も、持つてるか持つてないか知らないくらいである。

いくら大連がハイカラだつて、東京を立つ時に、この古燕尾服が役に立とうとは思いがけないから、やつぱり簞笥の底にしまったなりで出て来た。じゃ、おれのはかまはおり

袴羽織はかまを貸してやるから、日本服で出ろ、出て、まあ、

どんな容子ようすだか見るが好いと、是公は何でも引き摺ひずり出そうとする。いつそ出るくらいなら踊らなくっちゃ

つまらないから、日本服ならまあ止よそうと云いたかつたが、是公は正直だから本当にすると好くないと思つて、ただ羽織袴はいけないよと断つた。是公はそれで

も舞踏会を見せる氣と見えて、翌日あくるひの午ひる、社の二階で
上田君を捕つかえて、君の燕尾服をこいつに貸してやら
ないか、君のならちようど合あいそうだと云つていた。
上田君もこの突然な相談には辟易へきえきしたに違ちがない。笑い
ながら、いえ私のは誰にも合あいませんと謙遜けんそんされた。

舞踏会はそれですんだが、しばらくすると、今度は
これから倶楽部クラブに連れて行つてやろうと、例のごとく
連れて行つてやろうを出し始めた。だ**い**ぶ遅いようだ
とは思つたが、座にある国沢君も、行こうと云われる
ので、三人で涼しい夜の電灯もとの下に出た。広い通りを
一二丁来ると日本橋にほんばしである。名は日本橋だけれどもそ

の実は純然たる洋式で、しかも歐洲の中心でなければ
見られそうもないほどに、雅がにも丈夫じやうぶにもできている。
三人は橋の手前にある一棟ひとむねの煉瓦れんが造りに這入はいった。誰
かいるかなと、玉突場を覗のぞいたが、ただ電灯が明るく
点ついているだけで玉の鳴る音はしなかった。読書室へ
這入はいったが、西洋の雑誌が、秩序よく列ならべてあるばかりで、ページを繰る手の影はどこにも見えなかった。
将棋歌留多かるたをやる所へ這入はいつて腰をかけて見たが、三人の尻をおろしたほかは、椅子いすも洋卓テーブルもことごとく空あいていた。今日は遅いので西洋人がいないからつまらないとは是公が云う。是公の会話の下手な事は天品てんぴんと云

うくらいなものだから、不思議に思つて、御前は平生ここに出入でいりして赤髯あかひげと交際するのかと聞いたら、まあ来た事はないと澄ましている。それじゃ西洋人がいなくつてつまらないどころか、いなくつて仕合せなくらいなものだろうと聞いて見ると、それでもおれはこの倶楽部クラブの会長だよ、出席しないでも好いと云う条件で会長になつたんだと呑気のんきな説明をした。

会員の名札はなるほど外国流の綴つづりが多い。国沢君は大きな本を拈ひろげて、余の姓名を書き込みました上、是公に君ここへと催促した。是公はよろしいと答えて、自分の名の前に proposed by と付けた。それへ国沢

おなじ

君が、同く seconded by と加えてくれたので、大連
滞在中はいつでも、倶楽部クラブに出入しゅつにゅうする資格ができた。
それから三人でバーへ行つた。バーは支那人がやつ
ている。英語だか支那語だか日本語だか分らない言葉
で注文を通して、妙に赤い酒を飲みながら話をした。
酔つて外へ出ると濃い空がますます濃く澄み渡つて、
見た事のない深い高さの裡うちに星の光を認めた。国沢君
がわざわざホテルの玄関まで送られた。玄関を入ると、
正面の時計がちょうど十二時を打った。国沢君はこの
十二時を聞きながら、では御休みなさいと云つて、戻
られた。

ホテルの玄関で、是公^{ぜいこう}が馬車をと云うと、ブローア
ムに致しますかと給仕が聞いた。いや開いた奴^{ひら}が好い
と命じている。余は石段の上に立つて、玄関から一直
線に日本橋まで続いている、広い往来を眺めた。大連
の日は日本の日よりもたしかに明るく眼の前を照らし
た。日は遠くに見える、けれども光は近くにある、と
でも評したらよかろうと思うほど空氣が透^すき徹^{とお}つて、
路^{みち}も樹^きも屋根も煉瓦^{れんが}も、それぞれ鮮^{あざ}やかに眸^{ひとみ}の中に

浮き出した。

やがて蹄ひづめの音がして、是公の馬車は二人の前に留まった。二人はこの麗うつくかな空気の中をふわふわ揺られながら日本橋を渡った。橋向うは市街である。それを通り越すと満鉄の本社になる。馬車は市街の中へ這入はいらずに、すぐ右へ切れた。気がついて見ると、遥向はるかむこうの岡おかの上に高いオベリスクが、白い剣つるぎのように切つ立って、青空に聳そびえている。その奥に同じく白い色の大きな棟むねが見える。屋根は鈍にぶい赤で塗つてあつた。オベリスクの手前には奇麗きれいな橋がかかつていた。家も塔も橋も三つながら同じ色で、三つとも強い日を

受けて輝いた。余は遠くからこの三つの建築の位地いちと
関係と恰好かつこうとを眺めて、その釣合のうまく取れている
のに感心した。

あれは何だいと車の上で聞くと、あれは電気公園と
云つて、内地にも無いものだ。電気仕掛でいろいろな
娯樂をやつて、大連の人に保養をさせるために、会社
で拵こしらえてるんだと云う説明である。電気公園には恐
縮したが、内地にもないくらいのものなら、すこぶる
珍らしいに違ないと思つて、娯樂つてどんな事をやる
んだと重ねて聞き返すと、娯樂とは字のごとく娯樂で
さあと、何だか少々危あやしくなつて来た。よくよく

きゆうめい

こんげつすえ

糺明して見ると、実は今月末とかに開場するんで、何をやるんだか、その日になつて見なければ、総裁にも分らないのだそうである。

そのうち馬車が、電車の軌道レールを敷いている所へ出た。

電車も電気公園と同じく、今月末に開業するんだとか云つて、会社では今支那人の車掌運転手を雇つて、訓練のために、ある局部だけの試運転をやらしている。

御忘れものはありませんか、ちんちん動きますを支那の口で稽古けいこしている最中なのだから、軌道レールがここまで延長して来るのは、別段怪しい事もないが、気がついて見ると、鉄軌レールの据え方かたが少々違ふようである。第一

内地のように石を敷かない計画らしい。御影石みかげいしが払底ふつてい

なのかいと質問して見たら、すぐ、冗談云つちやいけ

ないとやられてしまった。これが最新式の敷方しきかたなんで、

土台をどうかして、どうかして、鉄軌と鉄軌の間

を混合金属で塗り固めて全線をたった一本の長い棒に

してしまつて……とあたかも自分が技師であるかのこ

とき自慢である。内地から来たものはなるほど田舎いなかも

の取扱にされても仕方がない。そいつは感心だと、全

く感心すると、技師を信任して、少しも口を出さずに、

どうでも自分の思つた通りをやらせるから、そんな仕

事もできるのさと云つた。内地では何でもやかましく

干渉する奴がたくさん出て来るものと見える。

馬車が岡の上へ出た。そこはまだ道路が完成して
ないので、満洲特有の黄土こうどが、見るうちに靴の先から
洋袴ズボンの膝ひざの上まで細かに積もった。この辺ももう少し
すると、ホテルの前のように、カンカンした路に変化
する事だろうが、そんな事を口外すれば、是公がま
ます得意になるばかりだから、わざと黙っていた。

九

これが豆油まめあぶらの精製しない方で、こっちが精製した

方です。色が違うばかりじゃない、におい香も少し変つて
います。嗅かいで御覧なさいと技師が注意するので嗅い
で見た。

用いる途みちですか、まあ料理用ですね。外国では動物
性の油が高価ですから、こう云うのができたら便利で
しょう。第一大変安いのです。これでオリーブ油の何
分の一にしか当らないんだから。そうして効用は両方
共ほぼ同じです。その点から見てもはなはだ重宝ちようほうで
す。それにこの油の特色は他の植物性のもののように
不消化でないです。動物性と同じくらいに消化こなれます
と云われたので急に豆油がありがたくなった。やはり

天麩羅^{てんぷら}などにできますかと聞くと、無論できますと答えたので、近き将来において一つ豆油の天麩羅を食つてみようと思つてその室を出た。

出がけに御邪魔でもこれをお持ちなさいと云つて細長い箱をくれたから、何だろうと思つて、即座に開けて見ると、石鹼^{シャボン}が三つ並んでいた。これがやつぱり同じ材料から製造した石鹼ですと説明されたが、普通の石鹼と別に変つたところもないようだから、ただなるほどと云つたなり眺めていた。すると、この石鹼に面白いところは、塩水に溶解するから奇体ですよとの追加があつたので、急に貰つて行く氣になつて蓋^{ふた}をした。

柞蚕さくさんから取った糸を並べて、これが従来の奴ですと

云うのを見ると、なるほど色が黒い。こつちは精製した方そでと、傍そばに出されると全く白い。かつ節ふしなしにでき上っている。これで織ったのがありますかと聞いて見ると、あいにく有りませんと云う答である。しかしもし織ったらどんなものができるでしょうと聞くと、羽二重はぶたえのようなものができるつもりですと云う。その上値段ねだんが半分だと云う。柞蚕さくさんから羽二重はぶたえが織れて、それが内地の半額で買えたらさぞ善よかろう。

高粱酒こうりょうしゆを出して洋盃コップに注つぎながら、こつちが普通の方で、こつちが精製した方そでと、またやりだしたか

ら、いや御酒はたくさんですと断つた。さすが酒好きの是公も高粱酒の比較飲みは、思わしくないと見えて、並製も上製も同じく謝絶した。是公の話によると、この間 たかみねじょうきち 高峯讓吉さんが来て、高粱からウイスキーを採るとか採らないとかしきりに研究していたそうである。ウイスキーがこの試験場でできるようになったら是公がさぞ喜んで飲む事だろう。

陶器を作っている部屋もあつたようだが、これはほんの試験中で、並製も上製もないようであつた。

中央試験所を出て、五六町来ると、馬車を下りて草の中に迷い込んだ。路のない谷へ下りたり、足場のな

い岡へ上^{のほ}つたりするので、汗が出て、顔の皮がひりひりして来た。その上胃がしきりに痛む。是公に聞いて見ると、射撃場へ連れて行ってやるんだと云うから、例の連れて行ってやると云う厚意に免^{めん}じて、腹の痛いのを我慢して目的の家まで行つてすぐ椅子^{いす}の上へ腰をかけてしまった。是公がしきりに鉄砲の話をしようであつたが、とんと頭に響かない。何でもこの家だけは会社から寄附してやった。これでも二千円とか三千円とかかかったという事だけがようやく耳に這^は入^いった。そこへ汚^{きた}ない支那人が二三人、奇麗^{きれい}な鳥籠^{とりかご}を提^さげてやつて来た。支那人て奴^{やつ}は風雅^{ふうが}なものだよ。着るもの

もない貧乏人のくせに、ああやって、鳥をぶら下げて、山の中をまごついて、鳥籠を樹の枝に釣るして、その下に坐つて、食うものも食わずにおとなしく聞いているんだよ。それがもし二人集まれば鳴き競くらべをするからね。ああ実に風雅なものだよ。としきりに支那人を賞ほめている。余はポケットからゼムを出して呑のんだ。

十

政樹公が大連の税関長になつていると聞いてちよつと驚いた。政樹公には十年前上海で出逢であつたきりで

ある。その時政樹公は、サー・ロバート・ハートの子分になって、やはりその税関に勤務していた。政樹公の大学を卒業したのは余より二年前で、二人共同じ英文科の出身だから、職業違いであるにかかわらず、比較的縁が近いのである。

政樹公の姓は立花たちばなと云って柳川藩やながわはんだから、立派な御侍おさむらいに違ない。それをなぜ立花さんと云わないで、

政樹公と呼ぶかと云うに、同じ頃同じ文科に同藩から出た同姓の男がいた。しかも双方共寄宿舎はに這入はいっていたものだから、立花君や立花さんでは紛れまぎやすくていけない。で一方は政樹という名だから政樹公と呼び、

一方は銑三郎せんざぶろうという俗称だから銑さんせん銑さんと云った。なぜ片こつ方が公こうなのに、片こつ方はさんづけにされてしまったのか、ちよつと分らない。銑さんの方は、余と前後して洋行したが、不幸にして肺病かかに罹かつて、歸り路に香港ホンコンで死んでしまった。そこで残るは政樹公ばかりになった。したがつて政樹公をやめて立花君と云つたつて、少しも混雜はしないのだが、つい立花よりは政樹公の方が先へ出る。やっぱり中村とも総裁とも云わないで是公ぜいこうと云い馴なれたようなものだろう。

ここだと云うので、二人馬車を下りて税関に這入つて見ると、あいにく政樹公は先刻さつき具合が悪いとかで家うち

へ歸つた後であつた。こつちの都合もあるし、所^{しやう}勞^{ろう}の人に迷惑をかけるのも本意でないから、他日を期して税関を出た。すると今度は馬車が満鉄の本社へ横づけになつた。広い階^{はし}子^ご段^{だん}を二階へ上がつて、右へ折れて、突き当りをまた左へ行くと、取^と付^つきが重役の部屋である。重役は東京に行つてゐるもののほかは皆出ていた。それに一々紹介された。その中^{うち}で昔見た田中君の顔を覚えていた。どうです始めて大連に御着きになつた時の感想はと聞かれるから、そうですね、船から上がつてこつちへ来る所は、まるで焼^や迹^けのようじゃありませんかと、正直な事を答えると、あすこはね、軍用地なものだか

ら建物を^{こしら}えたる訳に行かないんで、誰もそう云う感じがするんですと教えられた。

しばらく椅子に腰を掛けて、おとなしく執務の様子を見ていると、じき午^{ひる}になった。さあ飯を食おうと、食堂へ案内された。ここへと云う席へ坐つて、サーヴィエツトを取り上げると、給仕が来て、それは国沢さんのですから、ただいま新しいのを持つて参りますと云つた。食堂は社の表二階にあたる大広間で、晩になれば、それが舞踏室に変化するほどの大きなものであつた。これは社員全体に向つて公開してあるのだそうだが、同じ食卓に着いた人の数を云うと、約三十人

に過ぎなかつた。この人数にんずから推して、あるいは制限でもありはせぬのかと思つたのは余の想像に過ぎなかつた。

料理は大和やまとホテルから持つて来るのだそうで、同席の三十余人が、みな一様の皿を平らげていた。胃が痛いので肉刀ナイフと肉匙フォークは人並ひとなみに動かしたようなものの、その実は肉も野菜も咽喉のどの奥へ詰め込んだ姿である。一つどうですと向う側の田中君から瓢箪形ひょうたんがたの西洋梨せいようなしを勧めすすめられた時は、手を出す勇氣すらなかつた。

河村調査課長の前へ行つて挨拶あいさつをすると、河村さんは、まあおかけなさいと椅子を勧めながら、何を御調べになりますかと叮嚀ていねいに聞かれる。何を調べるほどの人間でもないんだから、この間に逢あつた時は実は弱つた。先刻さつき重役室へ河村さんが這入はいつて来たとき、是公ぜこうが余を紹介して、河村さん満鉄の事業の種類その他について、あとでこの男にすっかり説明してやつて下さいと云つたのが本もとで、とうとう余は調査課へ来るような訳になつたものの、その実世間じつの知るごとき人間なんだから、こう真面目まじめに、どう云う方面の研究をやる

気かと尋ねられるとはなはだ迷^{まご}ついてしまう。そうかと云つて、けつして悪気があつて冷かしに來た次第でない事もまた、世間の知る通りなんだから、河村さんに対して敬意を失するような冗談は云えた義理のものでない。やむをえず、しかつめらしい顔をして、満鉄のやつていろいろなさ業一般について知識を得たいと述べた。——何でも述べたつもりである。固^{もと}より内心に確^{かつ}乎たる覚悟があつて述べる事でないんだから、顔だけはしかつめらしいが、述べる事の内容は、すこぶる赤毛布式に縹^{あかげつとしぎ}縹^{ひょうびよう}とふわついていたに違ない。ただ今から顧みても、少し得意なのは、その時余の態度

挙動は非常に落ちついて、魂がきも丹田たんでんに膠着こうちやくして
いるかのごとく河村さんには見えたらうという自覚で
ある。人を欺だまし終おせて知らん顔おをしているのは善よくな
い事だから、ここで全く懺悔ざんげしてしまうが、実を云う
と、その時は胃がしくしく痛んで、言葉に抑揚をつけ
ようにも、声に張りを見せようにも、身体からだに活氣みなを漲
ぎらせようにも、とうてい自己が自己以上に沈着して
しまつて、一寸いっすんもあがきが取れなかつたのである。

そこへ大きな印刷ものが五六冊出て来た。一番上には
第一回営業報告とある。二冊目は第二回で、三冊目
は第三回で、四冊目は第四回の営業報告に違ない。こ

の大冊子を机の上に置いて、たいていこれで分りますがねと河村さんが云い出した時は、さあ大変だと思つた。今この胃の痛い最中にこの大部の営業報告を研究しなければすまない事になつては、どうてい持ち切れ
る訳のものではない。余はまだ営業報告を開け^あないうちに、早速一工夫^{ひとくふう}してこう云つた。——私は専門家で
ないんですから、そう詳^{くわ}い事を調査しても、とても分
りますまいと思ひますので、ただ諸君がいろいろな方
面でどんな風に働いていられるか、ざあつとその状況
を目撃さしていただければたくさんですから、縦覧^{じゅうらん}
すべき箇所を御面倒でもちよつと書いて下さいませんか。

河村さんははあそうですかと、気軽にすぐ筆を執^とつてくれた。ところへどこからか突然妙な小さな男があらわれて、やあと声をかけた。見ると股野義郎^{またのよしろう}である。昔「猫」を書いた時、その中に筑後^{ちくご}の国は久留米^{くるめ}の住人に、多々羅三平^{たたらさんぺい}という畸人^{きじん}がいますと吹聴^{ふいちよう}した事がある。当時股野は三池^{みいけ}の炭坑に在勤していたが、どう云う間違か、多々羅三平はすなわち股野義郎であると云う評判がぱつと立って、しまいには股野を捕^{つか}まえて、おい多々羅君などと云うものがたくさん出て来たそうである。そこで股野は大いに憤慨して、至急親展の書面を余に寄せて、是非取り消してくれと請求に及んだ。

余も氣の毒に思ったが、多々羅三平の件をことごとく
削除しては、全巻を改板かいはんする事になるから、簡潔明瞭めいりよう
に多々羅三平は股野義郎にあらずと新聞に広告しちや
いけないかと照会したら、いけないと云つて来た。そ
れから三度も四度も猛烈な手紙を寄こしたあとで、と
うとうこう云う条件を出した。自分が三平と誤られる
のは、双方とも筑後久留米ちくごくるめの住人だからである。幸い、
肥前唐津ひぜんからつに多々羅たたらの浜はまと云う名所があるから、せめて
三平の戸籍だけでもそっちへ移してくれ。これだけは
是非御願するとあつたんで、余はとうとう三平の方を
肥前唐津の住人に改めてしまった。今でも「猫」を御

読みになれば分る。肥前の国は唐津の住人多々羅三平とちやんと訂正してある。

こう云う訳で余と因縁いんねんの浅からざる股野に、ここでひよつくり出逢であうとは全く思いがけなかった。しかも、その家へ呼ばれて御馳走ごちそうになつたり、二三日間朝から晩まで懇切に連れて歩いて貰つたり、昔日せきじつの紛議ふんぎを忘れて、旧歡きゅうかんを暖める事ができたのは望外ぼうがいの仕合しあわせである。実を云うと、余は股野がまだ撫順ふじゆんにいる事とばかり思っていた。

余は大連で見物すべき満鉄の事業その他を、ここで河村さんと股野に、表ひょうのような形に拵こしらえて貰もらった。

腹がしきりに痛むので、寢室へ退いて、長椅子の上に横になつてみると、窓を撲つ雨の音がしだいに繁しげくなつた。これじゃ舞踏会に行く連中も、だいぶ御苦労様な事になつたものだと思つて、ポケットから招待状を出して寝ながら、また眺めて見た。絵葉書ぐらいの大きさの厚紙の一面には、歌麿うたまろの美人が好い色に印刷されている。一面には中村是公同夫人連名で、夏目金之助を招待している。よくこんなものを拵える時間

があつたなと感心して、うとうとしかけたところへ、ボーイ頭がしらが来て、ただいま総裁からの電話で、今夜舞踏会へおいでになるか伺うかがえと云う事でございますがと云うから、行かないと返事をしてくれと頼んで、本当に寝てしまった。眼が覚さめたら雨はいつの間にか歇やんで、奇麗きれいな空が磨き上げたように一色ひといろに広く見える中に、明かな月が出ていた。余は硝子越ガラスこしにこの大きな色のぞを覗いて、思わず是公のために、舞踏会の成功を祝した。

後で本人に聞いて見ると、是公はその夜舞踏の済んだ後で、多数の亜米利加士官アメリカしかんと共に倶楽部クラブのバーに繰

り込んだのだそうだ。そこで、士官連が是公に向つて、今夜の会は大成功であるとか、非常に盛であつたとか、口々に賛辞を呈したものだから、是公はやむをえず、たいせい大声を振り絞つてしほgentlemenと叫んだ。すると今までがやがや云つていた連中が、總裁の演説でも始まる事と思つて、一度に口を閉じて、満場は水を打ったように静かになった。是公は固よりゼントルメンの後を何とかつけなければならぬ。ところがゼントルメン以外の英語があいにく一言も出て来なかつた。英語と云う英語は頭の底からことごとく酒で洗い去られてしまつていたので、仕方なしに、急に日本語に鞍換をし

て、ゼントルメンの次へもつてきて、すぐ大いに飲み
ましよう^{どな}と怒鳴った。ゼントルメン大いに飲みましよ
うは、たいていの^{アメリカじん}亜米利加人に通じる訳のものではな
いが、そこがバーのバーたるところで、ゼントルメン
大いに飲みましよう^{どな}とやるや否や、士官連がわあつと
云つて主人公を^{どうあけ}胴上にしたそうである。

明治二十年の頃だったと思う。同じ下宿に^{ひづき}ごろごろ
していた連中が七人ほど、江の島まで^{ひがえ}日着日歸りの遠
足をやった事がある。^{あかげつと}赤毛布を^{しよ}背負つて弁当をぶら下
げて、懷中にはおのおの二十錢ずつ持つて、そうして
夜の十時頃までかかつて、ようやく江の島のこ^{がわ}つち側

まで着いた事は着いたが、思い切つて海を渡るものは誰もなかった。申し合せたように毛布けつとに包くるまつて砂浜の上に寝た。夜中に眼が覚さめると、ぽつりぽつりと雨が顔へあたつていた。その上犬が来て真水英夫まみずひでおの脚絆きゃはんを啣くわえて行つた。夜が白んで物の色が灰ほのかに明るくなつた頃、御互の顔を見渡すと、誰も彼も奇麗きれいに砂だらけになつてゐる。眼を擦こすると砂が出る。耳を掘ほじくると砂が出る。頭を搔かいても砂が出る。七人はそれで江の島へ渡つた。その時夜明けの風が島を繞めぐつて、山にはびこる樹きがさあとなびなびいた。すると余の傍そばに立つていた是公が何と思つたものか、急にどうだ、あの樹を見

ろ、戦々兢々せんせんきようきようとしているじゃないかと云った。

草木の風に靡く様を戦々兢々と真面目まじめに形容したのは是公が嚆矢はしめなので、それから当分の間は是公の事を、みんなが戦々兢々と号していた。当人だけは、いまだに戦々兢々で差支さしかえないと信じているかも知れないんだから、ゼントルメン大いに飲みましょうも、この際亜米利加語として士官側に通用したと心得ているんだろう。通じた証拠しやうこには胴上にしたじゃないかくらい、酔うと云いかねない男である。

昨夕は川崎造船所の須田君すだくんからいつしよに晩食ばんめしでも

食おうと云う案内があつたが、例のごとく腹が痛むの

で、残念ながら辞退して、寢室で肉汁ソツを飲んで寝てし

まった。朝起きるや否や、もう好かろうと思つて、腹

の近所へ神経をやつて、探りさぐを入れて見ると、やッぱ

り変だ。何だか自分の胃が朝から自分を裏切ろうと工たく

んでいるような不安がある。さてどこが不安だろうと、

局所を押えにかかると、どこも応じない。ただ曇つた

空のように、鈍痛どんつうが薄く一面に広がっている。苦い顔にが

をして食堂へ下りて飯をすましてまた室へやへ歸つてぼん

やりしていると、河村さんが戸口まで来て、今夜満鉄のものが主人役になってあなたがた二三名を扇芳亭へ招待したいからと云う丁寧な御挨拶である。どうもせっかくですが、実はこれこれだと断ると、そうですか、実は総裁も今夜は所労で出られませんと答えて帰られた。

河村君が帰るや否や股野が案内もなくやって来た。今日は襟の開いた着物を着て、ちゃんと白い襯衣と白い襟をかけているから感心した。股野と少し話しているところへ、また御客があらわれた。ボイの持ってきた名刺には東北大学教授橋本左五郎とあったので、お

やと思った。

橋本左五郎とは、明治十七年の頃、小石川の極楽水ごくらくみずの傍そばで御寺の二階を借りていつしよに自炊じすいをしていた事がある。その時は間代まだいを払って、隔日に牛肉を食つて、一等米を焚たいて、それで月々二円ですんだ。もつとも牛肉は大きな鍋なべへ汁をいっぱい拵こしらえて、その中に浮かして食つた。十銭の牛ぎゆうを七人で食うのだから、こうしなれば食いようがなかったのである。飯は釜かまから杓しゃくつて食つた。高い二階へ大きな釜を揚あげるのは難義であつた。余はここで橋本といつしよに予備門へ這入はいる準備をした。橋本は余よりも英語や数字にお

いて先輩であつた。入学試験のとき代数がむずかし
くつて途方に暮れたから、そつと隣席の橋本から教え
て貰つて、その御蔭おかげでやつと入学した。ところが教え
た方の橋本は見事に落第した。入学をした余もすぐ盲
腸炎に罹かかつた。これは毎晩寺の門前へ売りに来る汁粉しるこ
を、規則のごとく毎晩食つたからである。汁粉屋は門
前まで来た合図に、きつと団扇うちわをばたばたと鳴らした。
そのばたばた云う音を聞くと、どうしても汁粉を食わ
ずにはいられなかつた。したがつて、余はこの汁粉屋
の爺おやじのために盲腸炎にされたと同然である。

その後左五のちさごは——当時余等は橋本を呼んで、左五左

五と云つていた。實際彼は岡山の農家の生れであつた。

——左五はその後追試験に及第したにはしたが、するかと思うとまた落第した。そうして、何だ下らないと云つて北海道へ行つて農学校へ這入^{はい}つてしまった。それから独逸^{ドイツ}へ行つた。独逸へ行つて、いつまで経^たつても帰らない。とうとう五年か六年かいた。つまり留学期限の倍か倍以上も向うで暮した事になる、その費用はどうして拵えたものかとんと分らない。

この橋本が不思議にも余より二三月前に満鉄の依頼に応じて、蒙古^{もうこ}の畜産事状を調査に来て、その調査が済んで今大連に帰つたばかりのところへ出つ食わした

のである。顔を見ると、昔から慄悍ひようかんの相そうがあつたのだが、その慄悍が今蒙古と新しい関係がついたため、すこぶる活躍している。闖ドニアを排はいして這入つて来るや否や、どうだ相変らず頑健がんけんかねと聞かざるを得なかつたくらいである。

十四

ええまあ相変らずでと、橋本は案に相違した落ちつき方である。昔予備門に這入つて及第だとか落第だとか騒いでいた時分にはけつしてこう穏かじやなかった。

彼の鼻の先が反返そりかえっているごとく、彼は剽輕ひょうきんでかつ苛辣からつであつた。余はこの鼻のためによく凹へこまされた事を記憶している。

その頃は大勢で猿楽町さるがくちやうの末富屋すえとみやという下宿に陣取っていた。この同勢は前後を通じると約十人近くあつたが、みんな揃そろいも揃そろつた馬鹿の腕白で、勉強を輕蔑けいべつするのが自己の天職であるかのごとくに心得ていた。下読などはほとんどやらずに、一学期から一学期へ辛かろうじて綱渡りをしていた。英語は教場であてられた時に、分らない訳やくを好い加減につけるだけであつた。数学はできるまで塗板ボールドの前に立っているのを常として

いた。余のごときは毎々一時間ぶつ通しに立往生をしたものだ。みんなが代数書を抱えて今日も脚気かっけになるかなど云つては出かけた。

こう云う連中だから、大概是級の尻しりの方に塊かたまつて、いつでも雑然と陳列ちんれつされていた。余のごときは、入学の当時こそ芳賀矢一はがやいちの隣に坐つていたが、試験のあるたんびに下落して、しまいには土俵際どひようぎわからあまり遠くない所でやつと踏み応ふこたえていた。それでも、みんな得意であつた。級の上にいるものを見て、なんだ点取がと云つて威張つていたくらいである。そうして、稍ややともすると、我々はポテンシャル・エナジーを養うん

だと云つて、むやみに牛肉を喰つて端艇ボートを漕こいだ。試験が済むとその晩から机を重ねて縁側えんがわの隅すみへ積み上げて、誰も勉強のできないような工夫をして、比較的広くなつた座敷へ集つて腕押うでおしをやつた。岡野という男はどこからか、玩具おもちゃの大砲を買つて来て、それをポンポン座敷の壁へ向つて発射した。壁には穴がたくさん開いた。試験の成績が出ると、一人では恐こわいからみんなを駆かり催もよおして揃そろつて見に行つた。するとことごとく六十代で際きわどく引つ掛つている。橋本は威勢の好い男だから、ある時詩を作つて連中一同に示した。韻いんも平仄ひょうそくもない長い詩であつたが、その中に、何ぞ憂うれえん

席序下算の便せきじよかさんと云う句が出て来たので、誰にも分らなくなつた。だんだん聞いて見ると席序下算の便とは、席順を上から勘定かんじようしないで、下から計算する方が早分りだと云う意味であつた。まるで御籤おみくじみたような文句である。我々はみんなこの御籤にあたつてひやひやしていた。

そのうち下算かさんにも上算じようさんにもまるで勘定に這入らないものが、ぽつぽつできて来た。一人消え、二人消えるうちに橋本がいた。是公ぜいこうがいた。こう云う自分もいた。大連では公に逢あつて、この落第の話が出た時、是公は、やあ、あの時貴様も落第したのかな。そいつは

頼母たのもしいやと大いに嬉うれしがるから、落第だつて、落第の質たちが違わあ。おれのは名譽の負傷だと答えておいた。是公だの、余だの、今の旅順の警視けいし総長そうちようだのが落ちながら、ぶら下がっている間に、左五だけは決然として北海道へ落ち延びたのである。その落第の張本ちようほんとも云うべき彼が、いくら年を取つたつて、かほどに慇懃いんぎんになろうとは思ひも寄らぬ事であつた。今日は午後から満鉄の社へ行つて、蒙古旅行に関する話をするんだと云っている。

河村さんの書いてくれた表ひょうを見ると、娯楽機関という題目のもとに、倶楽部クラブとか会とか名のつくものが十ばかり並べてある。中にはゴルフ会だの、ヨット倶楽部だのと、名前からして洒落たしゃれのさえ、ちらほら見える。ヨット倶楽部の下に（ただし一艘そう）と括弧かっこで註がついているのは、新設だからまだ一艘しかないという意味なんだろう。

参観すべき場所と云う標題みだしのもとには、山城町やまぎらちょうの大连医院だの、児玉町こたまちの従業員養成所だの近江町おうみちょうの合宿所だの、浜町はまちの発電所だの、何だのかだのみんなで十

五六ほどある。なるほどこれでは大連に一週間ぐらい
いなければ、満鉄の事業も一通り観^みる訳に行かないと
云われるはずだ。しかも是公^{ぜいこう}は是非^{まんべん}共万遍なくよく観
て行かなくっちゃいけないよと命令的に注意するんだ
から、容易じゃない。その上よく観て、何でも気がつ
いた事があるなら、そう云いなさいと、あたかも余を
視察家扱にするんだからなおさら痛み入る。余は手に
持った表に一通り眼を通してながら、傍^{そば}にいる股野に、
おい少し出て見るかなと云った。股野は固^{もと}より余を連
れて、大連中ぐるぐる引き廻す気で来ている。もつと
も別段社からつけてくれたという訳じゃないんだが、

本人の特志で社の用事をすっぱかす^{りようけん}了見らしい。そ

うしていつの間にか、ホテルへ馬車を云いつけている。

余は股野と相乗りで立派な馬車を走らして北公園に行った。と云うと大層だが、車の輪が五六度回転すると、もう公園で、公園に這^{はい}入ったかと思うと、もう突き抜けてしまった。それから社員倶楽部と云うのに連れて行かれて、^{うたい}謡の先生の月給が百五十円だと云う事を聞いて、また馬車へ乗って、今度は川崎造船所の須田君の所の工場を外から覗^{のぞ}き込んで、すぐ隣の事務所^{きのう}に這入って、須田君に昨日の御礼を述べた。事務所の前がすぐ海で、船渠^{ドック}の中が蒼^{あお}く澄んでいる。あれで

何噸なんトンぐらいの船が這入りますかと聞いたたら、三千噸ぐ

らいまでは入れる事ができますという須田君の答であつた。船渠の入口は四十二尺だとか云つた。余は高い日がまともに水の中に差し込んで、動きたがる波を、じつと締めつけているように静かな船渠の中を、窓から見下みおろしながら、夏の盛りに、この大きな石で畳んだ風呂へ這入って泳ぎ回つたらさぞ結構だろうと思つた。

今度はどこだと股野に聞いて見ると、今度は電気の工場へ行きましようという事である。鉄嶺丸てつれいまるが大連の港へ這入つたときまず第一に余の眼に、高く赤く真直まっすぐに映じたものはこの工場の煙突であつた。船のものは

あれが東洋第一の煙突だと云っていた。なるほど東洋第一の煙突を持つているだけに、中へ這入ると、凄じすさまいものである。その一部分では、天井てんじようを突き抜いて、青空が見えるようにして、四方の壁を高く積み上げていた。屋根の高さを増す必要があつての事だろうが、青空が煉瓦れんがの上に遠く見えるばかりか、尋常の会話はとうてい聞えないくらいに、恐ろしい音が響いている中に、塵ちりを浴びて立った時は、妙な心持がした。ある所は足の下も掘り下げて、暗い所にさまざまの仕掛しかけが猛烈に活動していた。工業世界にも、文学者の頭以上に崇高なものがあるなど感心して、すぐその棟むねを飛び

出したくらいである。詮^{せん}ずるに要領はただ凄まじい音を聞いて、同じく凄まじい運動を見たのみである。

股野はその間を馳^かけ回^{まわ}つて、おい誰さんはいないかねと、しきりに技師を探していた。技師は股野に捕^{つら}まるほど閑^{ひま}でなかつたと見えて、とうとう見当らなかつた。

十六

今日は化物屋敷を見て来たと云うと、田中君が笑いながら、夏目さん、なぜ化物屋敷というんだか訳を知っ

ていますかと聞いた。余は固^{もと}より下級社員合宿所の標本として、化物屋敷の中を一覧したままで、化物の因縁^{いんねん}はまだ詮議^{せんぎ}していなかった。けれども化物屋敷はこれだと云われた時には、うんそうかと云って、少しも躊躇^{ちゆうちょ}なく足を踏^{ふみ}込んだ。なぜそんな恐ろしい名が、この建物に付纏^{つけまと}っているのかと、立ちどまって疑って見る暇も何もなかった。いわゆる化物屋敷はそれほど陰気にでき上がっていた。でき上ったというと新規に拵^{こしら}えた意味を含んでいるから、この建築の形容としては、むしろ不適當であるかも知れない。化物屋敷はそのくらい古い色をしている。壁は煉瓦^{れんが}だろうが、外

部は一面の灰色で、中には日の透りとおそうもない、薄暗い空気を湛たえるごとくに思われた。

余はこの屋敷の長い廊下を一階二階三階と幾返いくかえりか往来おうらいした。歩けば固い音がする。階段はしごを上あるときはなおさらこつこつ鳴った。階段は鉄でできていた。廊下の左右はことごとく部屋で、部屋という部屋は皆締め切つてあつた。その戸の上に、室しつの所有者の標札がかかつている。烈はげしい光線に慣れた眼で、すぐその標札を読もうとすると、判然はつきり読めないくらい廊下は暗かった。余はちよつと立ちどまつて室へやの中を見る訳には行かないのかなと股野に聞いて見た。股野はすぐ

持っていた洋杖ステツキで右手の戸をとんと叩たたいた。しかしはいとも、這入はいれとも応こたえるものはなかった。股野はまた二番目の戸をとんと叩いた。これも中はしんとしている。股野は毫ごうも辟易へきえきした気色けしきなく無遠慮にそこいら中こつこつ叩いて歩いたが、しまいまで人ひと気けのする室には打ぶつからなかった。あたかも立たち退のいた町の中を歩いているような感じがした。三階に來た時、細い廊下の曲り角で一人の女が鍋なべで御菜おさいを煮ているのに出逢であった。そこには台所があつた。化物屋敷では五六軒寄つて一つの台所を持っているのだそうだ。御神おかみさん水は上にありますかと尋ねたら、いえ下から汲くんで

揚げますと答えた。余はこの暗い町内に、便所がどこにいくつあるか不審に思ったが、つい聞きもせず、女の前を行き過ぎて通ろうとすると、そつちは行きどまりでございますと注意された。道理で真闇であつた。

田中君の話によると、この建物は日露戦争の当時の病院だとか云う事である。戦争が烈しくなつて、負傷者の数が増して来るに従つて、收容した人間に充分の手当ができないばかりでなく、氣の毒ながら見殺しにしなければならぬ兵士がたくさんにできて、それらの創口から出る怨みの声が大連中に響き渡るほど凄じかつたので、その以後はこの一廓を化物屋敷と呼

ぶようになつた。しかし本当だか嘘うそだか実は僕も保証
しないと、田中君自身が笑つていたから、余はなおさ
ら保証しない。

ただ満鉄の重役が始めて大連に渡つたとき、この化
物屋敷に陣を構えた事だけは事実である。その時この
建物は化物さえ住みかねるほどに荒れ果てて、
残焼家屋ざんしょうかおくとして、骸骨がいこつのごとくに突つ立っていたそう
である。陣取つた連中は死物狂で、天候と欠乏と不便
に對して戦後の戦争を開始した。汽車の中で炭を焚たい
て死しに損そくなつたり、貨車へ乗つて、カンテラを点つけて
用を足そうとすると、そのカンテラが揺ゆぶれてすぐ消

えてしまったり、サイホンを呑むと二三滴口へ這入る
だけであとはすぐ氷の棒に変化したり、すべてが探險
と同様であつた。

「清野が毛織の襯衣セいのシャツを半ダース重ねて着たのは彼時あのときだ
よ」

「清野は驚いて、あれつきりやつて来ない」

余は田中君と是公がこんな話をするのを聞いて、つ
い化物屋敷の事を忘れてしまった。

三階へ上^{あが}つて見ると豆ばかりである。ただ窓際^{まどぎわ}だけが人の通る幅ぐらいの床^{ゆか}になっている。余は静かに豆と壁の間をぐるぐる廻^{まわ}つて歩いた。氣をつけないと、足の裏で豆を踏み潰^{つぶ}す恐れがある上に、人のいない天井裏を無益に響^{ひび}かすのが苦^くになつたからである。豆は砂山のごとく脚下に起伏している。こちらの端から向うの端まで眺めて見ると、随分と長い豆の山脈^{さんみゃく}ができ上^あつていた。その真中を通して三カ所ほどに井桁^{いげた}に似た恰好^{かっこう}の穴が掘^ほつてある。豆はそこから断えず下へ落ちて行^いつて、平たく引割^{ひき}られるのだそうだ。時々どさつと音がして、三階の一隅^{ひとすみ}に新しい砂山ができる。

これはクーリーが下から豆の袋を背負^{しよ}つて来て、加減の好い場所を見計らつて、袋の口から、ばらに打ち撒^まけて行くのである。その時はぼうと咽^{むせ}るような煙^{けむ}が立って、数え切れぬほどの豆と豆の間に潜^{ひそ}んでいる塵^{ちり}が一度に踊^{おど}り上^{あが}る。

クーリーはおとなしくて、丈夫で、力があつて、よく働いて、ただ見物するのでさえ心持が好い。彼等の背中に担^{かつ}いでいる豆の袋は、米俵のように軽いものではないそうである。それを遥^{はるか}の下から、のそのそ背負^{しよ}つて来ては三階の上へ空^あけて行く。空けて行つたかと思つとまた空けに来る。何人がかりで順々に運ん

でくるのか知れないが、その歩調から態度から時間から、間隔からことごとく一樣である。通り路は長い厚板を坂に渡して、下から三階までを、普請ふしんの足場のようこしらに拵こしらえてある。彼等はこの坂の一つを登つて来て、その一つをまた下りて行く。上るもののぼと下りるものが左右の坂の途中で顔を見合せてもほとんど口を利きいた事がない。彼等は舌のない人間のように黙々として、朝から晩まで、この重い豆の袋を担かつぎ続けに担いで、三階へ上つては、また三階を下くだるのである。その沈黙と、その規則ずくな運動と、その忍耐とその精力とはほとんど運命の影のごとくに見える。實際立つて彼等

を観察していると、しばらくするうちに妙に考えたく
なるくらいである。

三階から落ちた豆が下へ回るや否や、大きな
麻風呂敷あさぶろしきが受取あつて、たちまち釜かまの中に運び込む。釜
の中で豆を蒸むすのは実に早いものである。入れるかと
思うと、すぐ出している。出すときには、風呂敷の四
隅を攫つかんで、濛々もうもうと湯気の立つやつを床ゆかの上に放り出
す。赤銅しゃくどうのような肉の色が煙の間から、汗で光びか々す
るのが勇ましく見える。この素裸すはだかなクーリーの体格を
眺めたとき、余はふと漢楚軍談かんそくぐんだんを思い出した。昔韓信かんしん
に股を潜くぐらした豪傑はきつとこんな連中に違いない。

彼等は胴から上の筋肉を逞しく露わして、大きな足に牛の生皮きがわを縫合かたせた堅い靴はを穿はいている。蒸した豆を藺いで囲んで、丸い杵わくを上から穿はめて、二尺ばかりの高さになった時、クーリーはたちまちこの靴のまま杵わくの中に這入はいつて、ぐんぐん豆を踏み固める。そうして、それを螺旋らせんの締棒しめぼうの下に押込んで、把てをぐるぐると廻し始める。油は同時に搾しぼられて床下ゆかしたの溝みぞにどろどろに流れ込む。豆は全くの糟かすだけになってしまう。すべてが約二三分の仕事である。

この油が唧筒ポンプの力で一丈四方もあろうという大きな鉄の桶おけに吸上げられて、静しずかに深そうに淀よどんでいると

ころを、二階へ上がって三つも四つも覗き込んだとき
には、恐ろしくなった。この中に落ちて死ぬ事があり
ますかと、案内に聞いたら、案内は平気な顔をして、
まあ滅多に落ちるような事はありませんねと答えたが、
余はどうしても落ちそうな気がしてならなかった。

クーリーは実にみごとに働きますね、かつ非常に静
粛だ。と出がけに感心すると、案内は、とても日本人
には真似もできません。あれで一日五六銭で食ってい
るんですからね。どうしてああ強いのだか全く分りま
せんと、さも呆れたように云って聞かせた。

股野が先生私の宅へ来なさらんか、八畳の間が空いています、夜具も蒲団もあります。ホテルにいるより呑気で好いでしょうと親切に云つてくれる。何でも股野の家の座敷からは、大連が一目に見渡されるのみならず、海が手に取るように眺められるのみならず、海の向うに連なる突兀極まる山脈さえ、坐っていると、窓の中に向うから這入つて来てくれるという重宝な家なんだそうである。

始めのうちは股野の自慢を好加減に聞き流して、そ

うかそうかと答えていたが、せつかくの好意ではあるし、もともと氣の多い男だから、都合によつては少し厄介やつかいになつても好いぐらいに思つて、ついでの時是公ぜこうにこの話をする、そんな所へ行つちやいかんとたちまち叱られてしまった。もしホテルが厭いやなら、おれの宅へ来い、あの部屋へ入れてやるからと云うんで、書齋の次の畳の敷いてある間を見せてくれるんだが、別に西洋流の宿屋に愛想あいそをつかした訳でもないんだから、じや厄介になろうとも云わなかつた。

是公は書齋の大きな椅子いすの上に胡坐あぐらをかいて、河豚ふぐの干物ひものを嚙かじつて酒を呑のんでいる。どうして、あんな堅

いものが胃に収容できるかと思うと、実に恐ろしくなる。そうこうする内に、おいゼムを持っているなら少しくれ、何だかおれも胃が悪くなったようだと言を出した。そうして、胃が悪いときは、河豚の干物でも何でも、ぐんぐん喰つて、胃病を驚かしてやらなければ駄目だ。そうすればきつと癒なおると云つた。酔っていたに違ひない。

余はポケットから注文の薬を出して相手にあてがった。これは二三日前は公といつしよに馬車に乗つて、市中を乗り廻した時、是公の御者ぎよしやから二十錢借りて大連の薬屋で買ったものである。その時は是公の御

者に対する態度のすこぶる叮嚀ていねいなのに気がついて少しく驚かされた。君ちよつとそこいらの薬屋へ寄つて、ゼムを買つてやつて下さいと云うんだから非凡である。君は御者に対して叮嚀過ぎるよと忠告してやったら、うんあの時の二十銭をまだ払わなかつたつけと思ひ出したように河豚の干物をまた嚙かつていた。

是公の御者には廿銭借かりがあるだけだが、その別当べっとうに至つては全く奇抜である。第一日本人じゃない。辮髮べんぱつを自慢そうに垂らして、黄色の洋袴ズボンに羅紗ろしゃの長靴はを穿はいて、手に三尺ほどの払子ほつすをぶら下げている。そうして馬の先へ立つて駆かける。よくあんな紳士的な服装なりを

して汗も出さずに走^{かけ}られる事だと思ふくらいに早く走ける。もつとも足も長かつた。身の丈^{たけ}は六尺近くある。

別当と御者はこのくらいにしてまた股野にかえるが、余は是公に叱^{なぐ}られたため、とうとう股野の家へは移らなかつた。けれども遊びには行つた。なるほど小山の上に建てられた好い社宅である。もつとも一軒^{いっけん}立てではない。長い棟^{むね}がいくつも灰色に並んでいるうちの一番はずれの棟の、一番最後の番号のその二階が彼の家族の領分であつた。岡の下から見ると、まるで英国の避暑地へ行つたようだとある西洋人が評したほど、外部は厚い壁で洋式にできているが、中には日本の香^{におい}が

する奇麗な^{きれい}疊が敷いてあつた。なるほど景色^{けしき}が好い。大連の市街が見える、大連の海が見える、大連の向うの山が見える。股野の家にはもつたないくらいである。余はそこで村井君に逢^あつて、股野の細君に逢つて、手厚い御馳走^{ごちそう}になつて歸つた。

十九

支那の宿屋を一つ見ましようと言いながら、股野は路の左側にある戸を開けて中へ這入^{はい}つた。そこには日本人が三人ほど机を並べて事務を執^とつていた。股野は

そのうちの紺こんの洋服を着た人を捕つかまえて、話を始めた。君ここは宿屋だろうと聞いている。宿屋じゃないよと立ちながら返事をしている。何だか様子が変になつて来た。やがて余はこの紺服の人に紹介された。紹介されて見ると、これは商業学校出の谷村君で、無論旅屋やどやの亭主ではなかった。谷村君はこの地で支那人と組んで豆の商売を営んでいる。したがって取引上の必要があつて、奥の方から大連へ出て来る豆の荷主にぬしと接触しなければならぬのだが、こつちの習慣として、こう云う荷主はけつして普通の旅籠はたごを取らない。出て来ればきつと取引先へ宿とまつて、用の済むまではいつまでで

もそこに滞在している。しかもその数は一人や二人ではない。したがって谷村君の奥座敷は一種の宿屋みたような組織にできている。

じゃその奥座敷をちよつと拝見できますかと云うと、谷村君はさあさあと自分から席を離れて、快よく案内に立たれる。余は谷村君の後へ追いて事務室の裏へ出た。股野も食付くつついて出た。裏は真四角な庭になっている。無論樹きも草も花も見当らない、ただの平たい場所である。そこを突き抜けた正面の座敷が応接間であつた。応接間の入口は低い板間いたまで、突当りの高い所に蒲団ふとんが敷いてある。その上に腰をかけて談判をする

のだそうだが、横着な事には大きな括枕くくりまくらさえ備えてある。しかし肱ひじを突くためか、頭を載のせるためかは聞き糺ただして見なかった。彼等は談判をしながら阿片あへんを飲む。でなければ煙草たばこを吸う。その煙管きせるは煙管と云うよりも一種の器械と評した方が好いくらいである。錫すずの胴どうに水を盛かつて雁首がんくびから洩もれる煙がこの水の中を通すつて吸口まで登あつてくる仕掛なのだから、慣れないうちは水を吸い上げて口中へ入れる恐れがある。一服やつて御覧なさいと勧められたから、やつて見たが、ごぼごぼ音がしてまるで脂やにを呑むような心持がした。

二階が荷主へやの室だと云うんで、二階へ上あがつて見ると、

なるほど室がたくさん並んでいる。その中の一つでは
よつたりばくち博奕を打っていた。博奕の道具はすこぶる雅な
ものであった。厚みも大きさも将棋しょうぎの飛車角ひしやかくぐらいに
当る札を五六十枚ほど四人で分けて、それをいろいろ
に並べかえて勝負を決していた。その札は磨いた竹と
薄い象牙ぞうげとを背中合せに接ついだもので、その象牙の方
にはいろいろの模様が彫刻してあった。この模様の
揃った札を何枚か並べて出すと勝になるようにも思わ
れたが、要するに、竹と象牙がぱちぱち触れて鳴るば
かりで、どこが博奕なんだか、実はいつこう解らなかつ
た。ただこの象牙と竹を接ぎ合わせた札を二三枚貰っ

て来たかった。

一つの室では五六人寄つて、そのうちの一人が笛ふえを吹くのを聞いていた。幕を開けて首を出したら、ぱたりと笛を歇やめてしまった。また吹き始めるかと思つて、しばらく室の中に立つていたが、とうとう吹かなかつた。室の中には妙な書が麗々と壁に貼はりつけてある。いずれも下手まずいものなのに、何々先生のために何々書すと云つたようにもったいぶつたのばかりであつた。股野が何か云うと、向うの支那人も何か云う。しかし両方の云う事は両方へ通じないようである。

波止場はとばから上あがつて真直まっすぐに行くと、大連の町へ出る。

それを真直に行かずに、すぐ左へ折れて長い上屋うわやの影を向うへ、三四町通り越した所に相生あいおいさんの家がある。

西洋館の二階を客間にして古い仏像やら鏡やら銅器陶器たぐいの類きれいを奇麗きれいに飾っているから、客間を見ただけではただ一通りの風流人としか見えない。相生さんは満鉄の社員として埠頭ふとう事務所じむしょの取締である。

もつと卑近な言葉で云うと、荷物の揚卸あげおろしに使われる仲仕なかしの親方をやっている。かつて門司の労働者が三

井に対してストライキをやったときに、相生さんが進んでその衝に当たったため、手際よく解決が着いたとか云うので、満鉄から仲仕の親分として招聘されたよ
うなものである。実際相生さんは親分氣質にでき上つ
ている。満鉄から任用の話があつたとき、子供が病氣
で危篤であつたのに、相生さんはさつさと大連へ来て
しまった。来て一週間すると子供が死んだと云う便り
があつた。相生さんは内地を去る時、すでにこの悲報
を手にする覚悟をしていたのだそうだ。

相生さんは大連に来るや否や、仲仕その他すべて埠頭に関する事務を取り扱う連中を集めてここに一部落

を築き上げた。相生さんの家を通り越すと、左右に並んでいる建物は皆自分の経営になったものばかりである。その中には図書館がある。倶楽部クラブがある。運動場がある。演武場がある。部下の住宅は無論ある。

倶楽部では玉を突いていた。図書館には沙翁全集さおうがあつた。ポルグレーヴの経済字彙じいがあつた。余の著書も二三冊あつた。

ここは柔道の道場に使っていますが、時によると講談をやったり演説をやったりしますと云う相生さん自身の説明について、中を覗のぞき込むと、なるほど道場にはちように好い建物がある。その奥に高座こうざができてい

て、いつでも寄席よせもしくは講演を開くような設備もある。講演でどんな講演ですかと聞き返したら、相生さんは、まあ内地から来られた人だとか何とかいうのを頼んでやりますと答えられた。ことによると、遠からぬうちに捕つかまって、ここへ引つ張り出されはしまいかと、その時すぐ気がついたが、真逆私まさかわたしはどうぞ廃よしにして下さいと、頼まれもしないうちに断るのも失礼だと思つて、はあなるほどと首肯うなずいて通り過ぎた。

最後にもつとも長い二階建の一棟ひとつむねの前に出た。これが共同生活をやらしている所でと、相生さんが先へ這入はいる。中は勧工場かんこうばのように真中を往来にして、同おなじ

く勧工場の見世^{みせ}に当る所を長屋の上り口にしてある。
だから長屋と長屋とは壁一重^{かべひとえ}で仕切られながら、約一
丁も並んでいるばかりか、三尺の往来を越すとすぐ向
うの家^{うち}になる。上り口を枕にして寝れば、吸付^{すいつけたばこ}莨^{ろう}の
やり取りぐらいはできるほど近い。相生さんが先へ
立つて、この狭い往来を通ると、裁縫^{しとせう}をしたり、子供
を寝かしたりしている神さん^{かみ}達が、みんな町寧^{ていねい}に挨拶^{あいさつ}
をする。しかし中には気がつかずに何か話しているの
も見える。

この部落に住んでいる人間が総^{そう}がかりになった上に、
その何十倍か何百倍のクーリーを使っても、豆の出盛^{でせか}

りには持て余すほど荷が後から後からと出てくる。相生さんの話によると、多い時は着荷ちやくにの量が一日ならし五千噸トシあるそうである。これがため去年雨期うきを持ち越した噸数は四万噸で、今年こんねんはそれが十五万噸のぼに上ったとか聞いた。

南北千五百尺東西四千二百尺の埠頭ふとうの側そばにこのくらい豆を積んだらずいぶん盛さかんなものだろう。

二十一

旅順から電話がかかってこつちへはいつ来るかとい

う問合わせである。おい誰がかけてくれるんだろうな
と橋本に聞いて見ると、橋本はそうだなあと云うだけ
で要領を得ない。おい名前は分らないのかとやむをえ
ずボイに尋ね返したら、ボイは依然として、ただ
民政署だみんせいしょと云ってかけて参りましたと同じ事を繰返し
ている。おおかた友熊ともくまだろうぐらいに橋本と二人で見
当をつけて返事をさせた。これが白仁しろに長官ちやうかんの好意から
出た聞き合せであつた事は旅順に着いて後のち始めて知つ
た。

旅順には佐藤友熊と云う旧友があつて、警視総長と
云ういかめ厳しい役を勤めている。これは友熊の名前が広

さつしゅうじん

告する通りの薩州人で、顔も氣質も看板のごとく
精悍せいかんにでき上がっている。始めて彼を知ったのは
駿河台するがだいの成立学舎という汚きたない学校で、その学校へは
佐藤も余も予備門に這入はいる準備のために通学したので
あるからよほど古い事になる。佐藤はその頃筒袖つつそでに、
脛すねの出る袴はかまを穿はいてやって来た。余のごとく東京に
生れたものの眼には、この姿がすこぶる異様に感ぜら
れた。ちょうど白虎隊びやつこたいの一人いちにんが、腹を切り損なつて、
入学試験を受けに東京に出たと思われなかった。
教場へは無論下駄げたを穿はいたまま上あがつた。もつともこれ
は佐藤ばかりじゃない。我等もことごとく下駄のまま

あがつた。上草履うわぞうりや素足すあしで歩くような学校じゃないのだから仕方がない。床ゆかに穴が開あいていて、気をつけないと、縁の下へ落ちる拍子ひょうしに、向脛むこうずねを摺剥すりむくだけが、普通の往来より悪いぐらいのものである。

古い屋敷をそのまま学校に用いているので玄関からがすでに教場であつた。ある雨の降る日余はこの玄関に上つて時間の来るのを待っていると、黒い桐油とうゆを着て饅頭笠まんじゅうがさを被かぶつた郵便脚夫が門から這入つて来た。不思議な事にこの郵便屋が鉄瓶てつびんを提さげている。しかも全くの素足である。足袋たびは無論の事、草鞋わらじさえ穿はいていない。そうして、普通なら玄関の前へ来て、郵便と

大きな声を出すべきところを、無言のまますたすた敷
台から教場の中へ這入^{はい}つて来た。この郵便屋がすなわ
ち佐藤であつたので大いに感心した。なぜ鉄瓶を提^さげ
ていたものかその理由^{わけ}は今日^{こんにち}までついに聞く機会がな
い。

その後佐藤^ごは成立学舎の寄宿へ這入^{はい}つた。そこで
賄^{まかない}征伐をやつた時、どうした機勢^{はすみ}か額^{きず}に創^{きず}をして、
しばらくの間白布^{しろぬの}で頭を巻いていたが、それが、
後鉢巻^{うしろはちまき}のようにいかにも勇ましく見えた。賄^{なぐ}に擲^{なぐ}
れたなど調戲^{からか}つて苛^{ひど}い目に逢^あつたので今にその颯爽^{さつそう}
たる姿を覚えてゐる。

佐藤はその頃頭に毛の乏い男であつた。無論老朽

した禿はげではないのだが、まあ土質どしつの悪い草原のように、

一面に青々とは茂らなかつたのである。漢語でいうと

たんぱつしようしよう

短髪種々とても形容したら好いのかも知れない。風

が吹けば毛の方で一本一本に靡なびく傾かたむきがあつた。この

頭は予備門へ這入つても黒くならなかつた。それで

みんな

皆して佐藤の事を寒雀かんすずめ寒雀と囃はやしていた。当時余は

寒雀とはどんなものか知らなかつた。けれども佐藤の

頭のようなものが寒雀なんだろうと思つて、いっしょ

になつてやつぱり寒雀寒雀と調戯からかつた。この渾名あだなを発

明した男はその後技師になつて今は北海道にいる。

話が前後するようだが、旅順に来て十何年ぶりに佐藤に逢つて、例の頭を注意して見ると、不思議な事に、その頭には万遍まんべんなく綿密に毛が生えていた。もつとも黒いのばかりではなかった。近頃は正当防禦ぼうぎよのため、こう短く刈つているんだと云つて、三分刈の濃い頭を笑いながら搔かいて見せた。

旅順から二度目の電話がかかった翌日の朝、橋本と余は、この旧友に逢うため、また日露の戦跡を觀みるため、大連から汽車に乗った。乗る時、是公が友熊ともくまによりしくと云った。是公は何か用事があつたと見えて、国沢君と二人で停車場ステーションの構内を横切つて妙な方角へ向

いて歩いて行つた。やがて二人の影は物に遮ぎ^{さへ}られて、
汽車の窓から見えなくなつた。そうして満洲に有名な
高梁^{こりやう}の色が始めて眼底に映じ出した。汽車は広い野
の中に出たのである。

二十二

おい旅順に着いたら久しぶりに日本流の宿屋へ泊ろ
うかと橋本に相談を掛けるとそうだな浴衣^{ゆかた}を着てごろ
ごろするのも好いねという同意である。橋本は新しく
蒙古から帰つたので、しきりに支那宿に降参した話を

始めた。その支那宿には、名は塞北さいほくに馳せ、味あじわいは江南を圧すなどという広告の文字がべたべた壁に貼はりつけてあるそうだ。橋本はこう云う文句をたくさん手帳に控えている。ほかに使い路のない文句だものだから、汽車の中で、それを残らず余に読んで聞かせてしまった。二人は笑いながら日本流の奇麗きれいな宿屋を想像して旅順のプラットフォームに降りた。降りるとそこに馬車がある。我々の名前を聞くものがある。

この馬車が民政署の馬車で、我々を尋ねてくれた人が、渡辺秘書わたなべひしよであるという事を発見した時は兩人ともだいぶ恐縮した。橋本を振り返ると相変らず鼻の先を

反^そらして、台湾パナマだか何だかペコペコになった帽子を被^{かぶ}っている。おい宿屋はどうするんだいと小さな声で聞くと、うんそうさなと云ったが、そのうち二人とも馬車へ乗らなければならぬ段になった。いったい橋本といっしょにあるときは、何でも橋本が進んで始末をつけてくれる事に昔からきまっているんだからこの際もどうかするだろうと思つて放つておいた。すると予想通、日本流の宿屋へ行くつもりで来たんですがと渡辺さんに相談し始めた。ところが渡辺さんはどうも御泊りになられるような日本の宿屋は一軒もありませんから、やっぱり大和^{やまと}ホテルになさった方が好

いでしようと忠告している。

やがて馬車は新市街の方へ向いて動き出した。二人は十五分の後ホテルの二階に導かれて、行き通いのできる室を二つ並べて取った。そこで革靴の中から刷毛へやを出して塵ちりだらけの服を払ったあとで、しばらく休息のため安楽椅子に腰をおろして見ると、急に気がついたように四辺あたりが森閑しんかんとしている。ホテルの中には一人も客がいないように見える。ホテルの外にもいつさい人が住んでいるようには思われない。開廊ヴェランダへ出て往来を眺めると、往来はだいぶ広い。手摺てすりの真下にある人道の石の中から草が生えて、茎の長さが一尺余りに

なつたのが二三本見える。日中だけれども虫の音が微かに聞える。隣は主のない家と見えて、締め切った門やら戸やらに蔦が一面に絡んでゐる。往來を隔てて向うを見ると、ホテルよりは広い赤煉瓦の家が一棟ある。けれども煉瓦が積んであるだけで屋根も葺いてなければ窓硝子もついてない。足場に使った材木さえ処々に残っているくらいの半建である。淋しい事には、工事を中止してから何年になるか知らないが、何年になつてもこのままの姿で、とうてい変る事はあるまいと云う感じが起る。そうしてその感じが家にも往來にも、美しい空にも、一面に充ちている。余は開廊の手摺を

てのひら

掌で抑えながら、奥にいる橋本に、淋しいなあと云つた。旅順の港は鏡のごとく暗緑に光った。港を囲む山はことごとく坊主であつた。

ルインス

まるで廃墟だと思ひながら、また室の中に這入ると、寢床には雪のような敷布がかかっている。床には柔かい絨毯じゅうたんが敷いてある。豊かな安樂椅子が据すえてある。器物はことごとく新式である。いっさいが整つて

いる。外と内とは全く反対である。満鉄の経営にかか

もと

そろばん

もう

るこのホテルは、固より算盤を取つての儲け仕事でないといふ事を思ひ出すまでは、どうしても矛盾の念が頭を離れなかつた。

食堂に下りて、窓の外に簇むらがる草花の香においを嗅かぎながら、橋本と二人静かに午餐しんの卓に着いたときは、機会があつたら、ここへ来て一夏気楽に暮したいと思つた。

二十三

旅順に着いた時汽車の窓から首を出したら、つい鼻の先の山の上に、円柱のような高い塔が見えた。それがあまり高過ぎるので、肩から先を前の方へ突き出して、窮屈あおむに仰向あおむかなくては頂点てっぺんまで見上げる訳に行か

なかった。

馬車が新市街を通り越してまたこの塔の真下に出た時に、これが白玉山はくぎやまぐざんで、あの上の高い塔が表忠塔だと説明してくれた。よく見ると高い灯台のような恰好かっこうである。二百何尺とかと云う話であつた。この山の麓ふもとを通り越して、旧市街を抜けると、また山路にかかる。その登り口を少し右へ這入はいった所に、戦利品陳列所がある。佐藤は第一番にそれを見せるつもりで兩人ふたりを引張つて来た。

陳列所は固もとより山の上の一軒家で、その山には樹きと名のつくほどの青いものが一本も茂っていないのだから

ら、はなはだ淋^{さび}しい。当時の戦争に従事したと云う中尉のA君がただ独^{ひと}り番をしている。この尉官は陳列所に幾十種となく並べてある戦利品について、一々叮嚀^{ていねい}に説明の勞を取ってくれるのみならず、兩人を鷄冠^{けいかん}山の上まで連れて行つて、草も木もない高い所から、遙^{はるか}の麓を指さしながら、自分の従軍当時の実歴譚^{じつれきだん}をことごとく語つて聞かせてくれた人である。始め佐藤から砲台案内を依頼したときには、今日はちと差支^{さしつか}えがあるから四時頃までならと云う条件であつたが、山の出鼻へ立つて洋剣^{サーベル}を鞭^{むち}の代りにして、あちらこちらと方角を教える段になると、肝心^{かんじん}の要事はまるでそつちの

けにして、満洲の赤い日が、向うの山の頂いただきに、大き
くなって近づくまで帰ろうとは云わなかった。もし忘
れたんじや気の毒だと思つて、こつちから注意すると、
何ようございます、構いませんと断りながら、ますま
す講釈をしてくれる。あんまり不思議だから、全体何
の御用事が御有りなのですかと、詮索せんさくがましからぬ程
度に聞いて見ると、実は妻さいが病氣でと云う返事である。
さすが横着な両人も、この際だけは、それじや御迷惑
でもせつかくだからついでにもう少し案内を願おうと
云う気にもなれなかった。言葉は無論出なかった。長
い日が山の途中で暮れて、電氣の力を借りなければ人

の顔が判然分らない頃になって、我々の馬車がようや
く旧市街まで戻った時、中尉はある煉瓦塀れんがべいの所で、そ
れじや私はここで失礼しますと挨拶あいさつして、馬車から下
りて、門の中へ急いで這入って行かれた。この煉瓦の
塀を回めぐらした一構ひとかまえは病院であつた。そうして中尉の
妻君はこの病院の一室に寝ていたのである。

これほど世話になり、面倒を掛けた人の名前を忘れ
るのははなはだすまん事だが、どうしても思い出せな
い。佐藤に、よろしくと伝言を頼んだ時は、ただ、あ
の中尉君と書いた。ここに某中尉ぼうちゆういなどとよそよそしく
取り扱うのはあまり失礼だから、やむをえずA君とし

ておいた。

A君の親切に説明してくれた戦利品の一々を叙述したら、この陳列所だけの記載でも、二十枚や三十枚の紙数では足るまいと思うが、残念な事にたいてい忘れてしまった。しかしたった一つ覚えているものがある。

それは女の穿いた靴はの片足である。地じが縐子しゆすで、色は薄鼠うすねずみであつた。その他の手投弾てなげだんや、鉄条網や、魚形水

雷や、偽造の大砲は、ただ単なる言葉になつて、今は頭はつきりの底に判然残つていないが、この一足の靴だけは色と云い、形と云い、いつなん時ときでも意志の起り次第

鮮あざやかに思い浮べる事ができる。

戦争後ある露^{ロシア}西^シ亜^アの士官がこの陳列所一覽のためわざわざ旅順まで来た事がある。その時彼はこの靴を一目^み観て非常に驚いたそうだ。そうしてA君に、これは自分の妻の穿^はいていたものであると云つて聞かしたそうだ。この小さな白^きい華^や奢^{しゃ}な靴の所有者は、戦争の際に死んでしまったのか、またはいまだに生存しているのか、その点はつい聞き洩^もらした。

二十四

今までは白^{しろ}馬^{うま}を着けた佐藤の馬車に澄まして乗って

いたが、山へかかるや否や、例の泥だらけの掘出しものの中へ放り込まれてしまった。とうてい普通の馬車では上がれないと云うんだからやむをえない。それでも露西亞人ロシアじんだけあつて、眼にあまる山のことがとくに砲台を構えて、その砲台のことがとくに、馬車を駆つて頂辺てっぺんまで登れるような広い路みちをつけたのは感心ですとA君が語られる。実際その当時は奇麗きれいな馬車を傷めいたずに、心持よく砲台のある地点まで乗りつけられたものと見える。ところが戦争がすんで往復の必要がなくなつたので、せつかくできた山路に手を入れる機会を失つたため、我々ものずきごとき物数奇は、かように零落れいらくした

馬車をさえ、時々復活させる始末になるのである。元
来旅順ほど小山が四方に割拠よもかつきよして、禿頭を炎天に曝さらし
合あっている所はない。樹きが乏しい土質どしつへ、遠慮のない
強雨こつうがどつと突き通ると、傾斜の多い山路の側面が、
すぐ往来へ崩くずれ出す。その崩れるものがけつして尋常
の土じゃない。堅い石である。しかも頑固がんこに角張かどばつて
いる。ある所などは、五寸から一尺ほどもあろうと云
う火打石のために、累々るゐるゐと往来を塞ふさがれている。零落
した馬車は容赦なく鳴動めいどうしてその上を通るのだから、
凸凹でこぼこの多い川床かわどこを渡るよりも危険である。二百三高地
へ行く途中などでは、とうとうこの火打石に降参して、

馬車から下りてしまった。そうして痛い腹を抱えながら、膏汗あぶらあせになつて歩いたくらいである。鷄冠山けいかんざんを下りるとき、馬の足搔あがきが何だか変になつたので、氣をつけて見ると、左の前足の爪の中に大きな石がいつぱいに詰はまつていた。よほど厚い石と見えて爪から余つた先が一寸いっすんほどもある。したがつて馬は一寸ちんばがた跛を引いて車体を前へ運んで行く訳になる。席から首を延ばして、この様子を見た時は、安んじて車に乗っているのが氣の毒なくらい、馬に對して痛わしい心持がした。御者ぎよしやに注意してやると、御者は支那語で何とか云いながら、鞭むちを棄すてて下へ下りたが、非常に固く詰つまつてい

たと見えて、叩たたいても引つ張つても石が取れないので、
またのそのそ御者台へ上がった。そうして、後うしろにい
る余の方をふりむいて、にやにや笑いながら、また鞭
を鳴らし出した。馬も存外平気なもので、そのままと
うとう大和ホテルまで帰つて来た。

橋本と余はこう云う馬車の中で、こう云う路の上に
揺振ゆすぶられべく旧市街から出立した。あれがステッセル
將軍の家だと云うのを遠くから見ると、なかなか立派
にできている。戦争の烈はげしくならない時は、將軍がみ
ごとな馬車を駆かつてそこいらを乗り廻めぐしているのが
遙はるかの先から見えたそうである。A君の指ゆびさして教えら

れた中で、ただ一つ質素な板囲いたがこいの小さい家があつた。それがまるで日本の内地で見る普通の木造なのだから珍らしかつた。何とか云う有名な將軍の住宅だと説明されたが、不幸にしてその有名な將軍の名を忘れてしまった。何でも非常に人望のある人で、戦争のときも一番先に打死うちじにをしたのだそうである。ああ云う質素の家に住んでおられたのも、一つは人望のあつた原因になつていたのでありましよう。とA君は丁寧に敬慕の意を表ひようされる。この將軍は戦争だけには熱心で、ほかの事にはよほど無頓着むとんじやくであつた人らしい。この辺にある露国の將軍などの住宅は皆それ相應に立派なものば

かりである。新市街の白仁長官しらにちようかんの家を訪ねた時、結構な御住居おすまいだが、もとは誰のいた所ですかと聞いたたら、何でもある大佐の家だそうですと答えられた。こう云う家に住んで、こういう景色けしきを眼の下に見れば、内地を離れる賠償ばいしょうには充分なりますねと云つたら、白仁君も笑いながら、日本じやとても這入はいれませんと云われたくらいである。

そのうち馬車は無鉄砲に山路やまみちを上つて、旅順の市街を遙の下にうちやるようになった。A君は坂の途中で車を留めて、私は近路を歩いて、御先へ行つて御待ち申しますと云いながら、左手の急な岨路そばみちをずんずん

登って行つた。我々の車はまたのそのそ動き出した。

二十五

下を見下すと、山の側面はそれほど急でないが、樹きと名のつくような青いものはまるで眸ひとみを遮さへぎらない。一眼に麓ふもとまで透すかされるのみならず、麓からさき一里余の畠はたけが真直まつすぐに眉まゆの下に集まつて来る。この辺の空気は内地よりも遙に澄んでゐるから、遠くのものが、つい鼻の先にあるように鮮あざやかである。そのうちで高梁こうりやうの色が一番多く眼を染めた。

あの先に、小指の頭のような小さい白いものが見えるでしょう、あすこからこつちの方へ向いて対溝たいこうを掘出したのですとA君が遠くの方を指さしながら云つた。この辺に穴を掘るのは石を割ると一般なのだから一町掘るのだつて容易な事ではない。現に外濠そとぼりから窖道こうどうへ通ずる路をつけるときなどは、朝から晩まで一日働いて四十五サンチ掘つたのが一番の手柄であつたそうだと。余は余の立っている高い山の鼻と、遠くの先にある白いものを見較みくらべて、その中間に横よこたわる距離を胸算用で割り出して見て、軍人の根氣の好いのにごとごとく敬服した。全体どこまで掘つて来たのですかと

聞き返すと、ついそこですと洋剣サーベルを向けて教えてくれ

た。何でも九月二日から十月二十日とかまで掘つてい

たと云うのだから恐るべき忍耐である。その時敵も砲

台の方から反対砲道はんだいこうどうと云うのを掘つて来た。日本の兵

卒が例のごとく工事をしているとどこかでかんかん石

を割る音が聞えたので、敵も暗い中を一寸二寸と近

寄つて来た事が知れたのだと云う。爆発薬おかげの御蔭で

外濠そとぼりを潰つぶしたのはこの時の事でありますと、中尉はそ

の潰れた土山の上に立つて我々を顧みた。我々も無論

その上に立っている。この下を掘ればいくらでも死骸しがい

が出て来るのだと云う。

ひとすみ

土山の一隅が少し欠けて、下の方に暗い穴が半分見

てんじょう

える。その天井が厚さ六尺もあろうと云うセメント

ででき上っている。身を横にして、その穴に這い込み

かいろう

ながら、だらだらと石の廻廊に降りた時に、仰向いて

あおむ

見て始めてその堅固なのに気がついた。外濠を崩した

くず

上に、この厚い壁を破壊しなければ、砲台をどうする

事もできないのは攻手に取って非常な困難である。し

かもこの小さな裂け目から無理に割り込んで、一寸二

せんりよう

寸とじりじりにセメントで築上げた甬道を専領する

しんぼうくら

に至っては、全く人間以上の辛抱比べに違ない。その

時両軍の兵士は、この暗い中で、わずかの仕切りを界

さかい

に、ただ一尺ほどの距離を取って戦いくさをした。仕切は土囊どのおを積んで作ったとかA君から聞いたように覚えてゐる。上から頭を出せばすぐ撃うたれるから身体からだを隠して乱射したそうだ。それに疲れると鉄砲をやめて、両側で話をやった事もあると云った。酒があるならくれと強請ねだったり、死体の収容をやるから少し待てと頼んだり、あんまり下らんから、もう喧嘩けんかはやめにしようかと相談したり、いろいろの事を云い合つたと云う話である。

三人は暗い廻廊を這い出して、また土山の上に立つた。日は透すき徹とおるように明かるく坊主山を照らしてい

る。野菊に似た小さな花が処々に見える。じつと日を浴びて佇たたずんでいると、微かすかに虫の音ねがする。草の裏で鳴いているのか、崩れ掛った窖内こうないで鳴いているのか分らなかつた。向うの方に支那人の影が二人見えたが、我々の姿を認めるや否や、草の中に隠れた。ああやつて、何か掘りに来るんです。捕つらまると怖こわいものだから、すぐに逃げます、なかなか取り抑えるのが困難ですとA君が苦笑した。

後側うしろがわへ回ると広い空堀からぼりの中に立派な二階建の兵舎がある。もとは橋をかけて渡ったものと思われるが、今では下りる事もできない。兵舎の背はもとより、山

に囲われて、外からは見えなくなっている。三人は
空濠^{からぼり}を横に通り越してなお高く上った。とうとう四方
にあるものは山の頭ばかりになった。そうしてそれが
一つ残らず昔の砲台であった。中尉はそれらの名前を
ことごとく諳^{そら}んじていた。余は遮^{さへぎ}るもののない高い
空の真下に立って、数限りもない山の背を見渡しなが
ら、砲台巡^{ほうだいめぐ}りも容易な事ではないと思った。

二十六

大連に着いてから二三日すると、満洲^{まんしゅう}日々の伊藤

たいりゆうちゆう

君から滞留中^{たいりゆうちゆう}に是非一度講演をやつて貰いたいという依頼であつた。ええ都合ができればと受合つたようになまた断つたような軽い挨拶^{あいさつ}をして旅順^{りゆうじゆん}に來た。するとその伊藤君が我々より一日前に同じ大和ホテル^{やまと}に泊つていたので、ただ、やあ來ているねぐらいでは事がすまなくなつた。伊藤君の話によると、余の承諾を得て講演を開くと云う事を、もう自分の新聞に広告してしまつたと云うんだから、たちまち弱つた。どうしてもやらなければならぬように伊藤君は頼むし、何だかやれそうもない気分ではあるし、かたがた安樂椅子^{しりぞ}に尻^{しり}を埋めて、苦^{にが}く渋り出した。すると橋本がにや

にや笑いながら、まあやってやるさと傍^{はた}から余計な事を云う。実を云うと、講演は馬車でホテルに着くや否や、ここの和木君^{わきくん}からも頼^{たの}まれている。もつともこの方は暇^{ほま}がないので、頼^{たの}まれ放^{ばな}しの体^{てい}であるが、大連に帰ればそう多忙らしく見せる訳には行かない。橋本はそこをよく見破っているので、君そう云うときには快よく承諾するものだとか君のような人はやる義務があるさとかいろいろな口を出す。余の大連でしゃべらせられたのは全くこの男の御蔭^{おかげ}である。しかも短い時間のうちに二遍もやらせられた。その内の一遍では、云う事が無くって仕方がなかったから、私は今晚、な

ぜ講演というものが、そう容易にできるものでないか、すなわち講演ができない訳を講演致しますと云つて、妙な事を弁じてしまった。それを是公ぜこうが聞きに来ていて、うん貴様はなかなか旨い、これからどこへ出て演説しようとするのだ、おれが許してやると評したからありがたい。けれども勧告の本人たる橋本は、平気な顔をして、どこか遊んで歩いていて聞きに來なかつた。そのくせ營口でまた頼まれると早速、君やるさ、せつかく頼むんだものと例の通りやり出したので、やむをえず痛い腹の上にかけていた蒲団ふとんを跳ね退はけて、演説をしに行つた。その代りおれが先へやるよと断つて、

橋本のは聞かずに、すぐ宿屋へ歸つて来て、また腹の上に蒲団を掛けていた。橋本はこう云うところを見ると、君演説をやつてゐる間は苦しいかなどと氣樂な質問をする。もつとも招待を断つたり何かするときには、いや實際この男は胃病でといつても証人に立つてくれた。して見ると、橋本はただ演説に対してだけ冷刻なれいこくのかも知れない。奉天でも危うく高い所へ乗せられるところを、一日日取ひとりが狂つたため、いかな橋本にも、君頼まれたときにはやつてやるべきだよを繰返す余地がなかった。京城では発着が前後した上に、宿屋さえ違つたものだから、泰然と講演を謝絶する余裕があつ

た。これは偏ひとえに橋本のいなかった御蔭である。

面白い事に、この演説の勧誘家はその後札幌へ帰る

や否や、自身と烈はげしい胃病に罹かかつて、急に苦しみ出した。

それで普通ならば毎週十時間余も講義を持たせられるところを、わずか一時間に減らして貰つて、その一時間が済むとすぐに薬を吞むそうだ。旅行中は君の病氣である事を知りながら、無理に講演を勧めて大いに悪かった。何事も自分で経験しないうちは分らぬもので、こうして胃病に悩まされて始めて気がついたが、痛いときに演説などができる訳のものでは、けつしてない。君があの際奮ふるつて演壇に立ったのは實際感心で

ある、と大いに褒めたり詫まつたりして来た。實際橋本の云う通りである。しかしはたして橋本の推察するほど胃が痛かったら、いかな余も、いくらせつかくだから君出るが好いよを繰返されたって、ついに講演を断ってしまったろう。

二十七

白仁しらにさんから正餐せいさんの御馳走ごちそうになったときは、民政部内の諸君がだいぶ見えた。みんな揃そろってカーキ色の制服を着ていた。食事が済んで別室へ戻って話してい

ると佐藤が、あしたは朝のうち二百三高地にひやくさんこうちの方を見た

ら好かろう、案内を出すからと云つてくれる。余も好

かろうと答えた。すると、大した案内にも及ぶまいと

笑いながら相談を掛けた。我々は一私人で、ただ遊覧

に來たのだから、公おおやけの職務を帯びている人を使つて

はすまないが、せつかく案内をつけてくれると云うな

ら、小使でも何でも構わない。非番ひばんか閑散の人を一人

世話してくれと頼んだ。これは正直恐れ入った本当の

謙遜けんそんである。その時佐藤は懷中から自分の名刺を出し

て、端の方に鉛筆で何か書いて、じゃ明日あしたの朝八時に

この人が来るから、來たらいっしょに行くが好いと

云つて分れた。

明日の朝の八時は例いつもの通り強い日が空にも山にも港にも一面に輝いていた。馬車を棄すてて山にかかったときなどは、その強い日の光が毛孔けあなから総身そうしんに浸しみこ込むように空気が澄徹ちようてつしていた。相変らず樹きのない山で、山の上には日があるばかりだから、眼の向く所は、左右ともに、また前後ともに、どこまでも朗らかである。その明かな足元から、ばつと音がして、何物だか飛び出した。案内の市川君が鶺鴒うずらですと云つたので始めて、そうかと気がついたくらい早く、鶺鴒は眼を掠かすめて、空濶くうかつの中に消えてしまった。その迹あとを見上げると、

遥^{はるか}なる大きい鏡である。

その時我々はもう頂^{いただき}近くにいた。ここいらへも砲丸^{たま}が飛んで来たんでしようなと聞くと、ここでやられたものは、多く味方の砲丸自身のためです。それも砲丸自身のためと云うより、砲丸が山へ当って、石の碎けたのを跳ね返^はしたためです。こう云う傾斜のはなはだしい所ですから、いざと云う時に、すぐ遠くから駆け寄せて敵を追^おい退ける訳^のに行きませんので、みんなこう云うところへ平たくなって嚙^{かじ}りついているのであります。そうして味方の砲丸が眼の前へ落ちて、一度に砂煙^{すなけむり}が揚^あがるとその虚^{きよ}に乗じて一間か二間ずつ

這はい上がるのですから、勢い砂煙まじに交る石のために身体中きず創だらけになるのです。と市川君は詳しい説明を与えられた。

味方の砲弾たまでやられなければ、勝負のつかないような烈はげしい戦いくさは苛過つらぎると思おもいながら、天辺てつべんまで上のぼった。そこには道標どうひょうに似た御影みかげの角柱かくちゆうが立っていた。その右を少しだらだらと降りたところが新あらたに土を掘返したごとく白茶しらちやけて見える。不思議な事にはところどころが黒ずんで色が変わっている。これが石油を檻樓ぼろに浸しみ込こまして、火を着けて、下から放り抛ほうげたところですよ、市川君はわざわざ崩くずれた土饅頭どまんじゆうの上まで降りて

来た。その時遙^{はるか}下の方を見渡して、山やら、谷やら、

はたけ

畠やら、一々実地の地形について、当時の日本軍がど

う云う径路^{けいろ}をとつて、ここへじりじり攻め寄せたかを

ついでながら物語られた。不幸にして、二百三高地の

上までは来たようなものの、どっちが東でどっちが西

か、方角がまるで分らない。ただ広々として、山の頭

がいくつとなく起伏している一角に、藍色^{あいいろ}の海が二カ

処^{ひら}ほど平たく見えるだけである。余はただ朗かな空の

下に立って、市川君の指さす方^{かた}を眺^{なが}めていた。

自分でここへ攻め寄せて来た経験をもっている市川

君の話は、はなはだ詳しいものであった。市川君の云

うところによると、六月から十二月まで屋根の下に寝た事は一度もなかったそうである。あるときは水の溜たまった溝みぞの中に腰から下を濡ぬらして何時間でも唇くちびるの色を変えて竦すくんでいた。食事は鉄砲を打たない時を見計みはからつて、いつでも構わず口中に運んだ。その食事さえ雨が降つて車の輪が泥の中に埋うまつて、馬の力ではどうしても運搬うんぱんができなかった事もある。今あんな真似まねをすれば一週間経たないうちに大病人になるにきまつています。医者に聞いて見ると、戦争のときは身体からだの組織そしよくがしばらくの間に變つて、全く犬や猫と同様になるんだそうですと笑っていた。市川君は今旅順の巡

査部長を勤めている。

二十八

旅順の港は袋の口を括くくつたように狭くなつて外洋に
続いている。袋の中はいつ見ても油を注さしたと思われ
るほど平らかである。始めてこの色を遠くから眺めた
ときは嬉しかった。しかし水の光が強く照り返して、
湾内がただ一枚に堅く見えたので、あの上を舟で漕こぎ
廻めぐつて見たいと云う気は少しも起おらなかった。魚を捕と
る料簡りようけんは無論無かつた。露西亞ロシアの軍艦がどこで沈没

したろうかななどと思い浮かべる暇も出なかった。ただ頭へびかぴかと、平たい研ぎ澄とすましたものが映った。

余は大和ホテルの二階からもこの晴やかな色を眺め

た。ホテルの玄関を出たり這入はいったりするときにもこ

の鋭い光の断片に眼を何度となく射られた。それでも

単に烈はげしい奇麗きれな色と光だなと感ずるだけであつた。

佐藤から港内を見せてやるからと案内されるまでは、

とうてい港内は人間の這入るところではないくらいに、

頭の底で、無意識ながら分別していたらしい。

さあ行くんだと催促された時は、なるほど旅順に来る以上、催促されなければならんはずの場処へ行くん

だと思つた。今日の同勢は朝大連から来た田中君を入れて五人である。港務部を這入るときに水兵がこの五人に礼をした。兵隊に礼をされたのは生れてこれが初はじめてであつた。佐藤が真先に中へ這入つて、やがて出て来たから、もう舟に乗れるのかと思つたら、おい這入れ這入れという。我々は石垣の上に立っていた。足元にはすぐ小蒸氣こじょうきが繋つないである。我々の足は、家の方より、むしろ水の方に向いていた。

十分の後五人はまた河野中佐といつしよに家を出てすぐ小蒸氣に移つた。海軍の将校が下士や水兵を使うめいりようのは実に簡潔明瞭である。船は河野中佐の云いなり

次第の速力で、思う通りの方角へ出た。港の入口ではここかしこの潜水器へ船の上から空気を送っている。船の数は十艘そう近くあった。みんな波に揺られて上あつたり下さがつたりしている。我々五人のも固もとより平たいらではない。鏡のように見えた湾の入口がこうまで動いているとは思いがけなかった。波で身体の調子が浮いたり沈んだりする上に、強い日が頭から射いりつけるので、少し胸が悪くなった。河野さんは軍人だから、そんな事に気のつくはずがない。ああ云う唧筒ポンプで空気を送るのは旧式でね、時々潜水夫を殺してしまいますよと講釈をしている。田中君はふうんとさも感心したらしく聞

いている。

河野さんの話によると、日露戦争の当時、この附近に沈んだ船は何艘なんそうあるか分らない。日本人が好んで自分で沈めに来た船だけでもよほどの数になる。戦争後何年かの今日こんにちいまだに引揚げ切れないところを見てもおおよその見当はつく。器械水雷などになるとこの近海に三千も装置したのだそうだ。

じゃ今でも危険ですねと聞くと、危険ですともと答えられたのであるほどそんなものかと思った。沈んだ船を引揚げの方法も聞いて見たが、これは委くわしく覚えてる、百キロぐらいな爆発薬で船体を部分部分に切

り壊して、それを六吋^{インチ}の針金で結^{ゆわ}えて、そうして六百
噸^トのブイアンシーのある船を、水で重くした上、干潮^{かんちよう}
に乗じて作事^{さくじ}をしておいて、それから満潮の勢いと唧
筒の力で引き揚げるのだそうだ。しかし我々が眺めて
いた時は、いつまで立っても、何も揚つて来そうにな
かった。

港の入口は左右から続いた山を掘り割つたように岸
が聳^{そび}えていて、その上に砲台がある。あすこから
探海灯^{たんかいとう}で照らされると、一番困る。まるで方角も何も
分らなくなつてしまうと河野さんが高い処を指さした。
やがて小蒸気は煙りを逆に吐いて港内に引返した。

戦艦が並んで撃沈されたという前を横に曲ってまた元の石垣の下へ着いた。もと向う岸には戦利品のブイや錨いかりがたくさん並んでいる。あれで約三十万円の価格ですと河野さんが云った。門の出口には防材ぼうざいの標本が一本寝かしてあった。その先から尖った剣けんのようなものが出ていた。

二十九

風呂を注文しておいたら、用意ができたと見えて、向うの部屋で、湯の迸ほとばしる音が盛さかんにする。靴を脱

いで、スリッパをつつかけて、戸を開けに掛ると、まだ廊下に出ないうちに給仕がやつて来た。田中さんがいつしよにスキ焼を食べにいらつしやいませんかと云う案内である。スキ焼の名はこの際兩人に取つて珍しい響がした。けれども白状すると、毫ごうも食う気にはならなかった。スキ焼つて家うちで拵こしらえるのかいと尋ねると、いえ近所の料理屋ですと云う。近所の料理屋はスキ焼よりも一層不思議な言葉である。ホテルの窓から往来を一日眺めていたつて、通行人は滅多めったに眼に触れないところである。外へ出て広い路を岡の上まで見通すと、左右の家は数えるほどしか並んでいない。

そうしてそれがことごとく西洋館である。しかも三分の一は半建はんだてのまま雨露あめつゆに曝さらされている。他の三分の一は空家あきやである。残る三分の一には無論人が住んでいられけれどもその主人はたいてい月給を取って衣食するものとしか受け取れない構かまえである。新市街という名はあるにしても、その実は閑静しじつな寂さびれた屋敷町に過ぎない。その屋敷のどこにスキ焼を食わす家があるかと思うと、一種小説に近い心持が起る。

ただ、昼の疲れを忘れるため、胃の不安を逃のがれるため、早く湯に入つて、レースの蚊帳かやの中で、穩かに寝たかつた。そこで給仕に、今湯に這入りかけているか

らね、少し時間が取れるかも知れないから、田中さんに、どうか御先へおんきと云つてくれと頼んだ。すると傍にそばいる橋本が例のごとく、そりやいかんよと云い出した。せつかく誘つてくれるものを、そんな挨拶あいさつをする法はないぜと、また長い説教が始まりそうで恐ろしくなつたので、仕方がないからうんよしよし、それじゃあね、今湯に這入はいっていますから、すぐ行きますつてそう云つてくれ、よく云うんだよ、分つたかねと念を押してすぐ風呂に飛込んだ。

そうして、少しも弱った顔を見せずにみんなと連れ立って、ホテルを出た。空はよく晴れて、星が遠くに

見える晩であつたが、月がないので往来は暗かつた。
危あぶのうございますから御案内を致しましょうと云つて、
ホテルの小僧がついて来た。草の生えた四角な空地あきちを
横切つて、瓦斯ガスも電気もない所を、茫漠ぼうばくと二丁ほど来
ると、門の奥から急に強い光が射した。玄関に女が二
三人出ている。我々の来るのを待つていたような挨拶
をした。座敷は畳あぐらが敷いて胡坐あぐらがかけるようになって
いた。窓を見ると、壁の厚さが一尺ほどあつたので、
始めて普通の日本家屋でないと云う事が解つた。窓の
高さは畳から一尺に足りないから、足をかけると厚い
壁の上に乗る事ができる。女が危のうございますと

云った。外を覗いたのぞら真闇まつくらに静かであつた。

女は三四人で、いずれも東京の言葉を使わなかつた。

田中君はわざと名古屋訛なごやなまりを真似まねて調戲からかつていた。女は

御上手だ事とか、御上手やなとか、何とか云つて賞めほ

ていた。ところが前触まえふれのスキ焼はなかなか出て来ない。

酒を飲まないで、肴さかなを突つついて手持無沙汰てもちぶさたであつた。

スキ焼があらわれても、胃の加減で旨うまくも何ともな

かつた。天下に何が旨うまいいつてスキ焼ほど旨いものは無

いと思うがねと田中君が云った。田中君はスキ焼の主

唱者はただけあつて、大變食はたべた。傍わきで見みていて羨うらやまし

いほど食あおむきべた。余はしようがないから畳の上に仰向あおむきに

寝ていた。すると女の一人が枕を御貸し申しましようかと云いながら、自分の膝ひざを余の頭の傍そばへ持つて来た。この枕では御氣に入りますまいとか何とか弁じている。結構だから、もう少しこつちの方へ出してくれと頼んで、その女の膝の上に頭を乗せて寝ていた。不思議な事に、橋本も活動の余地がないものと見えて、余と同様の真似まねをして、向うの方に長くなっている。枕元では田中君が女を相手に碁石ごいしでキシヤゴ弾はじきをやつて大騒ぎをしている。余があまり静しずかだものだから、膝を貸した女は眠つたのだと思つて、願あこの下をくすぐつた。

帰るときには、神かみさんらしいものが、しきりに泊つ

て行けと勧めた。門を出るとまた急に暗くなった。
森閑しんかんとして人の気合けわいのない往来をホテルまで、影のよ
うに歩いて来て、今までの派出はでなスキ焼を眼前がんぜんに浮か
べると、やはり小説じみた心持がした。

三十

朝食に鶉うずらを食わすから来いという案内である。
朝飯あさめしの御馳走ごちそうには、ケムブリジに行ったときたしか浜
口君に呼ばれた事があると云う記憶がぼんやり残って
いるだけだから、大変珍らしかつた。もつとも午前十

一時に立つ客に晚餐ばんさんを振舞う方法は、世界にないんだ

から仕方がない。鶉に至っては生れてからあんまり

食った事がない。昔正岡子規まさおかしきに、手紙をもつてわざわ

ざ大宮公園に呼び寄せられたとき、鶉だよと云つて喰

わせられたのが初めてぐらいなものである。その鶉の

朝飯をこしらええるからと云つて、特に招待するんだから、

佐藤は物数奇ものずきに違いない。そうして、好いかほかに何

にもない、鶉ばかりだよと念を押した。いったい鶉を

何羽喰わせるつもりか知らんと思つて、どこから貰つ

たのかと聞くと、いや鶉は旅順の名物だ、もう出る時

分だからちようど好かろうとすでに鶉を捕とつたような

事を云っていた。

白仁さんのところへ暇乞いとまぎに行つたので少し後おくれて

着くと、スキ焼を推挙した田中君がもう来ていた。田

中君も鶉おしよばんの御相伴と見える。佐藤は食卓の準備を見る

ために、出たり這入はいつたりする。立派な仙台平せんだいひらの袴はかま

を着けてはいるが、腰板こしいたの所が妙に口を開あいて、まる

で蛤はまぐりを割はつたようである。そうして、それを後下うしろさか

りに引き摺ずっている。それでもつて、さあ食おうと

云つて、次の間の食堂へ案内した。西洋流の食卓の上

に、会席膳かいせきぜんを四つ並べて、いよいよ鶉おわんの朝飯となつた。

まず御碗おわんの蓋ふたを取ると、鶉おわんがいる。いわゆる鶉おわんの御

椀だから不思議もなく食べてしまった。皿の上にもいるが、これはたしか醤油で焼かれたようだ。これも旨^{うま}く食べた。第三は何でも芋^{いも}か何かといっしよに煮られたように記憶している。しかし遺憾^{いかん}ながら、判然^{はつきり}とその味を覚えていない。これらを漸次^{ぜんじ}に平^{たい}げると、佐藤はまだあるよと云つて、次の皿を取り寄せた。それも無論鶉^{あぶらあげ}には相違^{ちがひ}なかつた。けれどもただ西洋流の油揚^{あぶらあげ}にしてあるばかりで、ややともすると前の附焼^{つけやき}と紛^{まぎ}れやすかつた。しかもこの紛^{まぎ}れやすい油揚はだいぶ仕込んで有つたと見えて、まだ喰い切らない先に御代りが出て来た。

かくのごとく鶉が豊富であつたため、つい食べ過ぎた。余の胃の中に這入った骨だけの分量でもずいぶんある。大連へ歸つて胃の痛みが増したとき、あまり鶉の骨を喰つたせいじゃなかうかと橋本に相談したら、橋本は全くそうだろうと答えた。食事が終つてから応接間へ歸つて来ると、佐藤が突然、時に君は何かやるそうじゃないかと聞いた。是公ぜいこうに東京で逢あつたとき、是公はにやにや笑いながら、いったい貴様は新聞社員だつて、何か書いてるのかと聞いた。こう云う質問になると、是公も友熊も同程度のものである。

何かやるなら一つ書いて行くが好いと云つて、妙な

短冊を出した。それを傍そばへ置いて話をしていると、一つ書こうじやないかと催促する。今考えているところだと弁解すると、ああそうかと云つて、また話をする。しまいに墨を磨つて、とうとう手を分わかつ古ふるき都みやこや鶉うずら鳴なくと書いた。佐藤の事だから何を書いたつて解るまいと思つたが、佐藤は短冊を取上げて、何だ年としを分つ古き都やと読んでいた。

鶉うずらの腹はらを抱かかえたなり、ホテルへ歸つて勘定かんじようを済まして、停車場へ駈かけつけると、プラットフォームに大きな網籠あみかごがあつた。その中に鶉うずらの生きたのがいっぱい這入はいつて雛鳥ひよこを詰めたようにむくむく動いている。発

車の時間に少し間があつたので、田中君は籠そばの傍へ行つて所有主と談判を始めた。余が近寄つたときは、一羽が三銭だとか四銭だとか云つていた。ところへ駅員が来て、宜よろしゅうございます、この汽車へ積込んで御届け申しますと受合つた。三人はどうとう鶉と別れて汽車へ乗つた。

三十一

いよいよ腹が痛んだ。ゼムを嚙かんだり、宝丹ほうたんを呑んだり、通じ薬をやつたり、内地から持って来た散薬を

用いたりする。毎日飯を食つて呑氣のんきに出歩いていようなもの、内心ではこりやたまらないと思うくらいであつた。大連の病院を見に行つたとき、苦しくる紛れに、案内をしてくれた院長の河西君かさいくんに向つて、僕も一つ診察を願おうかなと云つたら、河西君はとんだお客様だというような顔もせず、明日あしたの十時頃いらつしやいと親切に引き受けてくれた。ところが明日の十時頃になると、診察の事はまるで忘れてしまつて、相変らず烏打帽子かぶを被つて、強い日の下を焦こげながら、駆け廻かつた。

橋本が、全体どこまで行くつもりなんだいと聞か

ら、そうさまあハルビン哈爾賓ぐらいまで行かなくっちゃ義理

が悪いようだなと答えたが、その橋本はどうする

りょうけん

料簡かちつとも分らない。考えて見ると、内地では

もう九月の学期が始はじまつて、教授連がそろそろ講義に

取りかかる頃である。君はこれからどうするんだと反

問して見た。さあ僕も哈爾賓ぐらいまで行つて見たい

のだが、何しろ六月から学校を空あけているんだからね

と決心しかねている。かように義務心の強い男をそその唆

かして見当違の方角へ連れて行つたのは、全く余の力

である。その代り哈爾賓を見て奉天へ帰るや否や、橋

本は札幌さっぽろから電報をかけられた。いよいよ催促を受け

たと電報を見ながら苦笑しているので、いいや、急ぎ
帰りつつありとかけておくさと、他の事だからはなは
だ洒落しゃらくな助言じょげんをした。

橋本がいよいよいっしょに北へ行くと云う事になつ
てから、余はすべてのプログラムを橋本に委任してぶ
らぶらしていた。橋本は汽車の時間表を見たり、宿泊
地の里程を計算したり二三日の間はしきりに手帳へ鉛
筆で何か付け込んでいた。ときどき、おいどうも旨うまく
行かんよ、ここを火曜の急行で出るとするなどと相
談を掛けるから、いいさ火曜がいけなければ水曜の急
行にしようと、まるで無学な事を云っているので、橋

あき

本も呆れていた。よく聞いて見て始めて了解したが、
実は哈爾濱^{ハルビン}へ接続する急行は、一週にたった二回しか
ないのだそうである。普通の客車^{かくしや}でも、京浜間のよう
にむやみには出ない。一日にわずか二度か三度らしい。
だから君のように呑気^{のんき}な事を云ったって駄目^{だめ}だよと橋
本から叱られた。なるほど駄目である。しかも余の駄
目は汽車にとどまらない。地理^{みちのり}道程に至つても悉皆^{しつぱい}
真闇^{まつくら}であつた。さすが遼陽^{りょうよう}だの奉天だのと云う名前
は覚えているが、それがどの辺にあつて、どっちが近
いのだかいつさい知らなかった。その上、これから先
どことどこへ泊つて、どことどこを通り抜けるのかに

至るまで、全く無頓着であつたのだから橋本も呆れるはずである。しかし、おい鉄嶺へは降りるのかと聞いて、いや降りないと答えられれば、はあ、そうかと云つたなりで済ましていた。別に降りて見たい氣にもならなかつたからである。したがつて橋本は実に順良な道伴を得た訳で、同時に余は結構な御供を雇つた事になる。

いよいよプログラムがきまつたので、是公に出立の事を持ち出すと、奉天へ行つて、それから北京へ出て、ペキン上海へ来て、上海から満鉄の船で大連まで帰つて、それからまた奉天へ行つて、今度は安奉線を通つて、朝

鮮へ抜けたら好いだろうとすこぶる大袈裟な助言おおげさじょこんを与える。その上、銭ぜにが無ければやるよと註釈を付けた。銭が無くなれば無論貰う気でいた。しかし余っても困るから、むやみには手を出さなかった。

余は銭問題を離れて、単に時間の点から、この大袈裟な旅行の計画を、実行しなかった。そのくせ奉天を去つていよいよ朝鮮に移るとき、紙入の内容の充実していないのに気がついて、少々是公に無心をした。もとより返す気があつての無心でないから、今もつて使ひ放しである。

立つ時には、是公はもとより、新たに近づきになつ

た満鉄の社員諸氏に至るまで、ことごとく停車場まで

ステーション

送られた。貴様が生れてから、まだ乗った事のない汽車に乘せてやると云つて、是公は橋本と余を小さい部屋へ案内してくれた。汽車が動き出してから、橋本が時間表を眺めながら、おいこの部屋は上等切符を買つた上に、ほかに二十五弗^{ドル}払わなければ這^{はい}入れない所だよと云つた。なるほど表^{ひょう}にちゃんとそう書いてある。専有の便所、洗面所、化粧室が附属した立派な室^{へや}であつた。余は痛い腹を忘れてその中に横になった。

トロと云うものに始めて乗って見た。停車場へ降りた時は、柵さくの外に五六軒長屋のような低い家が見えるばかりなので、何だか汽車から置き去りにされたような気持であつたが、これからトロで十五分かかるんだと聞いて、やっと納得なっとくした。

トロは昔軍人の拵こしらえたのを、手入もせず、そのまま利用しているらしい。軌道レールの間から草が生えている。軌道の外にも草が生えている。先まで見渡すと、鉄色の筋が二本榮はえない草の中を真直まつすぐに貫ぬつらいている。しかし細い筋が草に隠れて、行方知れずゆきがたしになるまで眺め

尽しても、建物らしいものは一軒も見当らなかった。

そうして軌道の両側はことごとく高粱こうりょうであつた。そ

の大きな穂先は、眼の届く限り代赭たいしゃで染めたように日

の光を吸っている。橋本と余と荷物とは、この広漠こうばくな

畠はたけの中を、トロに揺られながら、眩まぶしそうに動いた。

トロは頑丈がんじょうな細長い涼み台に、鉄の車を着けたもの

と思えば差支さしつかえない。軌道の上を転ころがす所を、よそか

ら見ていると、はなはだ滑なめらかで軽快に走るが、実地

に乗れば、胃に響けるほど揺れる。押すものは無論支

那人である。勢いよく二三十間突いておいて、ひよい

と腰をかける。汗臭あせくさい浅黄あさぎ色の股引ももひきが背広せびろの裾すそに触さわる

ので気味が悪い事がある。すると、速力の鈍った頃を
見計^{みはか}らつて、また素足^{すあし}のまま飛び下りて、肩と手をいつ
しよにして、うんうん押す。押さなければいいと思う
ぐらい、車が早く廻るので、乗ってる人の臓器^{ぞうき}は少か
らず振盪^{しんとう}する。余はこのトロに運搬されたため、悪い
胃を著るしく悪くした。車の上では始終^{しじゅう}ゼムを含んで
早く目的地へ着けば好いと思つていた。勢いよく駆^かけ
られれば、駆けられるほどなお辛^{つら}かった。それでも台
からぶら下げた足を折らなかつたのが、まだ仕合せで
ある。實際酒に酔つて腰をかけたまま脛^{すね}を折つぺ
しよつた人があるそうだ。見ると橋本の帽子の鰐^{つば}が風

に吹かれてひらひらと靡なびいている。余は鳥打の前まえ廂びやし

を深く下げてなるべく日に背せなを向けるようにしていた。

苦しい十五分か廿分のちの後車はようやく留まった。軌

道の左側だけが、畠はたを切り開いて平らにしてある。眼

を蔽おほう高梁の色を、百坪余り刈り取つて、黒い砂地に

した迹あとへ、左右に長い平屋を建てた。壁の色もまだ新

しかった。玄関を這入つて座敷へ通ると、窓の前は二

間ほどしかない。その縁ふちに朝顔のような草が繁しげつてい

るが、絡からまる竹も杖つえもないので、蔓つると云わず、葉と云

わず、花を包んで雑然と簇むらがるばかりである。朝顔の

下はすぐ崖がけで、崖の向うは広い河原かわらになる。水は崖の

真下を少し流れるだけであつた。

橋本と余は、申し合せたように立つて窓から外を眺めていた。首を出すと、崖下にも家が一軒ある。しかし屋根瓦しか見えない。支那流の古い建物で、廻廊のような段々を藉りて、余のいる部分に続いているらしく思われる。あれは何だといと聞いて見た。料理場と子供を置く所になっていますと答えた。子供とは酌婦芸妓の類を指すものだろうと推察した。眼の下に橋が渡してある。厚くはあるが幅一尺足らずの板を八つ橋に継いだものに過ぎない。水はただ砂を洗うほどに流れている。足の甲を濡らしさえすれば徒歩渉るのは

容易である。橋本の後に食付くつついて手拭てぬぐいをぶら下げて、この橋を渡った時、板の真中で立ち留まって、下を覗のぞき込んで見たら、砂が動くばかりで水の色はまるでなかった。十里ほど上かみに遡さかのぼると鮎あゆが漁とれるそうだ。余は汽車の中で鮎さかなのフライを食って満洲には珍らしい肴さかなだと思った。おそらくこの上流からクーリーが売りに来たものだろう。

三十三

足駄げたを踏むとざぐりと這入はいる。踵くびすを上げるとばら

ばらと散る。渚なぎさよりも恐ろしい砂地である。冷たく

さえなければ、跣足はだしになつて歩いた方が心持が好い。

俎まないたを引摺ひきずつていては一足ひとあしごとに後あとしぎるようで齒痒はがゆ

くなる。それを一町ほど行つて板囲いたがこいの小屋の中を覗のぞ

き込むと、温泉ゆがあつた。大きい四角な桶おけを縁ふちまで地

の中に埋いけ込んだと同一こような槽ふねである。温泉はいつ

ぱい溜たまつていたが、澄み切つて底まで見える。いつの

間に附着したもののやら底も縁も青い苔こけで色取られてい

る。橋本と余は容赦なく湯の穴へ飛び込んだ。そうし

て遠くから見ると、砂の中へ生埋いきうめにされた人間のよう

に、頭だけ地平線の上に出していた。支那人の中には、

實際生理になつて湯治とうじをやるものがある。この河原かわらの幅は、向うに見える高梁こうりやうの畠はたけまで行きつめた事がな
いからどのくらいか分らないが、とにかく眼が平たいちに
なるほど広いものである。その平たいらなところを、どう
掘つても、湯が湧わいて来るのだから、裸体はだかになつて、
手で砂を掻かき分けて、凹くぼんだ処ところへ横になれば、一文も
使わないで事は済む。その上寝ながら腹の上へ砂を掛
ければ、温泉の掻かき巻まきができる訳である。ただ砂の中を
潜もぐつて出る湯がいかにも熱い。じくじく湧わいたものを、
大きな湯槽ゆふねに溜めて見ると、色だけは非常に奇麗きれだが、
それに騙だまされてうっかり飛び込もうものなら苛ひどい目に

逢^あう。橋本と余は、勢いよく浴衣^{ゆかた}を抛^なげて、競争的に毛脛^{けずね}を突^つ込んで、急に顔を見合せながら縮^{ちぢ}んだ事がある。大の男がわざわざ裸になつて、その裸の始末をつけかねるのはきまりが好いものじゃないから、兩人^{ふたり}は顔を見合せて苦笑しながら小屋を飛び出して、四半丁^{しはんちよう}ほど先の共同風呂まで行つて、平氣な風にどぼりと浸^{つか}つた。

風呂から出て砂の中に立ちながら、河の上流を見渡すと、河がぐるりと緩^{ゆる}く折れ曲つている。その向う側に五六本の大きな柳が見える。奥には村があるらしい。牛と馬が五六頭水を涉^{わた}つて來た。距離が遠いので小さ

く動いているが、色だけは判然はつきり分る。皆茶褐色をして

柳の下に近づいて行く。牛追は牛よりもなお小さかつ

た。すべてが世間で云う南画なんがと称するものに髣髴ほうふつとし

て面白かつた。中にも高い柳が細い葉をことごとく枝

に収めて、静まり返っているところは、全く支那めい

ていた。遠くから望んでも日本の柳とは趣おもむきが違うよ

うに思われた。水は柳の茂るところで見えなくなつて

いるが、なおその先を辿たどつて行くと、たちまち眼にぶ

つかるような大きな山脈がある。巒ひだが鋭く刻まれてい

るせいか、ある部分は雪が積つたほど白く映る。その

くらいに周囲はどす黒かつた。漢語には崔嵬さいかいとか巒岈さんがん

とか云つて、こう云う山を形容する言葉がたくさんあるが、日本には一つも見当らない。あれは何と云う山だろうと傍そばにいる大重君おおしげくんに尋ねたら、大重君も知らなかった。大重君は支那語の通訳として橋本に随ついて蒙古もうこまで行つた男である。余の質問を受けるや否やどこかへ消えて無くなつたが、やがて歸つて来て、高麗城子こまじょうしと云うんだそうですと教えてくれた。土人を捕つらまえて聞いて來たのだそうである。固もとより支那音しなおんで教わつたのだが、それは忘れてしまった。

濡ぬれ手拭てぬぐいを下げて、砂の中をぼくぼく橋の傍そばまで歸つて來ると、崖がけの上から若い女が跣足はだしで降りて來た。

橋は一尺に足らぬ幅だからどつちかで待ち合せなければなるまいと思つたが、向うはまだ土堤を下りきらないので、こっちは躊躇せず橋板に足をかけた。下駄を二三度鳴らして、一間ほど来たとき、女も余と同じ平面に立つた。そこで留まると思いのほか、ひらひらと板の上を舞うように進んで余に近づいた。余と女とは板と板の継目の所で行き合つた。危ないよと注意すると、女は笑いながら軽い御辞儀をして、余の肩を擦つて行き過ぎた。

あした なしばたけ
明日は梨畑を見に行くんだと橋本から申し渡され

たので、宜しいと受合つた上、床についたようなもの
の実を云うと例のトロで揺られるのが内心苦になつた。
そのせいでもなかつたが、容易に寝つかれない。橋本
はもう鼾をかいている。しかも豪宕な鼾である。
緞子の夜具の中から出るべき声じゃない。まして裾の
方には金屏風が立て回してある。

明日になると、空が曇つて小雨が落ちてゐる。窓か
ら首を出して、一面に濡れた河原の色を眺めながら、
おれは梨畑をやめて休養しようかしらと云い出した。

橋本は合羽かつばももっているし、オヴアーシユーも用意して来ているのでなかなか景気が好い。ことに農科の教授だけあつて、梨を見たがつたり、栗を見たがつたり、豚や牛を見たがる事人一倍である。早速用意をして大重君を伴つれて出て行つた。余はただつくねんとして、窓の中に映る山と水と河原と高粱こうりょうとを眼の底に陳列さしていた。薄く流れる河の厚さは昨日きのうと同じようにほとんど二三寸しかないが、その真中に鉄の樋竹といだけが、砂に埋うもれながら首を出しているのに気がついたので、あれは何だいと下女に聞いて見た。あれはボアリングをやつた迹あとですと下女が答えた。満洲の下女だけあつ

て、述語じゆつこを知っている。ついこの間雨が降って、上かみの方から砂を押し流して来るまでは、河の流れがまるで違つた見当を通つていたので、あすこへ湯場ゆばを新築するつもりであつたのだと云う。河の流れが一雨ひとあめごとに変わるようでは、滅多めったなところへ風呂を建てる訳にも行くまい。現に窓の前の崖がけなども水にだいぶん喰われている。

そのうち雨が歇やんだ。退屈だから横になつた。約十分も立つたと思う頃、下女がまたやつて来て、ただいま駅から電話がかかりまして、これから梨畑へおいでになるなら、駅からト口を仕立てますがと云う問い合

せである。雨が歇んだので、座敷に寝ている口実はもう消滅してしまつたが、この上ト口を仕立てられては敵かなわな**い**と思つて、わざわざ晴かつた空を見上げて、八の字を寄せた。

今から行つて間に合うのかなと尋ねると、器械ト口だから汽車と同じぐらい早いんだと云う話である。胃は固もとより切せつないほど不安であるが、汽車と同じ速度の器械ト口なるものにも、心得のためちよつと乗つて見たいような気がしたので、つい手輕に仕度したくを始めた。すると隣の部屋に泊つていた御客さんが三四人、十一時の汽車で大連へ行くと云つて、同じように仕度を

始めた。それを送る下女も仕度を始めた。したがって同勢はだいぶんになった。その中に昨日橋の途中で行き合つた女がいた。それが余と尻合せしりあわせに同じ車に乗る事になった。互に尻を向けているので、別段口も利きかなかった。顔もよくは見なかった。が、その言葉だけはたしかに聞いた。しかも支那語である。固もとより意味は通じない。しかし盛んにクーリーをきめつけていた。その達弁なのはまた驚くばかりである。昨日微笑しながら御辞儀おじぎをして、余の傍わきを摺すり抜ぬけた女とはどうしても思えなかった。この女は我々の立つ前の晩に、始めて御給仕に出て来た。洋灯ランプの影で御白粉おしろいをつけてい

る事は分つたが、依然として口は利かなかつた。

苦しい十五分の後車のちはまた停車場ステーションに着いた。御客は

すぐ汽車に乗つて大連の方へ去つた。下女はみんな温

泉宿へ歸つた。余は独りひと構内を徘徊はいかいした。いわゆる器

械ト口なるものは姿さえ見せない。そこへ駅員はるかが来て、

今松山まつやまを出たそうですからと断つた。その松山は遥

向うにある。余は軌道レールの上に立つて、一直線の平たい

路みちを視力のつづく限り眺めた。しかしト口の来る気色けしき

はまるでなかつた。

宿屋の者ともつかず、馱の者ともつかない洋服を着た男がついて来た。この男の案内で村へ這入ると、路は全く砂である。深さは五六寸もあらうと思われた。土で造った門の外に女が立っていたが、我々の影を見るや否や逃げ込んだ。手に持った長い煙管きせるが眼についてた。犬が門の奥でしきりに吠える。そのうちに村は尽きて松山にかかった。と云うと大層だが、実は飛鳥山あすかやまの大きいのに、桜を抜いて松を植替えたようなものだから、心持の好い平庭ひらにわを歩るくと同じである。松も三四十年の若い木ばかり芝の上に並んでいる。春先はるさき弁当

でも持つて遊あそびに来るには至極結構だが、ところが満洲だけになお珍らしい。余は痛い腹を抑おさえて、とうとう天辺てっぺんまで登った。するとそこに小さな廟びようがあつた。正面に向つて、聯れんなどを讀んでいると、すぐ傍そばで梭おきの音がする。廟守びようもりでもおりそうなので、白壁を切り抜いた入口を潜くぐつて中へ這入った。暗い土間を通り越して、奥を覗のぞいて見たら、窓の傍そばに機はたを据すえて、白い疎髯そせんを生やした爺じいさんが、せつせと梭なを抛なげていた。織みことつていたものは粗あらい白布しろぬのである。案内の男ふたことが二言三言支那語で何か云うと、老人は手を休めて、暢のんき気な大きい声で返事をする。七十だそうですと案内が通訳

してくれた。たった一人でここにおいて、飯はどうするのだろうと、ついでに通訳を煩わづらわして見た。下の家から運んでくるものを食っているそうであつた。その下の家と云うのがすなわち梨畠なしばたけの主人のところだと案内は説明した。

やがて、山を降りて梨畠へ行こうとしたが、正門から這入はいるのが面倒なので、どうです土堤どてを乗り越えそうじゃありませんかと案内が云い出した。余はすぐ賛成して蒲鉾形かまぼこがたの土塀どべいを向側むこうがわへ馳はせ下りた。胃は実に痛かつた。樹きの下を潜くぐつて二十間も来ると、向うの方に橋本始め連中が床几しょうぎに腰をかけて梨を食っている。腕

に金筋きんすじを入れた駅長までいっしょである。余も同勢に交まじつて一つ二つ食った。これは胃の中に何か入れると、一時痛みが止むからである。そうしてまた畠の中をぐるぐる歩き出した。ここの梨はまるで林檎りんごのように赤い色をしている。大きさは日本の梨の半分もない。しかし小さいだけあつて、鈴なりに枝を撓しなわして、累累るる々とぶら下つているところがいかにみごとに見える。主人がその中うちで一番旨うまい奴やつを——何と云つたか名は思ひ出せないが、下男に云いつけて、箆ざるに一杯取り出さして、みんなに御馳走ごちそうした。主人は背の高い大きな男で、支那人らしく落ちつきはらつて立っている。案内

の話では二千万とか二億万とかの財産家だそうだが、それは嘘うそだろう。脂やにの強い亜米利加煙草アメリカタバコを吹かしていた。

梨にも喰くい飽あきた頃、橋本が通訳の大重君に、いろいろ御世話になってありがたいから、御礼のため梨を三十銭ほど買って帰りたいと云うような事を話してくれと頼んでいる。それを大重君がすこぶる厳肅な顔で支那語に訳していると、主人は途中で笑い出した。三十銭ぐらいなら上げるから持って御帰りなさいと云うんだそうである。橋本はじゃ貰って行こうとも云わず、また三十銭を三十円に改めようともしなかった。宿へ

帰ったら、下女がある御客さんといつしよに梨畠へ行つて、梨を七円ほど御土産おみやげに買つて帰つた話をして聞かせた。その時橋本は、うんそうか、おれはまた三十銭がた買つて来ようと思つたら、三十銭ぐらいなら進上しんじようすると云つたよと澄ましていた。

三十六

壁と云うと鰻こての力で塗り固めたような心持がするが、この壁は普通の泥どろが天日てんぴで干上ひあがつたものである。ただ大地と直角ちよっかくにでき上つている所だけが泥でなくつて

壁に似ている。その上部には西洋の御城のように、
形儀よく四角な孔をいくつも開けて、一ぱし櫓の
体裁を示している。しかし一番人の注意を惹くのは、
この孔から見える赤い旗である。旗の数は孔の数だけ
あつて、孔の数は一つや二つではないから、ちよつと
賑かに思われる。始めてこの景色が眼に触れた時に
は、村のお祭りで、若いものが、面白半分に作り物で
も拵えたのじやなかうかと推測した。ところがこ
の櫓は馬賊の来襲に備えるために、梨畑の主人が、わ
ざわざ家の四隅に打ち建てたのだと聞いて、半分は驚
いたが、半分はおかしかった。ただなぜあんな赤い旗

を孔の間から一つずつ出しているかが、さっぱり分
なかつた。裏側へ廻つて、段々を上つて見て、始めて
この赤旗の一つが一挺の鉄砲を代表している事を知つ
た。鉄砲は博物館にでもありそうな古風な大きいもの
で、どれもこれも錆を吹いていた。弾丸を込めても恐
らく筒から先へ出る氣遣はあるまいと思われるほど、
安全に立てかけられていた。もつとも赤い旗だけは
丁寧に括りつけてある。そうしてちょうど壁孔から外
に見えるくらいな所にぶら下げてある。番兵は汚ない
顔を揃えて、後の小屋の中にごろごろしていた。馬
賊の来襲に備えるために雇われたればこそ番兵だが、

その実は、日当三四十銭の苦力クーリーである。櫓やぐらを下りて

門を出る前に、家の内部を觀みる訳に行くまいかと通訳をもつて頼んだら、主人はかぶりを振つて聞かなかつた。女のいる所は見せる訳に行かないと云うんだそうである。その代り客間へ案内してやろうと番頭を一人つけてくれた。その客間というのは往來を隔てて向う側にある一軒建の家であつた。外には大きな柳が、静な葉を細長く空に曳ひいていた。長屋門ながやもんを這入はいると鼠色ねずみいろの騾馬らばが木の株に繋つないである。余はこの騾馬を見るや否や、三国志さんごくしを思い出した。何だか玄德げんとくの乗つた馬に似ている。全体騾馬らばというのを満洲へ来て始め

て見たが、腹が太くって、背が低くって、総体が丸く
逞たくましくって、万事邪氣ばんじのないような好い動物である。
橋本に騾馬の講義を聞くと、まず騾と馱騾けつていの区別から
始めるので、真率しんそつな頭脳をただいたずらに混乱させる
ばかりだから、黙って鞍くらのない裸姿を眺めていた。騾
馬は首を伏せてしきりに短い草を食っていた。

門の突き当りがいわゆる客間であるが、観音扉かんのんびらきを
左右に開けて這入るところなどは御寺に似ている。中
は汚きたないものであった。客でも招待するときには、臨
時に掃除をするのかと聞いたら、そうだと答えていた。
主人に挨拶あいさつをしてまた松山を抜けたら、松の間に牛が

はっだけ

放してあつた。駅長が行く行く初茸を取つた。どこから目付け出すか不思議なくらい目付け出した。橋本も余も面白半分少し探して見たが、全く駄目であつた。山を下るとき、おい満洲を汽車で通ると、はなはだ不毛の地のようなのであるが、こうして高い所に登つて見ると、沃野千里という感があるねと、橋本に話しかけたが、橋本にはそんな感がなかつたと見えて、別に要領の好い返事をしなかつた。余の沃野千里は全く色から割り出した感じであつた。松山の上から見渡すと、高い日に映る、茶色や黄色が、縞になつたり、段になつたり、模様になつたり、霞で薄くされて、雲に接くま

かすみ

つつ

で、一面に平野を蔽おほうている。満洲は大きな所であつた。

宿へ帰ったら、御神おかみさんが駅長の贈つて来た初茸を汁つゆにして、晩に御膳おぜんの上へ乗せてくれた。それを食つて、梨畑や、馬賊や、土の櫓や、赤い旗の話しなどをして寝た。

三十七

立つ用意をしているところへ御神さんが帳面を持つて出て来た。これへ何か書いて行つて下さいと云う。

御神さんは余を二つ接ぎ合あわせたように肥えている。それで病氣だそうだ。始めはどこのものだか分らなかつたが、御神さんと知つて、調子の下女と違つてゐるのに驚いた。御神さんはその体格の示すとき好い女であつた。どうしてあんなすれっからしの下女を使いこなすかが疑問になつたくらいである。帳面を前へ置いて、どうぞと手を膝ひざの上に重ねた。その膝の厚さは八寸ぐらいある。

帳面を開けると、第一頁ページに林学博士のH君が「本邦ほんぽうの山水さんすいに似たり」と揮ふるつてしまつたあとである。その次にはどこどこ聯隊れんたいちよう長何のなにがしと書いてある。

宿帳だか、書画帖しよがちようだか判然しないものの、第三頁に記念を遺のこす事に差し逼せまつて来た。橋本は帳面を見るや否や、向むこうを向いて澄ましている。余は仕方がないから、書くには書くが、少し待ってくれと頼んだ。すると御神おかみさんが、そうおつしやらずに、どうぞどうぞと二遍も繰返して御辞儀をする。無論嘘うそを吐つく気は始めからないのだが、こう拝むようにされて書いてやるほどの名筆でもあるまいと思うと、困却こんきやくと慚愧ざんきでほとほと持て余してしまう。時に橋本が例のごとく口を利きいてくれた。この人は嘘を云う男じゃないから、大丈夫ですよ今に何か書きますよと笑っている。余はまた世

間話をしながら、その間に発句ほつくでも考え出さなければならなくなつた。

同情してくれる人はだいぶあると思うから白状するが、旅をして悪筆を懇望こんもうされるほど厄介やっかいな事はない。それも句作に熱心で壁柱かべはしらへでも書き散らしかねぬ時代ならとにかく、書く材料の払底ふつていになつた今頃、何か記念のためにと、短冊たんじやくでも出された日には、節季せつきに無心を申し込まれるよりも苛いつら。大連を立つとき、手荷物しつかい かばんを悉皆革鞆の中へ詰め込んでしまつて、さあ大丈夫だと立ち上つた時、ふと気がついて見ると、化粧台の鏡の下に、細長い紙包があつた。不思議に思つて、折

目を返して中を改めると、短冊である。いつ誰が持つて来て載せたものか分らないが、その意味はたいてい推察ができる。俳句を書かせようと思つて来たところが、あいにく留守るすなので、また出直して頼む氣になつて、わざと短冊だけ置いて行つたに違ない。余はこの時化粧台から紙包を取りおろして、革鞆の中へ押し込んで、ホテルを出た。この短冊はいまだに誰のものか分らない。数は五六枚で雲形くもがたの洒落しやれたものであつたが、朝鮮へ来て、句を懇望されるたびに、それへ書いてやつてしまつたから今では一枚も残つていない。長春の宿屋でも御神さんに捕つらまつた。この御神さんは浜のもの

だとか云つて、意気な言葉使いをしていたが、新しい
折手本を二冊出して、これへどうぞ同なじものを二つ
書いて下さいと云つた。同じでなければいけないのか
と尋ねると、ええと答える。その理由は、夫婦別れを
したときに、夫婦が一冊ずつ持っている事ができるた
めだそうだ。

こう書いて行くと、朝鮮の宴会で銃ぬめを持出された事
まで云わなくてはならないから、好い加減に切り上げ
て、話を元へ戻して、肥ふとった御神さんの始末をつける
が、余は切ない思いをして、汽車の時間に間に合うよ
うに一句浮かんだ。浮かぶや否や、帳面の第三頁へ

熊岳城ゆうがくじょうにてと前書まえがきをして、黍遠きびとおし河原かわらの風呂ふろへ渡わたる
人ひとと認したためて、ほつと一息吐いた。そうして御神さん
の御礼も何も受ける暇のないほど急いでトロに乗った。
電話の柱に柳の幹を使ったのが、いつの間にか根を
張てばつて、針金の傍そばから青い葉を出しているのに気がつ
いて、あれでも匂にすればよかったと思つた。

三十八

窓から覗のぞいて見ると、いつの間にか高梁こうりょうが無くなつ
ている。先刻さつきまでは遠くの方に黄色い屋根が処々眺め

られたが、それもついに消えてしまった。この黄色い屋根は奇麗きれいであつた。あれは玉蜀黍とうもろこしが干してあるんだよと、橋本が説明してくれたので、ようやくそうかと想像し得たくらい、玉蜀黍を離れて余の頭に映つた。朝鮮では同じく屋根の上に唐辛子とうがらしを干していた。松の間から見える孤ひとつ家やが、秋の空の下で、燃え立つように赤かつた。しかしそれが唐辛子とうがらしであると云う事だけは一目ですぐ分つた。満洲の屋根は距離が遠いせいか、ただ茫漠ぼうばくたる単調を破るための色彩としか思われなかつた。ところがその屋根も高粱もことごとく影を隠してしまつて、あるものはただの地面だけになつた。

その地面には赤黒い^{いばら}茨のような草が限りなく生えて
いる。始めは^{たて}蓼の種類かと思つて、橋本に聞いて見た
ら橋本はすぐ^{かむり}冠を横に振つた。蓼じやない海草^{かいそう}だよ
と云う。なるほど平原の尽きる^{あた}辺りを、眼を細くして、
見究^{みきわ}めると、暗くなつた奥の方に、一筋鈍く光るもの
があるように思われる。海^{うみ}辺かなと橋本に聞いて見た。
その時日はもう暮れかかつていた。際限もなく蔓^{はびこ}つ
ている赤い草のあなたは薄^{もや}い靄に包まれて、幾らか蒼^{あお}
くなりかけた頃である。あからさまに目に映るすぐ傍^{そば}
をよくよく見つめると、乾いた土ではない。踏めば靴
の底^ぬが濡れそうに水^{みづ}気を含んでいる。橋本は鹹^{しお}気があ

るから穀物の種がおろせないのだと云った。豚も出ないようだねと余は橋本に聞き返した。汽車に乗って始めて満洲の豚を見たときは、實際一種の怪物に出逢つたような心持がした。あの黒い妙な動物は何だと真面目に質問したくらい、異な感じに襲われた。それ以来満洲の豚と怪物とは離せないようになった。この薄暗い、苔のように短い草ばかりの、不毛の沢地（たくち）のどこかに、あの怪物はきつと点綴（てんてつ）されるに違ないと云う気がなかなか抜けなかった。けれども一匹の怪物に出逢う前に、日は全く暮れてしまった。目に余る赤黒い草の影はしだいに一色（ひといろ）の夜（よ）に変化した。ただ北の方の

空に、夕日の名残なごりのような明るい所が残ったのである。そうしてその明るい雲の下が目立って黒く見える。あたかも高い城壁の影が空を遮さへぎつて長く続いているようである。余は高いこの影を眺めて、いつの間にか万里の長城に似た古迹こせきの傍そばでも通るんだろうぐらいの空想を逞たくましくゆうしていた。すると誰だかこの城壁の上を駆けて行くものがある。はてなと思つてしばらくするうちに、また誰か駆けて行く。不思議だと覺さとつて瞬またたきもせず城壁の上を見つめていると、また誰か駆けて行く。どう考えても人が通るに違いない。無論夜の事だから、どんな顔のどんな身装みなりの人かは判然しないが、

比較的明かな空を背景にして、黒い影法師が規則正しく壁の上を馳^かけ抜ける事は確^{たしか}である。余は橋本の意見を問う暇もないほど面白くなつて、一生懸命に、眼前を往来するこの黒い人間を眺めていた。同時に汽車は、刻々と城壁に向つて近寄つて来た。それが一定の距離まで来ると、俄^{がぜん}然として失笑した。今までたしかに人間だと思ひ込んでいたものは、急に電信柱の頭に变化した。城壁らしく横長に続いていたのは大きな雲であつた。汽車は容赦なく電信柱を追い越した。高い所で動くものがようやく眼底を払つた。

三十九

狭い小路の左右は煉瓦の塀で、ちよつと見ると屋敷町のように人通りが少い。それを二十間ほど来て左手の門を這入った。ただ偶然に這入ったのだから、家の名も主人の名も知るはずがない。今から考えると、小路のうちには同じような家が何軒となく並んでいて、同じような門がまたいくつでも開いてゐるのだから、とくにここだけを覗くべき誘致は少しもなかったのである。余はただ案内者の後に跟いて何の気なしに這入った。その案内者もまた好い加減に這入った。

案内者は青林館せいりんかんと云う宿の主人である。かつて二葉亭ふたばていといつしよに北の方を旅行して、露西亞人ロシアじんに苛い目ひとに逢あつたと話した。

門を這入ると、右も室へや、突き当りも室である。左りも隣の壁に隔てられなければ室であるべきはずなのだから、中の一筋だけが頭の上に空を仰ぐ訳になる。そこに立つて右手の部屋を覗くと、狭い路次ろじから浅草の仲店なかみせを看みるような趣おもむきがある。実際仲店よりも低く小さい部屋であつた。その一番目には幕が垂れていて、中は判然はつきりと分らなかつたが、次を覗いて見る段になつて驚いた。二畳敷ぐらいの土間の後うしろの方を、上り框あががまち

のように、腰をかけるだけの高さに仕切つて、そこに若い女が三人いた。三人共腰をかけるでもなく、寝転ぶでもなく、互にもた靠れ合つて身体からだを支えるごとくに、後の壁をいっぱいにした。三人の着物が隙間すきまなく重なつて、柔かい絹をしなやかにお圧しつけるので、少し誇張して形容すると、三人が一枚の上衣を引き廻して見るように見える。その間から小さなしゅす繻子の靴が出ていた。

三人の身体が並んでいる通り、三人の顔も並んでいた。その左右が比較的尋常なのに引きかえて、真中には不思議に美しかった。色が白いので、眉まゆがいかにも

判然はつぜんしていた。眼も朗ほがらかであつた。頬から顎あごを包む弧線こせんは春のように軟やわらかかつた。余が驚きながら、見惚みとれているので、女は眼を反そらして、空くうを見た。余が立っている間、三人は少しも口を利きかなかつた。

青林館の主人は自分ほどの女に興味がなかつたと見えて、好加減いいかげんに歩を移して、突き当りの部屋に這入つた。そこも狭い土間で、中央には普通の卓上テーブルが据すえてあつた。それを囲んで三人の男が食事をしている。皿小鉢やわいぼちから箸茶碗はしちやわんに至るまで汚きたない事はなほだしい。卓に着いている男に至つてはなおさら汚なかつた。まるで大連の埠頭ふとうで見る苦力クーリーと同様である。余はこの

体裁ていざいを一見するや否や、台所で下男が飯めしを掻かき込んでるんじゃないかと考えた。ところがつい隣の室でしきりに音楽をやっている。今見た美人のいる所とはつい三間とは離れていない。実に矛盾な感じである。

余は二歩ばかり洋卓テーブルを遠退とおのいて、次の室の入口を覗

いて見た。そうしてまた驚いた。向むこうの壁に倚添よりそえて

一脚の机を置いて、その右に一人の男が腰をかけている。その左に女が三人立っている。その前には十二三の少女が男の方を向いて立たっている。少し離れて室へやの入口には盲目めくらが床几しょうぎに腰をかけている。調子の高い胡弓こぎゅうと歌の声はこの一団から出るのである。歌の意味も節

も分らない余の耳にはこの音楽が一種異様に^{すさま}凄じい響を伝えた。机の右にいる男が、右の手に^{ぜいちく}筮竹のような物を持って、時々机の上を^{たた}敲くと同時に左の^{てのひら}掌に八橋と云う菓子に似た竹の片を^{きれ}二つ入れて、それをかちかちと打合せながら、歌の調子を取る。趣向はスペインの女の用いるカスタネットに似ているが、その男の顔を見ると、アルハンブラの昔を思い出すどころではない。^{あおくろ}蒼黒く^{つちけ}土氣づいた色を、一心不乱に少女の頭の上に^の乗しかけるように^{かざ}翳して、^{はらわた}腸を^{しほ}絞るほど恐ろしい声を出す。少女はまた^{またた}瞬きもせず、この男の方を見つめて、^{のど}細い咽喉を合している。それが^{こわ}怖い魔物

に魅^み入られて身動きのできない様子としか受取れない。
盲目は彼の眼の暗いごとく、暗い顔をして、悲しい陰
気な、しかも高い調子の胡弓を擦^すり続けに擦^{つづ}っている。
左の方に立っている女の一人が余を見た。それが忌^いむ
べき藪^{やぶ}睨^{にら}みであつた。日の目の乏しくつて暮やすい室
のうちで、この怪しい団体はこの怪しい音楽を奏して
夢中である。余は案内の袖^{そで}を引いてすぐ外へ出た。

四十

橋本は遠い所へ豚を見に行つた。何でも市街^{まち}から一

里余もあるとか云う話である。こんな痛い腹を抱えて
今更豚でもあるまいと思つて止めた。その代りにそこ
いらをぶらつくべく主人といつしよに馬車で出た。主
人がまあ遼河を御覧なさいと云う。馬車を乗り棄てて
河岸へ出ると眼いっぱいに見えた。色は出水の後の大
川に似ている。灰のように動くものが、空を呑む勢
で遠くから流れて来る。哈爾濱に行く途中で、木戸さ
んに聞いた話だが、満洲の黄土はその昔中央亜細亜の
方から風の力で吹き寄せたもので、それを年々河の流
れが御丁寧^{いそいそ}に海へ押出しているのだそうである。地質
学者の計算によると、五万年の後には今の渤海湾^{ぼっかいわん}が全

く埋^{うま}つてしまふ都合になつていますと木戸君が語られた。河^{かわ}辺に立つて岸と岸との間を眺めていると、水の量が泥の量より少いくらい濁つたものが際限なく押し寄せて来る。五万年は愚^{おろ}か、一二月で河口はすっかり塞^{ふさ}がつてしまひそうである。それでも三千噸^{トシ}ぐらいな汽船は苦^くもなくのそのそ上^{のぼ}つて来ると云うんだから支那の河は無神経である。人間に至^{もと}つては固より無神経で、古来からこの泥水を飲んで、悠^{ゆう}然^{ぜん}と子を生^なんで今日^{こんにち}まで栄えている。

サンパンと云う船がここかしこに浮^{なり}かんで形に合しては大き過ぎるぐらいな帆^ほを上げている。帆の裏には

細い竹を何本となく横に渡してあるから、帆に角^{かど}が立つのみか、捲^まき上げる時^あにはがらがら鳴る。日本では見られない絵である。その間を横切^{むこうぎし}つて向岸へ着いた。向岸には何にもない。ただ停車場^{ステーション}が一つある。北京への急行が出るとか云うので、客がたくさん列車に乗り込んでいる。下等室^{のぞ}を覗いたら、腰かけも何もない平土間^{ひらどま}に、みんなごろごろ寝ころんでいた。帰りにはサンパンに乗って、泥^{ながれ}の流^{ながれ}を押し渡った。風が出ると難儀だそうである。春の初めには山のような氷が流れてくる。先が見えないので、氷と氷の間に挟^{はさ}まれると命を取られる。ある時氷に路^{みち}を塞^{ふさ}がれて仕方が

ないから、船を棄^すてて氷の上へ上^{あが}つて、乗り捨てた船を引き摺^{ひず}つて向う側へ出て、ようやくまた船に乗つたと云う話がある。これは主人^{あるじ}の実歴談^{じつれきだん}である。

サンパンは妙なところへ着いた。岸^{あし}は芦^{あしがき}を畳^{あし}んでできている。石垣^{いしがき}ではなくて芦垣である。こうしなければ水の力で浚^{さく}われる恐れがあると云う。芦はいくらでも水を吸い込んで平気でいるから無難だと見える。細い小路^{こつじ}を突き抜けると、支那町の真中へ出た。妙な臭^{におい}がする。先刻^{さつき}から胸が痛むのでポケットから、粉薬^{こなぐすり}を出して飲もうとするがあいにく水がない。一滴の飲料も用いずに散薬^のを呑^くみ下^{くだ}す方法は、その後苦^ごし

紛^{まぎ}れに発見した分別^{ぶんべつ}だが、この時はまだそれほど老練な患者でないので、拝むように主人を煩^{わづら}わした。主人はええ訳はありませんと云いつつも、ずいぶん烈^{はげ}しく引張り廻した上、ほとんど苦しくつて道傍^{みちばた}に竦^{すく}みそうになつた頃、ようやく一軒の店へ這^{はい}入つた。盆栽^{ぼんさい}などの据^すえてある中庭を通り抜けて角^{かど}の一部屋へ案内されたが、水はなかなか出る様子がない。そのうち、こちらへと云つてまた二階へ招^{しょう}ぜられた。虫のように段々を上^{あが}つて廊下から室^{へや}へ這入ると、日本人が二三人事務を執^とっている。さあどうぞと椅子を与えられたので、挨拶^{あいさつ}をして始めて解つたが、水を貰いに飛び込ん

だところは日清豆粕会社にっしんまめかすかいしゃで、さあどうぞと迎えてくれ

たのは、社員の倉田君である。倉田君は固もとより日本か

ら漫遊まんゆうもしくは視察の目的をもつてわざわざ営口えいこうまで

やって来たものと余を信じている。服薬のために通り

がかりのついでながら、日清豆粕会社の奥二階へ水を

貰いに立ち寄ったと判じようはずがない。そこで水は

容易に出ない。湯も出ない。今御茶を上げると云つて、

ボーがしきりに支度したくをしている。余は青林館の主人が

恨めしくなった。けれども倉田君に対しては相応うらに

体裁ていさいを具えた応対をしなければならない。豆が汽車で

大連へ出るようになってから、河を下ってくる豆の量

が減つたでしようかてような事を、真面目くさつて質問していた。

四十一

橋本が博士はかせになつたり、ならなかつたりした話がある。大連の大和ホテルやまとにいる時分、満鉄から封書が届いた。その表に橋本農学博士殿と叮嚀ていねいに書いてあつたのを乙おつに眺めながら、これだから厭いやになつちまうと云つて余の方を向いて苦笑したから、先生は学者ぶつて、むやみに博士呼よはわりをされるのを苦にする意味な

んだろうと鑑定して、取り合つてやらなかった。実際こんな事が苦になるくらいなら、始めから博士にならなければ好いと思つたからである。その時はそれですんだ。

余は橋本をもつて固^{もと}より農学博士と信じていた。是公^{ぜこう}もそう信じていた。現にある人に向つて橋本つて農学博士さと説明しているのを聞いた。余に至つては、いつかの新聞で、本人の博士になつた事をたしかに承知した記憶がある。それで大連を立て北に行く時も、榮譽ある博士の同伴者だと云う自覚^{なべ}がちやんとあつた。ところが毎日毎晩一つ鍋^{なべ}のものを突^ついて進行してい

るうちに、何かの拍子^{ひょうし}だったが、いやおれは博士じゃないよと急に橋本が云い出した。その時はいくら本人が証明したってなるほどと云う気になれないくらい驚いた。第一、十年近くも大学の教授をしている男を、博士にしない法はないと考えてる上、どうしても新聞でその授与式を拝見したとしか思われないんだから、余もできるだけは抗弁したが、やつぱり博士じゃないと頑固^{がんこ}を張って云う事を聞かない。余もやむをえず、そうかと云って我^がを折った。この時から橋本は気の毒ながらとうとう、ただの人間になってしまった。

けれども、世間には迂濶^{うかつ}ものが多いと見えて、どこ

へ行つても橋本博士、橋本博士と云う。新聞を折々読むときつと橋本博士と出ている。しまいにはおいまた博士だよと注意するのが面倒になつた。橋本も澄すまし返かえつてゐる。もつとも澄まし返さなくなつたつて、一々博士じゃありませんと訂正して歩く訳に行くものじゃない。こう云う余にも覚おぼえがある。釜山ふさんから馬関ばかんへ渡る船中で、拓殖たくしよく会社の峰八郎君みねはちろうくんの妻君に逢あつたとき、八郎君は真面目まじめな「#「な」は底本では「を」顔をして、これは夏目博士と引き合した。すると妻君が御名前はかねて伺ていねいつておりますと叮嚀おじぎに御辞儀をされるから、余もやむをえず、はあと云つたなり博士らしく挨拶あいさつを

した。だから橋本が博士に慣れ切つて満洲を朝鮮へ渡るに何も不思議はない。余もいったんは彼の博士を撤回したようなものの、日を重ねるに従つてまた何だか博士らしい気持がし出した。それで道中つつがなく安奉線あんほうせんを通つて、安東あんとうけん県までやつて来た。ところがここで橋本の博士がちよつと氣に食わなくなつた。安東県の宿屋の番頭がどう云う不料簡ふりようけんか、橋本博士御手荷物いむのうちと云う札を余の革靴かばんにぴたぴた結いつけてしまった。腹が立つたが面倒だからそのままにしておく。と次の宿屋で橋本と分れる事になつて、向うの手荷物ステーションを停車場へ運び出す際に、余の奇麗きれいな革靴かばんを橋本のも

のだと思い込んで、宿屋の小僧がずんずん停車場まで持って行ってしまった。余は冗談じゃないぜと云った。橋本は面白がつて笑っていた。それだから、また博士にならない。

四十二

ここだと云うので、降りたには降りたが、夜の事だから方角も見当もまるで分らない。頼りに思う停車場は縁日の夜店ほどに小さいものであつた。その軒を離れるとなおさら淋しい。空には星があるが、高い所に

おのれ

己と光るのみで、足元の景気にはならなかった。汽車路を通つて行くと、鉄軌レールの色が前後五六尺ばかり、提灯ちようちんの灯ひに照らされて、露つゆのごとく映つてはまた消えて行く。そのほかに何も見えなかった。やがて右へ切れて堤のようなものをだらだらと下りる心持がしたが、それも六七歩を超こえると、靴を置く土の感じが不斷ふだんに戻つたので、また平地ひらちへ出たなと気がついた。すると虫の音ねが聞えだした。足元で少しばかり鳴いてるような家庭的なものではない。虫の音ねだと云う分別ふんべつが出た時には、その声がもう左右前後に遠く続いていた。我々ちようちんは一つの提灯を先にして、平原にはびこる

無尽蔵の虫の音に包まれながら歩いた。

今考えると、なかなか風流である。筆を執つて書いていても、魏叔子ぎしゆくしの大鉄椎だいてつゐの伝でんにある曠野こうやの景色けいしよくが眼の前に浮んでくる。けれども歩いている途中は実に苦しかった。飯の菜さいに奴豆腐やつとふを一丁食つたところが、その豆腐が腹へ這入るはいや否や急に石灰いしばいの塊かたまりに変化して、胃の中を塞いでいるような心持である。腮あごの奥から締めつけられて、やむをえない性質たちの唾液つばきが流れ出す。それに誘いざなわれるままにしておく、と、嘔はきたくなくなる。せめて口中の折合おりあひでもと思つて、少し抵抗いくたびしにかかる、と、足が竦すくんで動けなくなる。余は幾度か虫の音の中

に苦しい尻を落ちつけようかと思つた。ただ橋本に心配させるのが、気の毒である。支那の荷持にもちに野糞のぐそを垂たれてると誤解されたつて手柄てがらにもならない。そこで無理に歩いた。

遥はるか向うに灯ひが一つ見える。余が歩いている路は平らである。灯はその真正面に当る。あすこへ行くんだろうと推測して星の下を無言に辿たどつた。今日の午ひるは宮口で正金銀行の杉原君の御馳走ごちそうを断つた。晩は天春君あまかすくんの斡旋あつせんですでに準備のできている宴会を断つた。そうして逃げるように汽車に乗つた。乗る時橋本にこの様子じゃ千山行せんざんは撤回だと云つた。實際撤回しなければ

ならないほど、容体ようだいが危あやしくなつて来た。ただ向うに見える一点の灯火ともしびが、今夜の運命を決する孤ひとつ家やであると思つて、寂寞せきばくたる原を真直まっすぐに横切つた。原のなかには、この灯火よりほかに当あてになるものは一つも見つからないのだから心細かつた。宿屋はたつた一軒かと聞いたら、案内がええと答えた。湯崗子とうかうしは温泉場だと橋本のプログラムの中にちゃんと出ているのだから、温泉がこの茫々ぼうぼうたる原の底から湧わいて出るのだろうとは、始めから想像する事ができたが、これほど淋さびしい野の面おもてに、ただ一軒の宿屋がひっそり立っているようとは思いがけなかった。

そのうちようやく灯のある所へ着いた。平家作ひらやづくりの西

洋館で、床ゆかの高さが地面とすれすれになるほど低い。

板間いたまではあるが無論靴で出入でいりをする。宿の女は草履ぞうりを

穿はいていた。遠くから見たと同じように浮き立たない

家であつた。造作ぞうさくのつかない広い空家あきやへ洋灯ランプを点ともして

住すまっているのかと思つた。這入るとすぐの大広間に置

いてあつたオルガンさえ、先の持主が忘れて置いて

行つたものとしたか受取れなかつた。暗い廊下を突き

当つて右へ折れた翼ウイングの端はじの室へやへ案内された。中を二

つに仕切つてある。低い床には、椅子と洋卓テーブルと色の褪さ

めた長椅子とが置いてあつた。高い方は畳を敷いて、

日本らしく取り繕とつてあつた。ちようと土間から座敷へ上あるようにして、甲から乙に移る構造である。余はいきなり畳の上に倒れた。三四十分の後膳のちぜんが出た。橋本がしきりに起きて食えと勧めたが、ついに起きなかつた。第一食卓に何が盛られたかをさえ見なかつた。眼を開ける勇氣すら無かつたのである。

四十三

朝起きると、馬が来たとか来ないとか云つて橋本の連中が騒いでいる。連中は三人だから、一人が一つの

馬に乗るとすれば、三匹要る訳になる。この茫漠ぼうばくたる原の中で、生きた馬を三匹生捕いけとるとなると、手数てすうのかかるのは一通りではあるまい。連中は格別早起きもしない癖に、今更苦情を並べたつて始まらないと思つて、同行を断念した余は、冷然と落ちついていた。本来を云うと、千山せんざんへ行くのが目的で、わざわざここに降りたには相違ないが、一旦自分が千山行を諦あきらめたとなると、ほかの連中が予定通よていとおりに行動するのが、いまいまいくなる。第一橋本なんて農科の男は、千山を見る必要も何もないのである。千山は唐とうの時代に開いた梵刹ぼんざつで、今だに残っているのは、牛でもなければ豚でもな

い、ただ山と谷と巖いわと御寺と坊主だけであるから、農科の教授がわざわざ馬に乗って見物に行くべきところではけつしてない。と云つてせつかく行くと云うものを、意見までして思い止まらせるほどの口実は無論考へ出せないから、なすがままにさせて放ほうつておいた。そのうち不思議な事に、注文通馬ちゆうもんどおりが三匹出て来た。どこから出て来たものか聞いても見なかったが、たしかに出て来た。三人は癩しかくに障さわるほど勇んで外へ飛び出した。余は仕方がないから西洋間と日本間の唯一の主人として、この一日を物静かに休養すべく準備した。まず何よりも横になるのが薬だろうと思つて、狸たぬきだ

か狐きつねだか分らない毛皮の上にごろりと転がった。す

ると窓の外から橋本の声で、おいおいちよつと出て見
ろと呼んでいる。彼れかまだそこいらを迷まじついてるなど

思うと、少し面白くなつたから、請求通原せいきゆうどおりの中へ

草履ぞうりのまま出た。すると広い牧場のようなところ

に、馬が三匹立っていた。それがいずれも小汚こぎたない駄馬だうま

だつたのではなはだ愉快であつた。のみならず、その

中うちの一匹がどうしても大重君を乗せようと云わない。

傍そばへ行くと、飛んだり蹴けたりする。馬が怖こわがるからだ

と云つて、手拭てぬぐいで眼隠めかくしをして、支那の小僧が両手で

轡くつわをしつかり抑えている。遠くから見ると、馬が

鉢巻はちまきをしたようでおかしかった。その傍へ大重君が苦

笑いをしながら近寄つて行くところは、一層面白かつ

た。しかも一度や二度ではない。よほど馬に遠慮する

性質たちと見えて、容易に埒らちを明けないから、みんながな

お喝采かつさいする。橋本は北海道の住人だから苦くもなく鞍くらに

跨またがつた。もう一人——名前を忘れたから、もう一人

というよりほかに仕方がないが——これは熊岳城ゆうがくじょうの

苗圃びようほの長ちやうで、もと橋本に教わつた事があると云うだ

けに、手綱てうを執とる術すべを心得ている。余はこの時立ちな

がら心うちの中で、要するに千山行を撤回した方が、馬術

家としての余の名誉を完まっうする所以ゆえんではなからうか

と考えた。

けれども、そんな気色けしきは顔にも出さず、ただ残り惜しげに三人の後姿を眺めていた。そうして大重君の腰つきから推測して、千山まであれで乗り通すのは、定めて心配な事だろうと同情した。橋本は今夜のうちに帰るんだとか号して、しきりに馬を急がせるらしい。苗圃長も負けずに、続いて行く。独りひと大重君だけが後おくれた。馬はまだ眼隠こよりようをしている。やがて二人の影が高梁こよりように遮さへぎられて、どっちへ向いて行くかちよつと分らなくなった。先刻さつぎからそこいらを徘徊はいかいしていた背の高い支那人もまた高梁の裡うちに姿を隠した。この支那

人は肩から背へかけて長い鉄砲を釣っていた。人数は二人であつた。始めて気がついたときは咄嗟とつさの際に馬賊という聯想れんそうが起つた。橋本と前後して高梁の底に没して、しばらくすると、どんと云う砲声が聞えて、またしばらくすると、三人の馬の前にどこからかあの背の高い奴が現われて来たら大事件だと想像して、また室の中へ歸へやつて狸たぬきの皮の上に寝た。

四十四

手拭てぬぐいを下げて風呂に行く。一町ばかり原の中を歩か

なければならぬ。四方を石で畳上げた中へ段々を三つほど床から下へ降りると湯泉に足が届く。軍政時代に軍人が建てたものだからかなり立派にできている代りにすこぶる殺風景である。入浴時間は十五分を超へべからずなどと云う布告めいたものがまだ入口に貼付けてある通りの構造である。犯則を承知の上で、石段に腰をかけたり、腹這に身を浮かしたり、頬杖を突いて倚りかかったり、いろいろの工夫を尽くした上、表へ出て風呂場の後へ廻ると、大きな池があつた。若い男が破舟の中へ這入ってしきりに竿を動かしている。おいこの池は湯か水かと聞くと、若い男は類稀なる

ぶつちようづら

仏頂面をして湯だと答えた。あまり厭いやな奴だから、それぎり口を利きくのをやめにした。岸の上から底を覗のぞくと、時々泡のようなものが浮いて来る。少しは湯気が立ってるかとも思われる。実は魚がいないかと、念のため聞いて見たかったのだけれども、相手が相手だから歩を回めぐらして宿の方へ帰った。後で、この池に魚が泳いでいる由を承知してはなはだ奇異の思いをなした。その上ここには水が一滴も出ないのだと教えられたときには全く驚いた。

驚いた事はまだある。湯から帰りがけに入口の大広間を通り抜けて、自分の室へやへ行こうとすると、そこに

見慣れない女がいた。どこから来たものか分らないが、
紫むらさきの袴はかまを穿はいて、深い靴を鳴らして、その辺を往つ
たり来たりする様子が、どうしても学校の教師か、女
生徒である。東京でこそ外へさえ出れば、向うから眼
の中へ飛び込んでくる図だが、渺茫びようぼうたる草原くさはらのいず
くを物色したって、斯様かような文采ぶんさいは眸ひとみに落ちるべきは
ずでない。余はむしろ怪しい趣おもむきをもって、この女の
姿をしばらく見つめていた。

室に帰つてまた寝た。眼が覚めると窓の外で虫の声
がする。淋さびしくなつたから、西洋間へ出て、長椅子の
上に腰をかけて、謡うたいをうたつた。無論出鱈目でたらめである。

そこへ下女が来た。先刻さつきの女の事を聞いたら、何でも宅うちで知ってる人なんでしょうと云っただけで、ちつとも要領を得ない。昨夕ゆうべ飯を済まして煙草たばこを呑のんでいると急に広間の方で、オルガンを弾ひく音がしたが、あの女がやったんじゃないかと聞くと、いいえ昨夕のは宅の下女ですと云う。この原のなかに、それほどハイカラな下女がいようとは思いがけなかった。先刻の袴はもう帰ったそうである。

余は一人長椅子の上に坐すわった。そうして永い日が傾かたむき尽して、原の色が寒く変るまでぽかんとしていた。すると静かな野の中でどうぞ、ちと御遊びに、私一人

ですからと云う嬌なまめかしい声がした。その音調は全くの東京ものである。余は突然立つて、窓の外を眺めた。あいにく窓には寒冷紗かんれいしやが張つてあつた。手早く硝子ガラスを開けて首を外へ出すと、外はもう一面に夕暮れていて、蒼い煙あおが女の姿を包んでしまったので誰だか分らなかった。

橋本の連中はその晩歸つて来た。下女のしらせで、暗い背戸せどに出て見ると、豆のような灯ひが一つ遠くに見えた。下女はあれが連中だと云う。いくら野広のびろいところだつて、橋本以外にも灯が見える事もあるだろうと尋ねても、やっぱりあれだと云う。はたしてそうで

あつた。灯は夕方宿から迎^{むかえ}に出した支那人の持つて
行つた提灯^{ちようちん}である。背戸口に馬を乗り捨てた橋本は、
そう骨を折つて見に行く所でもないよと云つた。大重
君は馬から三度落ちたそうである。

四十五

奉天へ行つたら満鉄公所^{まんてつこうしよ}に泊^{とま}るがいと、立つ前には
是公^{ぜこう}が教えてくれた。満鉄公所には俳人肋骨^{ろっこつ}がいるは
ずだから、世話になつても構わないくらいにずるい腹
は無論あつたのだが、橋本がいつしよなので、多少遠

慮した方が紳士だろうという事に相談がいつか一決してしまった。停車場には宿屋の馬車が迎えに来ていた。

ステーション

やはり泥の中から掘出して、炎天で乾かしたように色が変わっている。荷物と人間をぐるに乗せて、構内を離れるや否や、御者が凄じく鞭を鳴らした。峠を越す

ぎよしや

すさま

むち

とうげ

いなか

田舎の乗合馬車よりも手荒な取扱方である。広い通り

はそれほどでもないが、しだいに城内に近づくに従って、今まで野原同然に茫々としていた往来が、左右の

ぼうぼう

おうらい

店の立込んで来ると共に狭くなる上に、鉄道馬車がその真中を駆けつつあるにもかかわらず、烈しい鞭の影は一分に一度ぐらいはきつと頭の上で閃めいた。馬は

たてこ

ひら

無理にも急がなければならない。けれども奉天だけ
あつて、往來の人は馬車の右にも左にも、前にも後にも、
のべつに動いている。そこへ騾馬らばを六頭も着けた
荷車がくるのだから、牛を駆るようにのろく歩いたつ
て危ない。それだのに無人むにんの境さかいを行くがごとくに飛
ばして見せる。我々のような平和を喜ぶ輩ともがらはこの車
に乗っているのがすでに苦痛である。御者はもちろん
チャンチャンで、油に埃ほこりの食い込んだ辮髪べんぱつを振り立
てながら、時々満洲の声を出す。余は八の字を寄せて、
馬の尻をすかしつつ眺めた。そうして、みだりに鞭を
瘠やせ骨に加えて、旅客の御機嫌ごきげんを取るのは、女房を叱つ

て佳寶まろうどをもてなすの類たぐいだと思つた。

現ほくりように北陵から歸りがけに、宿近く乗りつけると、左

り側に人が黒山のようにたかっている。その辺は支那

の豆腐やら、肉饅頭にくまんじゅうやら、豆素麵まめそうめんなどを売る汚きたない店

の隙間すきまなく並んでいる所であつたが、黒い頭の塊かたまつ

た下を覗のぞくと、六十ばかりの爺さんが大地に腰を据すえ

て、両脛りようすねを折つたなり前の方へ出していた。その右

の膝ひざと足の甲の間を二寸ほど、強い力で刳えぐり抜ぬいたよ

うに、脛の肉が骨の上を滑すべつて、下の方まで行つて、

いっしよに縮ちぢれ上つている。まるで柘榴ざくろを潰つぶして叩たたき

つけた風に見えた。こう云う光景には慣れているべき

はずの案内も、少し寒くなったと見えて、すぐに馬車を留めて、支那語で何か尋ね出した。余も分らないながら耳を立てて、何だ何だと繰返して聞いた。不思議な事に、黒くなつて集つた支那人はいずれも口も利かずに老人の創きずを眺めている。動きもしないから至つて静かなものである。なお感じたのは、地面の上に手を後へ突うしろいて、創口きずぐちをみんなの前に曝さらしている老人の顔に、何らの表情もない事であつた。痛みも刻まれていない。苦しみも現れていない。と云つて、別に平然ともしていかない。気がついたのは、ただその眼である。老人は曇どんよりと地面の上を見ていた。

馬車に引かれたのだそうですと案内が云った。医者
はいないのかな、早く呼んでやったらいいだろうにと
間接ながら窘たじなめたら、ええ今にどうかするでしょう
という答である。この時案内はもう本来の氣分を回復
していたと見える。鞭むちの影は間もなくまた閃ひらめいた。
埃ほこりだらけの御者ぎよしゃは人にも車にも往来にも遠慮なく、
滅法無頼めつぼうむらいに馬を追った。帽も着物も黄色な粉こを浴びて、
宿の玄関へ下りた時は、ようやく残酷な支那人と縁を
切ったような心持がして嬉うれしかった。

支那の古家ふるいえをそのまま使つてゐるから、御寺の本堂を

客間に仕切つたと同じようである。釣り廊下を渡つて

正面の座敷を覗くと、骨董のぞがいっぱい並べてあつたの

で、何事かと思つたら、北京ペキンへ買出しに行つた道具屋

が、帰り途にここで逗留とうりゆう中の見世みせを張つたのだと分つ

たから、冷し半分這入はいつて見てゐるうちに、時間が来

たので、外へ出た。今度は車だから好かろうと安心し

て、ちよつとハイカラに膝頭ひざがしらを重ねて反り返そつて見

たが、やはりけつして無難ではない。人力は日本人の

発明したものであるけれども、引子ひきが支那人もしくは

朝鮮人である間はけつして油断してはいけない。彼等は
どうせ他の拵ひとこしらえたものだという料簡りようけんで、毫ごうも人力
に対して尊敬を払わない引き方をする。海城かいじょうという
ところで高麗こまの古跡こせきを見に行つた時などは、尻が蒲団ふとん
の上に落ちつく暇がないほど揺れた。一尺ばかり跳はね
上げられる事は、一丁の間に一度は必ずあつた。しま
いに朝鮮人の頭をこきんと張つけてやりたくなつた
らい残酷に取扱われた。奉天の道路は海城ほど凸凹でこぼこに
でき上つていないから、むやみに車の上で踊をおどる
苦痛はないが、その引き方のいかにも無技巧で、ただ
見境みさかいなく走かけさえすれば車夫の能事のうじおわ畢ると心得ている

点に至つては、全く朝鮮流である。余は車に揺られながら、乗客じようかくの神経に相應の注意を払わない車夫は、いかによく走かけたつて、ついに成功しない車夫だと考えた。

そのうち大きな門の下へ出た。奉天へ前後四泊した間に、この門を何度となく潜くぐった覚おぼえがある。その名前も幾度いくたびとなく耳にした。ところがそれを忘れてしまった。その恰好かつこうもはなはだ曖昧あいまいに頭に映るだけである。しかし奉天の市街まちに入いつて始めて埃ほこりだらけの屋根の上に、高くこの門を見上げた時は、はあと思った。その時の印象はいまだに消えない。橋本といつしよに

この門の傍そばにある小さな店に筆と墨を買いに行つた折の事も、寂さびた経験の一つとしてよく覚えてゐる。その時橋本は敷居を跨またいで、中へ這入はいつた。余も橋本に続こうとして身体を半分廂ひざしから奥へ差し込んだが、支那の家に固有な一種の臭においが、たちまち鼻に感じたので、一二歩往来の方へ出て佇たたずんでいた。今云う門は十間ばかり先の四辻よつつじにあるので、余は烏打帽の廂に高い角度を与えてわざわざ仰あおむいて見た。時刻は暮に近い頃だったから、日の色は瓦かわらにも棟むねにも射さないで、眩まばしい局部もなく、総体が肅然しゆくぜんと喧かまびすしい十字の街まちの上に超越していた。この門は色としては、古い心

持を起す以外に、特別な采あやをいっこう具えていなかった。木も瓦も土もほぼ一色ひとついろに映る中に、風鈴ふうりんだけが器用に緑を吹いていただけである。瓦の崩くずれた間から長い草が見えた。廂の暗い影を掠かすめて白い鳩が二羽飛んだ。余は久しぶりに漢詩というものが作りたくなつた。待っている間少し工夫して見たが、一句も纏まとまらないうちに、橋本が筆と墨を抱かかえて出て来たので興趣きようしゆは破れてしまった。

このほかにこの門から得た経験は、暗い穴倉れんがのなかで、車に突き当りはしまいかと云う心配と、煉瓦れんがに封じ込められた塵埃ちりほこりを一度に頭から浴びると云う苦痛

だけであつた。余の車屋はこの暗い門の下を潜つて、城内の満鉄公所まで、悪辣無双あくらつむそうに引いて行つた。余は生きた風呂敷包のごとく車の上で浮沈ふちんした。

四十七

茶を飲むと、酸すいような塩はゆいような一種の味がある。少し妙だと思つて、茶碗を下へ置いてゆっくり橋本の講釈を聞いた。その講釈によると、奉天には昔こんにちから今日に至るまで下水と云うものがない。両便の始末は無論不完全である。そこで古来から何百年となく

奉天の民が垂れ流した糞小便くそしょうべんが歲月の力で自然天然じねんてんねんに地じの底に浸しみ込んで、いまだに飲料水たに崇たりをなしているんだと云う。一応はもつともだが、説明が少し科学的でないようである。第一それほどの所なら穀類野菜ともに、もつとよくできなければならぬはずだと思つたが、馬鹿ばか氣けているから議論もしなかつた。橋本もこれは伝説だよと断つた。伝説と云えば日本武尊の東夷征伐と同種類に属すべきもので、眞偽以外に、重く取扱わねばならぬ筋の來歴を有しているに違ちがひない。いかにも汚きたない国民である。

湯を立てて貰はつて這い入いつて見ると、濁にごっている。別

に黄色く濁っている訳ではないが、御茶の味から演繹えんえきすればやつぱり酸すっぱい湯に浸つかっているとよりほかに考えようがない。鹹水しおみずにも溶とけるとか云つて大連でくまめシャボンまめシャボンれた豆石鹼こうりでも、行李の底から出せばよかつたと思つた。風呂場も風呂桶おけも小さいものである。その上下女が出て来て背中を流してくれる。窮屈に身体を曲げながら、御前は日本人だろう。日本はこの生れだいなどと話をした。この下女は始めて宿へ着いた時、余を橋本の随行と間違えて、そら何とかさんもいつしよにいらしたと云つた。その何とかさんは橋本が蒙古もっこへ行くとき、彼と同じくここへ泊つた事があるのだそう

だ。顔が似ているから間違えたのか、様子が御供らし
いから間違えたのかは、つい聞き糺ただして見なかった。
窓の外に大きな甕かめが埋いけてある。我々の汗や垢あかが例の
酸っぱい水といっしょになって、朝に晩に流れ込んで
いるのだから、時々汲くみ出さなければ溢あふれるほど溜ためつ
てしまう。それを支那の下男が石油缶へ移して天秤棒てんびんぼう
で担かついで、どこかへ持つて行く。風呂に浸つかりながら、
どこへ持つて行くんだろうなと考えた。余計な心配の
ようだが余はこの汚水が結局どう片づけられるかの処
置を想像して見て、少しく恐ろしくなった。

これできて御馳走ごちそうがむやみに出る。胃の悪い余のご

ときものは、御膳おぜんの上を眺めただけで、腹がいっぱいになってしまふ。夜は緞子じんすの夜具に寝かしてくれる。店の方では電話が仕切なしにちりんちりと鳴っている。品のひん好い御神おかみさんが、はあもしもしを乃別のべつに繰返す。或る時チョコレート菓子かしが食いたくなつたから、下女に有るかいと聞いて見ると、すぐもしもしで取り寄せてくれた。のみならず満鉄公所へ御馳走を受けに行けば、三鞭シヤンバンが現れる。領事館へ挨拶に行けば、英吉利イギリスの王様の写真などが恭々うやうやしく飾つてあつて、まるで倫敦ロンドンのような氣持になる。そうかと思うと、宿の座敷の廊下の向うが白壁で、高い窓から光線が横に

這入はいつて来るのは仕方がないが、その窓に嵌はめてある障子しょうじは、北齋ほくさいの画かいた絵入さんごくしの三國志に出てくるような唐からめいたものである。しかもあまり綺麗きれいではない。その上室へやの中が妙な臭においを放つ。支那人が執拗しゅうねく置き去おきざりにして行つた臭だから、いくら綺麗好きの日本人が掃除をしたって、依然として臭い。宿では近々きんきん停車場ステーション附近へ新築をして引移るつもりだと云っていた。そうしたら、この臭だけは落ちるだろう。しかし酸っぱい御茶は奉天のあらん限り人畜たたに崇たるものと覚悟しなければならぬ。

四十八

黒い柱が二本立っている。扉も黒く塗つてある。鉾は飯茶碗を伏せたように大きく見える。支那町の真中にこんな大名屋敷に似た門があらうとは思いがけなかった。門を這入るとまた門がある。これは支那流にできていた。それを通り越すと幅一間ほどの三和土が真直に正面まで通っている。もつとも左右共に家続きであるから、四角な箱の中をがらん胴にして、その屋根のない真中を、三和土を辿つて突き当る訳になる。肋骨君の説明を聞いて知つたのだが、この突当りが

正房せいぼうで、左右が廂房しょうぼうである。肋骨君はこの正房の

ひとむね

一棟に純粹の日本間さえ設けている。ちよつと見たま

えと云つて案内するから、後あとに跟ついて行くと、思わざ

る所に玄関があつて、次の間が見えて、その奥の座敷

には立派な掛物がかかつていた。かと思うと左の廂房

の扉を開いてここが支那流の応接間だと云う。なるほ

ど紫檀したんの椅子ばかり並んでいる。もつとも西洋の客間

と違つて室へやの真中まなちうは塞いでいない。周圍に行儀よく据

えつけてある。これじゃ客が来ても向い合つて坐る事

はできない訳だから、みんな隣同志で話をする男ばか

りでなければならぬ。中にも正面の二脚は、玉座ぎよくざと

も云うべきほどに手数てすうの込んだもので、上に赤い
角枕かくまくらが一つずつ乗せてあった、支那人てえものは
呑気のんきなものでね、こうして倚よつかかつて談判をするん
ですと肋骨君が教えてくれた。肋骨君は支那通だけ
あつて、支那の事は何でも心得ている。あるとき余に
向つて、辮髪べんぱつまで弁護したくらいである。肋骨君の説
によると、ああ云うぶくぶくの着物を着て、派出はでな色
の背中へ細い髪を長く垂らしたところは、振ふるえ付つきた
くなるほど好いんだそうだから仕方がない。実際肋骨
君が振え付ふるきたくなると云う言葉を使つたには驚いた。
今でもこの言葉を考え出しては驚いている。いっぺん

汚^{きた}ない爺^{おや}さんが泥鰌^{どじょう}のような奴^{やつ}をあたじけなく頸筋^{くびすじ}へ垂^たらしていたのを見て、ひどく興^{きよう}を覚^さしたせいだろう。

これほどの肋骨君も正房の応接間は西洋流で我慢している。その隣の食堂では西洋料理を御馳走^{ごちそう}した。それから襯衣^{シャツ}一枚で玉を突く。その様子はけつして支那じゃない。万事橋本から聞いたより倍以上活潑^{かつぱつ}にできているところをもつて見ると、振え付きたいは少々言い過ぎたのかも知れない。肋骨君は戦争で右か左かどっちかの足を失^なくした。ところがそれがどっちだか分らないくらい、自由自在に起^たつたり坐^{すわ}つたりする。そうして軍人に似合わないような東京弁を使う。どこ

で生れたか聞いて見たら、神田だと云った。神田じゃそのはずである。要するに肋骨君は支那好であると同じ時に、もつとも支那に縁の遠い性質たちの人である。

室へやは空あいてるから来たまえとしきりに云つてくれるので、じゃ歸りに厄介になるかも知れないと云うとすぐ宜よろしいと快諾したところだけは旨うまかったが、歸りによなかは夜半の汽車で奉天へ着く時間割だと橋本から聞くや否や、肋骨君はたちまち宿泊を断った。いや、あの汽車じゃ御免ごめんだと云う。もう一つの汽車が好いじゃないかと勧めるんだが、プログラムの全権があいにくこつちにないので、やむをえず、そんなら、もし夜半の汽

車でなかったら泊めて貰おうと云う条件をつけた。すると肋骨君はまた宜しいと答えた。ところが帰りにはやつぱり予定通夜半着の汽車へ乗ったのでとうとう満鉄公所へは泊まらない事になった。満鉄公所で余の知らない所は寢室だけである。

四十九

右へ折れると往来とは云われないくらい広い所へ出たのでようやく安心した。これならば人を引殺す心配もなかろうと思って、案内をしてくれる、宿の番頭を

相手に、行く行く話をした。満洲の日は例によって
秋毫しゅうごうの先を鮮あやかに照らすほどに思い切ったものであ
る。眉深まぶかに烏打帽を被かぶつても、三日月形みかづきがたの廂ひさしでは頗
から下をどうする事もできないので、直下じかに射いりつけ
られる所は痛いくらいほてる。そこへ馬の蹄ひづめに搔かき
立てられた軽い埃ほこりが、車の下から濛々もうもうと飛んで来る。
番頭は、結構な御日おひより和です、少し風でも吹いたらこん
なものじゃありませんと喜んでゐる。そのうち馬車きが
家を離れて広い原へ出た。原だから無論樹も草も見え
ないのは当然だが、遠く眺めると、季節だけに青いも
のが際限のない地の上皮うわがわに、幾色かの影になって、一

面に吹き出している。なぜこれほどの地面を空しく明けておくかは、家屋の発展に忙殺ぼうさいされつつある東京ものの眼には即時の疑問として起る訳であるが、この際はそれよりも窮屈な人間を通り抜けて晴々せいせいしたと云う意識の方が一度に余の頭を照らした。路は固もとよりついていない。東西南北共に天に作つた路であるから、轍わだちの迹は行く人の心任せに思い思いの見当けんとうに延びて行く。

支那人の馬車が来た。屋根に蒲鉾かまぼこ形の丸味を取った棺かんのようなもののなかに、髪を油で練固ねりかためた女が坐っている。長柄ながえは短いが、車の輪は厚く丈夫なもので

あつた。云うまでもなく騾馬らばに引かしている。まず日本
の昔に流行はやった牛車うしぐるまの小ぢんまりしたものと思え
ば差支さしつかえないが、見たところは牛車よりもかえつて雅
である。その代り乗つてゐる人間は苦しいそうだ。余は
この車のごろごろ行くとこゝろを見て、輓げいたり※げつ「#「車
+兀」、555-3」たりと形容したくなつた。輓げいの字も※「#
「車+兀」、555-3」の字も判然たる意味を知らないのだが、
乗つてゐる人は定めて輓※げいげつ「#「※」は「車+兀」、555-4」
たるものに相違なかつたかと思つたからである。実を云
うと輓※「#「車+兀」、555-5」たるものは支那の車ばか
りではない。こう云う自分もはなはだ危あやしかった。一

望して原だよと澄ましていればそれまでの事で、仰おおせ

のごとく平たいらにも見えるが、いざ時間に制限を切つて、

突切つつきつて見ろと云われると、恐ろしく凸凹でこぼこができてく

る。おいここで馬車の引っくり返る事はあるまいなど

番頭に念を押すと、番頭はええ、まあたいてい大丈夫

でしょうと云うだけで、けっして万一を受け合わない。

どうも並んでいる番頭の座が急に高くなつて、番頭そ

のものが余の方に摺落ずりおちて来そうになつたり、または

あべこべに、余が番頭のシャツポの上に顛こころび落ちそう

になるのは心好こころよくないものである。余は神経質で臆病

な性分しょうぶんだから、車が傾くたんびに飛び降りたくなる。

ぎよしや

しかるに人の気も知らないで、例の御者が無敵に馬を馳^かけさせる。いらぬ事だと冷や冷やしているうちに、

一カ所路の悪い所へ出た。原因は解らないが、轍の迹が際^{きわ}立つて三四十本並んでいる。しかもその幅がいず

れも五六寸ある。そうして見るからに深そうに、日影を遮^{よそぎ}つて、奥の方を黒くかつ暗くしている。我々の

御者は平氣にそこへ乗り込んだ。順当に乗り込んだのならまだよかつたけれども、片方の輪だけが泥の中へぐしやぐしやと滅^めり込むと同時に、片方は依然として固い土に支えられている。余は泥側^{どろがわ}に席を占めていた。すると足が土と擦^すれ擦^すれになるまで車が渾^{ぬか}海^{るみ}に沈んで

来た。番頭は余の頭の上にあるごとく感ぜられた。余はたまらなくなつて、泥の中へ飛び下りた。

五十

原が急に叢くさむらに変化するの不思議であつた。ここにこれだけの樹きが生えるなら、原の中ももう少し茂つて然るべきであるしかと気がついた時はすでに車の両側が塞ふさがつていた。竹こそないが、藪やぶと云うのが適當と思われるくらいな緑の高さだから、日本の田舎道いなかみちを歩くようなおとなしい感じである。ところどころ細い枝な

どが列を外れて往来へ差し出ているのを、通りながら
潜り抜けたり、撓わしたりして行き過ぎるのが何より
愉快だった。路も先刻よりは平たくなって、真白に草
と木の間を貫いている。ある所には大きな松があつ
た。葉の長さが日本の倍もあつて色は海辺のそれより
も黒い。ある所は荒れ果てた庭園の体に見えた。そう
云う場所へ来ると、馬車の上から低い雑木を一目に二
丁も眺められる。向うに細長い石碑が立っていた。模
様だけが薄く見えるが、刻字は無論分らなかった。

しばらくすると、路が尽きて高い門の下へ出た。門
は石を畳んだ三つのアーチからでき上っているが、

アーチの下まで行くにはだいぶ高い石段を登らなくてはならない。門の左右には大きな竜が壁に彫り込んであった。これが正門ですがね、締切りだから壁へ添いて廻るんですと云つて、馬を土堤のような高い所へ上げた。右は煉瓦の壁である。それがところどころ崩れかかっている。左はだらだらの谷で野葡萄や雑木が隙間なく立て込んだ。路は馬車が辛うじて通れるぐらい狭い。そこを廻つて横手の門から車を捨てて這入ると、眼がすつきりと静まった。一抱もある松ばかりが遥の向まで並んでいる下を、長方形の石で敷きつめた間から、短い草が物寂びて生えている。靴の底が

石に落ちて一步ごとに鳴った。一丁ばかり行つて正面に曲ると、左右に石の象がいた。大きくつて、鷹揚おうようで、しかも石だからはなはだ静かである。突き当りにある楼門のような所へ這入ったら、今度は大きな亀の背にしょうとくひ頌徳碑が立ててあつた。亀も大きかったが、碑も高い。蒙古と満洲と支那の三国語で文章が刻つてある。後へ出ると隆恩門りゅうおんもんと云うのが空に聳そびえていた。積み上げたアーチの上を見ると三層あつた。左右に回めぐらしてある壁も尋常ではない。あの上を歩いて見たいと番頭に頼むと、ええ今乗つて見ましよう云つて中へ這入つた。中は真四角に仕切つてある。正面にある廟びようの横

から石段を登って壁の上へ出ると、びよう廟の後うしろだけが
はんげつけい半月形になつていわゆるほくりよう北陵を取り巻いている。

支那の小僧がはだし跣足でつ跟いて来た。番頭をつち捕まえてし
きりにこそそこそ何か云っている。番頭に聞くと、ええ
なにと曖昧あいまいな答をする。また聞き返したらこう云つた。

——屋根のひさし廂の所に着けてある金の玉を、この間一
つ落ちた時に、拾つておいたから、買つてくれと云う
んです。おもてむき表向にするときび厳しいものですから、こうし
て見物に来た時、そうつと売りつけようてんで、支那
人はじつ実にこうかつ狡猾りようもりですからね。

支那の陵守も無論狡猾だろうが、金の玉を安く買

おうと云う番頭もあまり正直な方じゃない。番頭は
そつと銭ぜにをやつて金の玉をポケットへ入れたようであ
る。

壁の上を歩くと太い樹が眼の下に見える。桑があん
なに大きくなつてますと番頭が指ゆびさした。なるほど

ひとかかえ

一抱もある。この四角な壁の側は長さどのくらい

ひとかわ

かねと尋ねると、へえ今勘定かんじようして見ましようと言

ひとあし

ながら、一步二尺の割で、一二三四と歩いて行つた。

みおろ

余は壁の外を見下して、そこらを絡からんでいる赤い木の

実を眺めていた。せつかく番頭の勘定した壁の長さは
忘れてしまった。

撫順ぶじゆんは石炭の出る所である。そこの坑長こうちやうを松田さんと云つて、橋本が満洲に来る時、船中で知己ちかづきになつたとかで、その折の勧誘通り明日あす行くと云う電報を打った。汽車に乗ると西洋人が二人いた。朝早いので、客車内で持参の弁当が何か食つていたが、撫順に着いたら我々といつしよに汽車を降した。出迎えのものが挨拶あいさつしているところを聞いて見ると、そのうちの一人は奉天の英国領事であつた。我々もこの英人等といつ

しよに炭坑の事務室に行つて、二階で松田さんに逢つた。松田さんは縞しまの縮ちぢみの襯衣シャツの上に薄い背広を着ていた。背の低い気軽な人なので、とうてい坑長とは思えなかった。我々と英国人を二所ふたところに置いて、双方へ向けて等分に話をした。橋本も余も英語はいつさい口にしなかった。したがつて英人とは言葉を交まじえなかった。

やがて松田さんが案内になつて表へ出た。貯水池の土堤どてへ上ると、市街が一目に見える。まだ完全にはでき上つていないけれども、ことごとく煉瓦れんが作りである上に、スチュジオにでも載りそうな建築ばかりなので、

全く日本人の経営したものとは思われない。しかもその洒落^{しやれ}た家がほとんど一軒ごとに趣^{おもむき}を異^{こと}にして、十軒^{といろ}十色とも云うべき風に変化しているには驚いた。その中には教会がある、劇場がある、病院がある、学校がある、坑員の邸宅は無論あつたが、いずれも東京の山の手へでも持つて来て眺めたいものばかりであつた。松田さんに聞いたら皆日本の技師の拵^{こしら}えたものだと言われた。

市街から眼を放して反対の方角を眺めると、低い丘の起伏している向うに煙突の頭が二カ所ほど微^{かす}かに見える。双方共距離はたしかに一里以上あるんだから広

い炭坑に違ない。松田さんの話しによると、どこをどう掘つても一面の石炭だから、それを掘尽くすには百年でも二百年でもかかるんだそうである。我々の立っているつい傍そばでも、八百尺と九百尺のシャフトを抜いていた。

事務所へ歸つて午餐ひるめしの御馳走ごちそうになつたとき英国人は箸はしも持てず米も喰えず氣の毒なものであつた。この領事は支那に十八年とかいたと云うのに、二本の箸を如何いかんともする事のできないのは案外である。その代り官話かんわは達者だそうだ。松田さんは用事が忙いそがしいとかで、食卓へは出て来られなかった。接待役として松田

さんに代った人は、英語で英国人に話したり、日本語で余等に話したりはなはだ多事であつた。けれども橋本氏も余もこの時まで英語はいっさい使わなかつた。元来英人と云うものはプラウドな氣風を帯びていて、紹介されない以上は、他に向つて容易に口を利かない。だから我々も英人に対しては同様にプラウドである。

食後は坑内を見物する事になつた。田島君という技師が案内をしてくれた。入口で安全灯を五つ点して、杖を五本用意して、それを各自に分けて、一間四方ぐらゐの穴をだらだらと下りた。十四五間行くか行かないに坑のなかは真暗になつた。カンテラの灯は足元を

照らすにさえ不足である。けれども路は存外平らで、

てんじょう

天井もかなり高かった。右へ曲つて、探るようになりて行くと、余のすぐ前にいる田島君がぴたりとまった。余もとまった。案内がとまったから、あとから続いて来たものもことごとくとまった。ここに腰かけがあります。坑へ這入るものはここで五六分休んで眼を慣らすんですと云った。五人は休みながらカンテラの灯で互の顔を見合わした。みんな立って黙っている。腰をおろすものは一人もない。静かな中で時の移るのは多少凄^{すし}かった。そのうち暗い所が自然と明るくなって来た。田島君はやがて、もうよかろうと云つて、

またすぐ右へ曲つて、奥へ奥へと下りて行つた。余も
続いて下りた。あとの三人も続いて下りて来た。

ここまで新聞に書いて来ると、大晦日になつた。
二年に亘るのも変だからひとまずやめる事にし
た。

底本…「夏目漱石全集7」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年4月26日第1刷発行

底本の親本…「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

入力…柴田卓治

校正…伊藤時也

1999年6月20日公開

2004年2月28日修正

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。